
ATR

パイロガスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ATR

【Nコード】

N1340T

【作者名】

パイロガスト

【あらすじ】

地底世界の新米錬金術師だった地底人種のエバン・ニード。

降って沸いた卒業試験から始まり、仲間とはぐれたり・裏切られたり・うっかり死にかけたり。

遂には神様の仲間入りしちゃいました。

結婚しても居ないのに息子も出来たけど、腕を失くして隻腕になったり。

……あれ？　なんか不幸になってない、俺？

仲間とも合流出来たけど、記憶喪失だし妹とは生き別れ……うん？
ホントに幸薄くない、俺達？

こんな俺達の明日はどっちだ！？

ブログ 自己紹介をしよう

「今日も今日とていつもの天井……。」

いきなり過ぎて何だか判らないって？

何故かってーと、強いて言うなら、ここが地底で俺が地底人だからだ。

東・西・南・北 どこを向いても土か岩の天井が続く。たまに石樹せきじゆやら魔物やらも目に入るが俺達、地底に住む民には概ねおおむそうだ。

勿論、陽の当たる土地も僅かだがあるし地上に生える様な草木も見かける。しかし、強い日差しで焼けどや失明を起こしてしまう俺達、地底人種には良い事ばかりでも無い。

何が言いたいかと言うと、ただ単に勉強に向かうのが憂鬱ゆううつなだけとも言っ。

此処まで聞いてくれたついでに、俺についても、もう少し話そうかな……。

俺は地底で一番多い人種である地底人種で、エバン＝ニードと言う。基本、名は先に告げた方になるよ。

年は18になったばかりで錬金術師見習い。

師匠に学んでもう4年になる、そろそろ見習いの文字が取れても良いと思うかな？

先に触れたけど、地底人の種族的特長により色素欠乏しきそけつぼうの白い肌と紅い瞳の色をしている。陽射しに弱い為に皆それぞれのサンングラス入り仮面などを持つのが一般的で、俺はダイヤ型に成形された額当てにサンマスク機能を持たせた物を使っている……。

改造してサンマスク部分を押し上げ留めておける機構きこうを付けた力作だ！

それともう一つ、線の細く力が弱いのを逆手に取って俺専用に開発した鞭の様にしなり、絡む武器であるギミックソードと言う剣をメインウェポンに据えている。

俺の目指している錬金術師はこの様に、少し毛色の違う道具や武器を製作したり鉱石や布・素材の練成したりが仕事になる……、いずれは魔力の籠かごもった品なんかも作ってみたいと思っている。

それに師匠を見る限り、見入りも良い方にみただし♪

俺が師事している師匠は拠点を持ち、地域に根ざした錬金を行うタイプの術師なんで当然、俺も天井大空洞より一週間程南下した位置に建つ大国、ここハウルベル魔道国に属している。

この国は地価が高く、駆け出しには街中に単独で居を構えるのは難しいので家事・掃除を対価に工房の離れを使わせてもらっている状態だ。

そんなもんだから人並み以上に料理の腕もあつたりする。

閑話休題 かんわきゅうだい

次に何故にこの国が魔道国なのか？ と言うと、人口に対して地底人……更には魔術師と言う人種が多く住み、国王からして高位の魔術師であるからでもあるし、また地底人種自体も生まれつき高い魔術との親和性^{しんわせい}を有している事にも起因する地底における魔術の中心の一つだ。

ようは習得し易い体質なのだ。

なので、俺みたいに錬金術師^{じゆんぎんし}を志^しす者は稀^{まれ}だつたりする。

ちなみに有名な魔道に自然魔術・神聖魔法・召喚術・錬金術・特殊能力があり上げた順に知名度が下がる。

残念ながら魔道にはあまり詳しくないので師匠に習った事に依^よると、自然魔術は世界の構成要素を読み解き魔力による干涉と魔法陣、祝詞^{のりと}による構成で結果を得る学問魔法と言う分類らしい。

祝詞は錬金術でも使用するので少しはわかる。 あくまで少しだ

けどぞ。

神聖魔法は地・水・火・風・光・影・時空・輪廻りんねの8柱はちすゐの神に祈る事で神力を借りる技法と聞いたな。

神力とは魔力の様なものだと思うが借りるとは何だろう？　そもそも、貸し借り出来るものなんだろうか？

いずれ聞いて見たいね。

召喚術・特殊能力については俺の生活範囲に居ないし実体も曖昧で良くわからない。　錬金術については先に言った感じだろうか。

後は商工業だろうが今回は後回しで。

もちろん、冒険者ギルド等の相互扶助団体も幾つか存在する。

こんな所だろうか……。　

「エバン君、私はお茶が飲みたいんですけど？　妖精さんと話してないでさっさか用意して下さいな？」

「ハ―イ、ただ今。」

と言っわけで師匠が呼んでるみたいなんで、そろそろ行くよ。

また会える事を楽しみにしてる。

プロローグ2 卒業試験は突然に。

「そうだ！ いきなりですが、卒業試験をやりましょう！-！」

えっと……。えらい、ええ笑顔で爽やかに何をのたまうのですよう？ 我が師は？

生暖かい目で眺めていると。

「おやゝあ？ 何か不満そうですねー？ そろそろ良い頃合いだと思っていたのですが、まだまだ半人前ひよこがお好みですか？」

俺より凄まじい生暖かな目線返し。

（いい歳して拗ねないで下さい。）

「いやいやいやいや、師匠。不満はありませんが、いきなり過ぎませんか？」

怯みながらも何とか返すも多分、意味なんて無い。

こんな感じで始まった週末の午後。

これが俺の師匠、ハチガネ「マクスウェル。

完全に中年の筈なのに妙に爽やかで年齢不詳、口を開けば何気に辛口……。そして無駄に高身長（羨ましい！）

鍊金の腕前も凄まじいが、思いつきと面白さで何でも決める悪癖^{あくへ}持ち^{きもち}。

「そうと決まれば善は急げですよー。課題は私の指定した遺跡から採れる素材を使つての、鍊金物の製作なんてどうですか？」

悪い顔しながら更に言う。

「私を唸らせるモノが作れたら、特別ボーナスとしてもう使わなくなつた工房を譲つても良いですよ？」

驚き過ぎて即、反応した自分が恥ずかしい。けど、

「マジっすか！？ 師匠……と、言うか正気ですか？」

あまりにも破格の条件だったので、思わず突っ込んでしまつてからこの対応は拙^{ます}かつたかな？ と身構えるが今は不問にしてくれらしい。

（いくら使わないとは言え、鍊金術を本格的に行^い使^じするにはそれなりの設備がある。

安く済まそうと思っても150万札は必要だろう。

俺が驚くのも仕方ないと思う。）

心の中で弁明していると、

師匠が取り置き of 煙草を咥え、簡易地図を広げ迷い無く一箇所に丸印をつける。

「ここ丸印がまだ冒険者をしていた時分に潜った事のある石柱遺跡の大体の場所です。」

「潜った感触としては底が知れず、なかなかに楽しめそうな雰囲気のある遺跡で継続的に利用出来そうでした。しかし、いかんせん今の貴方では少し荷が勝ち過ぎていると思われるので冒険者の手を借りる事を推奨します。」

幾分か真剣な表情で、

「そして、くれぐれも死なない様にw」と、のたまった。

微笑みながらも、さり気なく不吉な事を言いましたね……、今？

「いやいや、気を抜いては危険な位にはヤバイ遺跡なものでね。しかし、それ位で無いと挑戦する意味が薄いでしょう？w w」

そんなやり取りのあった翌日、さっそく冒険者ギルドに出向く事にした。

初めての冒険依頼 1

今日は生憎の濃霧のつむの日、余程の用が無いヒト族は国外への外出が制限される。

まあ、誰も大量の雨粒で圧死などしたくないだろうから禁を破るものはほぼ居ない。

その点、ハウルベルには「ウォータープルーフ完全防水」のアーティファクトが設置されている為、安全が保証されている。しかし、城壁の外堀に関してはその限りではないので注意が必要だ。

もちろん、崩落くらくたとかまでは防げないので過信も禁物。

横道に逸れたけど肝心の冒険者ギルドは外縁に近い西城塞通り奥、歓楽街の裏にありこんな天気だと言うのに活気に溢れている。

素材の買付や師匠の依頼代理等でギルドには良く来ているけど、自分の依頼は初めてなので少し緊張する。

入って直ぐに馴染みの受付係を見つけたのでいそいそと声をかけ護衛・探索依頼を出したい旨を伝える。

すると、いつもならすんなり書類に記入して依頼できるのだけど、すまなそうにしながら受付のヒューイが確認する。

「危険が予想される遺跡に潜る場合、戦闘に参加するならギルドカードの登録が必要だけど、どうする？」

「ちなみに審査と登録料合わせて1500札になるよ？ 不合格なら返金も可。 後……、破損・紛失に関わらず再交付には三倍の値段が掛かるから気を付けてな？」

あらー、なんか要らん心配をさせたみたいだけど大丈夫。 登録したい旨を伝え試験官とバトンタッチして訓練室に移動する。（1500札は大体、良い値段の食事二食分位。）

「では、まず戦闘能力を測ります。職業はどう申請しますか？」

「アルケミックウォーリアをお願いします。」

「これは珍しい職に就いてるんですねー、武器は持参してますか？」

今日は依頼だけの予定だったので武器が無く貸して貰いたいと伝え、自分のスタイルに近い鞭を二本借り受けた。

聞き取りも済み、準備が整ったのを見計らって試験官が動く。

どうやら試験官のライラスは剣と楯たてを使うオーソドックスな戦士タイプの様だ、俺との相性は良くない。

「用意は良いですか？ では、始めます！」

開幕一番。

号令と同時に大きく飛び離れ牽制を入れつつ距離を取る。

接近戦に持ち込もうとするライラスをいなし、時に打ち据え^す、絡め取る……何とかギリギリでの攻防を繰り返す。

派手なクラップ音と重い風切り音に惹かれチラホラ見学者も出始めたが珍しくも無いし、俺は必死な為に気にはならない。

慣れない武器には上手く操れたが、健闘むなしくスタミナ切れに合わせてシールドストライクを綺麗に貰いあえなくダウン。

流石に本職の前衛には敵わなかったが一応は及第点らしく、ポイントはD+。続けて別室で行った錬金術行使や精神技能でAと悪くないステータスを評価された。

受付に再度変わりギルドカードを交付されてから直ぐ、その足で依頼を済ませた。

怪我の治療もしてもらった。

後から知ったが合格者にはカードとは別に「^{スペース}亜空間バック」のアイティファクトが貸与^{たいよ}されるので遠慮なく借りる事にする。（もちろん、漏れなく『返還^{へんかん}の誓い』の魔術付きだし、大きさは旅行用バック程とたいした大きさでもない。）

随分と優遇されてる様に思うかもしれないが、外はそれだけ危険なのだ。

そんなこんなで出した依頼はこちら←

「依頼料は金4500札か任意の装備品一点の作成。必須条件は前衛職、又は攻撃手段のある術士とした。」

この時、既に致命的なミスをしてしまっていたが、それはまた後話になる。

初めての冒険依頼 2

依頼を出した後、夕食に良い時間になってしまったけど思ってたよ
り懐が寒くな^{ふところ}ってしまつたので、奥に併設^{へいせつ}されている酒場で食べて
帰る事にする。

こちらはメイン出入り口が更に奥、歓楽街に向けて開いているの
だけどギルドから突っ切^つって入店出来る造りになっている。その
日暮らしになりがちな専門冒険者の為にかなりリーズナブルな値段
設定でありがたい。もちろん、ギルド関係者じゃなくても利用で
きるのも良い所だ。

店の一番人気だと言う辛目に味付けられた唐揚げに、たつぷりの
サラダとライ麦パンセットを一心不乱^{いっしんがん}にがつつしていると美人のお
姉さんに声をかけられた。

「お食事中にすみません、依頼を出されているエバン＝ニードさん
でしょうか？」

座っている俺に視線を合わせながら流れてくる髪をかきあげて言
う。

とても瞳が大きく愛らしい印象があるのに、ブラックレザーに白
いファアのついたパンクスーツに高めのヒールブーツを履きワイル
ドな雰囲気で防具は最低限のパーツのみ、身長程に長い杖を持つて
いるから術士だろう。

女性にしては高身長で、珍しい滝の様に流れるフォルムのボブの

髪型が似合っている。

ひよっとしなくてもかなりの美人でドキドキしていると。

もう一人。

「依頼を受けたいが、聞いておきたい事が二、三ある。……良いだろうか？」

彼女に集中し過ぎて同行者に気付かなく、どもってしまったが何とか答える。

これは恥ずかしい。

同行者は涼やかなハスキーボイス、漆黒しっこくの半鎧ハーフメイルで背に大剣を背負っている、飾り気は全く無いがゴツく見えない。

髪型は肩口あたりの長さのソバージュ、毛先は不揃いで顔は整っているのに暗い雰囲気があり迫力がある。

先の女性より更に高身長。

身長の高いのばかりでコンプレックスを刺激されるが気にしない！

最初に声をかけて来たのがサーナイアさんで輪廻りんね神官、後からがウアラさんと言って神聖戦士ホーリーウォーリア。

なんと、出身は地上都市で二人とも人間族だそうだ。

お互いの自己紹介を終え本題。　どうも登録試験の様子を見ていて気にしてくれたみたいんだけど、潜る場所の情報を載せ忘れて居た為に危険度が計れなくて迷っていたとの事。

教えて貰えて良かったと思いつつ、今回は卒業試験の課題で師匠から指定された石柱遺跡せきちゆういせきに潜り何かしらのレア素材を得たい事。

場所はハウルベルから徒歩で二日程南に向かった石柱の乱立する森の中にあり、生態系・魔法生物系・虫系の魔物の出現が予想される事。

得られた一般素材や発掘品は譲る事を伝えた所、少し魔物傾向に難色を示されたが晴れて契約成立。

装備を整えた後、明日早くに正面門に集合との約束をして別れた。

決まってから実感してるけど、妙にわくわくして気持ちが落ち着かないや。

安くても良いから二人に合う道具か消耗品でも作ろうか？　それとも必要そうな装備品を練成れんせいしようかな？

何にせよまずは買い物だな！

慣れない旅 1

結局、良く行く薬品店で多目の薬草と解毒薬を幾つか、食料品店で保存食を一週間分買い帰宅。

備え付けにしてある練成陣れんせいじんの中央に沢山の薬草と井戸から汲んで来た水を置き、立てかけられた短杖たんじょうを構える。その先にはオレンジ色で弾丸の様な形をした鉱石が填はまっていて陣と同じ波動を出していた。

深呼吸一つ、精神集中してから祝詞のりとを唱となえる。

『結晶する意思 二つは一つ 痛みと共にその身を晒さらせ』

すると、陣を構成する文字が斑まだらにひかりオレンジの輝かがやきを増す。

目を明けていられない程に光量ひかりりやうが増加した後で不意に輝きが消え、そこには無事に3本の薬ビンが転がっていた……、無事に練成成功！

初級に属する品だけど絶大な効果のあるポーションが出来た。

明日に備えて早めに寝ようとしたけどワクワクが止まらなくてもう一品、起爆剤を作成。こちらは失敗して少量しか出来なかったが一応持っていく事にした。

……翌朝。

案の定、寝不足でつらいが何とか二人と合流。

「おはようございます、エバンさん。昨夜は……あまり良く眠れなかったみたいですネ？」

「旅に寝不足は付き物ですけど、体調管理は大事ですよ。」

はい、いきなり心配されちゃいました。

「……、ゆだんたいてき油断大敵。」

ウアラさんからもいっかげん一言。

「はい、不覚です。」

そんなやり取りもあつたけど街に近い事もあつてか道中、何事も無く中間地点まで来れた。

しかし、旅慣れてない俺の足はボロボロで余計な体力を使つてしまっていた。

ひろくあ疲労具合をみて今夜は早めに野営する事にしちゃうと、二人は

サクサクとキャンプ跡地らしきものを見つけあつと言う間にテントを設営。

「凄いですね！」

鮮やかな手並みに疲れも忘れて賞賛すると「こんなの慣れですよ。」と赤くなりながら誤魔化されてしまった。

褒められるのは苦手なのかな？

「そんな事よりも、足が辛い様なら治療しましょうか？」

そんな申し出に1も2も無く頷いてしまう、気にした風も無く。

「では、体を楽しにしてリラックスして下さいね。」

言う通りに力を抜く。

『神の恩寵おんちように於いて 癒しを与え給えたま 回復リカバリー』

すると、みるみるうちに痛みがひいて違和感も無くなっていく…
…、魔法スゲーな！

「どうやら血豆も潰れていた様ですね。 つかったら早めに言ってくれても良いですよ？ 雇い主なんですから。」

笑いながら言う。 それに、これ位ならあまり自分も疲れないので遠慮しなくても良いとの事。

これは嬉しい誤算だ」

夕食はお礼も兼ねて俺が作る事に、干し肉を水で戻し亜空間から玉葱とピーマンのこま切りを取り出し適度に炒める。

戻し水にコンソメの塊を落とし即席のスープにして二人に渡して野菜炒めに肉を投入、調味料で味をつけてパン切れに盛り付けて完成！

「お手軽料理で悪いけど、どうぞ。」

俺が言うと、かなり嬉しそうに食べてくれた。

ウアラさんにいたっては凄い勢いで黙々と食ついていたくらいだ。

どうやらサーナイアさんは料理が苦手であり、ウアラさんは壊滅的に駄目なんだとか。

いつもは非常食料のみで済ませていたそうで、旅の間の食事は常に難点だったそう。

そこで提案、「道中食べられそうな野草や肉を手に入れてもらえるなら料理を担当するけど、どうかな？」

言うつとすぐさま賛成の声が返ってきた。

これで今朝の失敗も帳消しかな？

今夜は前半をサーナイアが、後半はウアラが見回りの担当になる。

俺は雇い主なんで免除。

二人に後はお願いして先に就寝させてもらった。

慣れない旅 2 〱夜襲〱

「敵襲!!」

見張り番に立っていたウアラさんが大声をあげると、素早く起き出したサーナエアさんが俺を揺り起こす。

寝起きで回らない頭で俺も起き上がりながら二人の後ろに下がり、ギミックソードを取り出し構える。

ウアラさんが真つ先に接敵^{せつてき}、影神の自動発動スキルである『溺愛^{ガード}する闇^{ストーリー}』立ち《ソリッド》上がる幻想^{イマジン}』が発動。

更に神技『追従する影^{ダーク}』を発動して正体不明の敵に切りかかる。

すると、バスタードソードで切り飛ばした相手に同じ姿の影達が殺到、『立ち《ソリッド》上がる幻想^{イマジン}』によって仮初の实体^{かりそめ}を与えられた刃^{やいば}が無数に突き刺さり正体不明は血飛沫をばらまいて絶命する。

俺も負けじとスキル＜魔物知識＞を使い、襲ってきた者の正体进行い出そうとする。

「思い出せた!」

どうやら襲ってきた敵はゴブリンライダー三体とウルフ三体だと

確信。

二人に警告を発する。

「襲ってきたのはゴ布林ライダーとその乗り物にされているウルフ達です。機動力にモノを言わせての突進が得意なので気を付けて！」

案の定、ゴ布林ライダーAが粗末な槍を構え、連携してウアラを挟み撃ちせんと突進しようとしているのに気付き、すかさず背後に回っていたゴ布林ライダーBを二本のギミックソードで絡め取り鎌状かまじょうになっっている先端もしっかり背中に突き刺さる様にして攻撃、動きを封じる。

その意図を察したウアラさんが飛び退き『ガード溺愛ストーカーする闇』が発動しない位置に回避。

見事にゴ布林ライダーAとゴ布林ライダーBは同士討ちし、お互いの槍が心臓や臓器を貫きゴ布林ライダーBも絶命。

ゴ布林ライダーAは転倒状態で瀕死。

マスター達の死に怖じ気づいたウルフ達が逃げるのを許さず『イク追ストーカーする影』で刈り取る。

残ったゴ布林ライダーも転倒したまま返す刃で串刺しやいばにされて絶命。

安全確認後すぐに二人が手早く剥ぎ取りを行い、消えそうだった

焚き火に枯木をくべて一息ついた。

凄まじい神聖戦士の戦いと俺自身の初実戦で気が高ぶり、朝まではまだもう少しあるけど上手く寝れそうに無かったので思いきって二人にプライベートな質問を試してみた。

「お二人はいつからパーティーを組んで一緒に居るんですか？」

すると、ウアラさんがさらっと。

「私達は双子の姉妹だから、そういう意味では産まれた時からずっとだな。」

「……姉妹……。姉妹？　はい！？」

て事はー、ウアラさんは女性！？

思わぬ事実にあっさり30秒程固まってしまった後、失礼に気が付き直ぐ様謝ったのは言うまでもない。

「やっぱりエバンさんも間違えてたんですねー。」

サーナエアさんが心外ですとでも言いた^げ気に言う。

しかし、申し訳無いとしか言えないス（意識すると女性に見えてくるのが不思議だけど、内緒）

お詫びにと言っではなんだけど、と昨夜作って渡しそびれていた
ポーションを手渡してお茶を濁^{にご}しておく。

「……そんなに私は女に見えないか？」

先の戦闘とは全然違う顔で呟くウアラだった。

新しい出会い いざ遺跡へ

その後、遺跡付近まで無事に行き着いた一行の目の前には、幅の広く居丈高いたけだかな葉木や巨大な山菜などが繁茂はんもする森が広がり、その森を切り裂く様に好き勝手な方向に石柱の柱達が屹立きつりつしている。

巨大さの所為せいで遠近感が狂いそうな太さの柱が天井まで届き、所々の天井は崩落ほうらくし地上からの陽光をわずかにだが引き込んでいた。

地上部に水源でも有るのか常に清水が飛沫となって落ちているが、地底の底までは持たず霧状になって土に潤いを与えている様だ。

「凄い光景……。こんな所で陽の光に出会えると思わなかったわ。」

陽光に眼を細め、サーナエアが言う。

ウアラもどこか懐かし気にうなずいている。

俺も初めて見た陽光は綺麗だと思うが、既に皮膚がひりひりしている。ロープからなるべく肌を出さない様にしグラサンを深く引き下げる。

「……と、そうよ。エバンは地底人だからこれはキツイわね。」

気を使ってくれた二人に甘えて先を急ごうとすると下生えがガサガサと音を立てる。

敵襲かと全員が身構えるが、出て来たのは少し大きな一匹の兎だった、クワガタの様な角が在るのが特徴的だ。とくちょつてき

「やだ、可愛い！」

真っ先にサーナイアが触りに行き頭を撫でている。

それについて行きウアラも触りたそうにしている。

一見、微笑ましい光景に見えるけども何だか嫌な予感がする……。

考え過ぎかなと思ったけどもスキル『けんしき見識』で調べると

首刈り兎

地底森林に多く生息する大きな兎。

クワガタの様な角がハサミになっていてそれで細い所を狙っているので用が無いなら近づかない方が良い。

性格は気まぐれ。

……。 うおおおお！やべー！

「サーナイア、避け……ッ。」

全て言い切る前に兎の凶刃が細い首に迫る。

サーナイアは気付いていない。

即応^{そくおう}したウアラも間に合わない！

最悪な事態に意識がスローになる。

「馬鹿野郎！ 死にたいのか！」

どこからとも無くダガーが飛来^{ひらい}して兎の後頭部に突き刺さり、間一髪で逸れた角からサーナイアを引き離す。

「きゃあ？」

状況が良くわからなくてキョトンとしていたサーナイアも事態に
気付き青ざめる。

そんな中を、ずんずんと小太りのおっさんが駆け寄ってくると。

「お前達、この森は初めてなのか？ こいつらに無防備に近づくな
んて自殺行為だぞ！？」

「すみません、連れの危機を救ってもらいありがとうございます。」
いち早く立ち直った俺が言うと。

「怪我が無いなら良いが、冒険者が油断しすぎるなよ？」

と、諭された。

「ご尤もだ。」

刺さったダガーを抜き、鞘に仕舞いながら

「俺はサイラーと言う盗賊だ、俺も冒険家業だ……君等は？」

その質問にカクカクシカジカと伝えると。

「ああ、あの遺跡に行くのか、悪い事は言わねーから止めとけ。
あの中はやばいトラップが幾つかある様だし魔物も手強い。」

無精髭を擦り、見たところ君等に盗賊系統のメイン/サブクラスを見受けられないしなーとも言っ。

「どうしても俺はあの遺跡に入りたいんです。サイラーさんさえ良ければ俺に手を貸してくれませんか？」

ニヤリ、としながら。

「俺は高いぞ？ それで良いなら考えなくも無い。」

金額を提示しながら言う……。一応、払える金額だったのでOKサインを返し。

「前払いだ、この遺跡は危ないんでな！」

俺がすんなり金を払い契約成立。

「改めて自己紹介だ、俺は軽盗賊のサイラー。剣の扱いと、罠の発見が得意で二刀流使いだ。」

どれ位の付き合いになるかわからんが、よろしく頼む。

俺と同じ軽戦士属性のサブクラスに会うのは久しぶりなんで少し嬉しい。

時間的に丁度、昼時なんで仕留めた兎の剥ぎ取りがてら絞め兎鍋

にする。

わりかし好評を得て少し馴染んでから意気揚々と乗り込むのだった。

探索って美味しいの？

契約が済んだからと、サイラーがぶつちやけてきたけど実は、連れて来た部下が逃げたのか死んだのか戻って来なくて装甲の薄い自分だけでは正直、厳しかったのだと言った。

それに、これから危険な場所に挑もうってパーティー内で、敬語で呼び合うなんてのは自殺行為で良くないと言う強い要望で、全員敬語禁止で進む事になった。

大分、歩いて来たのだけと思いのほか緑が深く視界が利かない。

歩行の邪魔になる草を切り払いながらの移動も酷く体力を消耗する。

いつまでも続きそうな幻を抱いた頃にようやく開けた場所に着いた……、とてもじゃないが何度も採取に來たい場所じゃないかもと愚痴りながら開けた広場で小休止しゅうきゅうし。

しかし、遠くから見ても凄い威容いようだった柱は近づく程に馬鹿みに巨大でまだまだと言うのに霞む程……。

既に壁にしか見えないで、逆に離れてしまったかの様な幻覚に囚われた。

「こんなとこまで良く来れたな、師匠。」

なんて思いながら巨大な生物の肋骨に見える形のアーチ岩を通り抜け、夕方には遺跡内部に侵入する事が出来た。

先頭は松明を持ったサイラーが務め、次は俺、更にサーナイア、
殿は遠距離攻撃を持つウアラとなった。

ちなみに、俺は左手に小盾と錬金ロッド、サーナイアはワンド（
小型のロッド）に装備変更している。

内部の通路が狭く、長物は意味を成さないとサイラーのアドバイス
スだけど確かにそうだ。

暫く、ぐねぐねと迷路の様な暗い通路を進みスケルトンやらクロ
ウラーやら動きの鈍い敵を難なく排除していく。

だんだんと通路が広くなって来たなーと思うと唐突に石造りの扉
が現れた……。

「あまりにも普通の扉だな。」

「扉だね。」

「扉ですわね？」

「扉……。」

四者それぞれの声が漏れる。

しかし、なんでこの位置なんだろう？

横には普通の通路もあるけど、ただの扉が凄い存在感を放っている。

正直、気になる。

「あのさ？ サイラー。」

すると、

「みなまで言うな、気になるんだろ？」

俺様の出番って訳だ！ とか言いつつ手早く聞き耳・畏探し・開錠のいわゆる探索三点セットを実行。

鮮やかな手際で全て成功……。

静かに扉を薄く開けた……。

…… ままの姿勢で扉を閉めて戻ってきた。

「なんなのですか？」

渋い顔してるサイラーが三人とも覗きやすい位置に来ると扉を開けてくれた。

すると、

「うええ！」

全員、変な声が出た。

そこは割りと小さな部屋になっているみたいだけど、上下左右の壁一面に拳大の穴が空いている。

見てるだけで気持ち悪いけど、なにこれ？

サイラーを見る。

「おそらく、あの穴全部から何か飛び出してくるトラップじゃねかな？ 奥に宝があるっぽいがあれも怪しい。」

うんざりしながら説明してくれた……、無いわー。

って、サイラーさん何をしてんすか？

サイラーが出来心で石を投げ込んどみると、「ぶじゅー」と、おぞましい音がして穴と言う穴からカラフルにテカるスライムが大量に這い出してきた……！

亜種なのか触手が無数に生えている。

「おぎゃー!!」

流石に逃げた！

隊列とかもうそんなの、かなぐり捨てて全力での逃走！

しかも、奴ら足速ええ！

「急げ、急げ、急げ！ 逃げろー！」

もう、むちゃくちゃである。

……あまりにも長い、恐怖と気持ち悪さに耐えられなくなったサ
ーナイアが泣きながら気を失い倒れる。

そして、思ったより必死な表情のウアラがサーナイアを拾い毘の
有無も調べずに近くの扉に逃げ込んだ。

既に通り過ぎてしまっていた俺とサイラーは戻るに戻れず、更に
上階へ。

俺が踏み抜いたスイッチで更にトラップが発動。

降って来る槍の毘から始まって警報の毘・回転のこぎり・何故か
トラバサミ……etc。

背後からは相変わらずのスライム津波。つなみ

最上階かと思われる付近で、とどめの転がる大岩の罠。

俺達も何の警戒も無く、現れた横道の先にある扉に逃げ込んだ。

パーティー分裂

強行突破した部屋は石柱全部をくり貫いた様に広大な空間だった。

幸いにも扉自体には細工も無く何も起こらない。

そもそも緊張と走り過ぎでまともに息も吸えず、喘息を起こしたみたいに喘ぐしか出来ない。

立っている事さえ出来ずに二人ともぶっ倒れ……しばらくの間、サイラーの規則正しく動く出っ腹だけを眺めていた。

一方、ウアラは扉を後ろ手に張り付いて外の気配を探っていた。

部屋が暗いが影神の加護『暗視』が有るので不自由はしないし、あのスライム津波もやって来ない。

実は駆け出しの頃、どん臭い事をやらかしてスライムに捕まり、溶かし殺されかけてから真剣にトラウマになっていたりするのだ。

しかし、非常事態＆トラウマではあるけど、依頼主を捨てて来たのは不味まずかったか？

「……、まあ良いか。」

気持ちを無理矢理むじやじに切り替えて妹を起こす。

「……ア。……サ……イア。」

なんか、ゆさゆさすりゆ。

「サーナ！」

「ふううー？ ……お姉え、ちゃん？」

急に意識が浮上……。

音がする程の速度で起き上がるサーナイア。

お約束として額をぶつけ合う姉妹。

そして少し涙が出た。

気を取り直して。

「ちよっぴり子供に戻っちゃたのは内緒よ?」　　と言っか、ここ
は何処?

えと、「問題無い。」　じゃーあ、無くてよ。

「覚えていないか?　あの最中、急に倒れてしまったから、サーナ
を抱えて避難したんだ。」

二人ともはぐれたと姉が言う。

「そう……やっちゃったのね、私。」

ともかく早く二人に合流しましょう?

それには、まず現状把握。

けど暗くて私は何も見えないし、入り口を開けるのは論外。

「結構、狭い部屋みたいだ。」

「奥に書棚があって隣に引き出しのある机が並んでいる。　書斎な
のかしら。」

ぎつしりと詰められた本は触れると古すぎて崩れて塵になってしまった。

無防備にひときわ大きな引き出しをウアラが引いた瞬間。

ぱっかりと開く床。

胃が持ち上がる感覚がした後、二人は真っ暗な穴に落ちていったのでした。

- 石柱遺跡、最上階
玄室^{げんしつ}
-

あんなに走ったのに直ぐに体力が回復したサイラーが、まずスラ

イムで溢れていた通路を覗く。左手の方は岩が収まっていたと思われる窪^{くぼ}みが有るだけで何の面白みも無い。

右手側には暫^{しば}くカラフルなゲルの絨毯^{じゅうたん}が出来上がって居たけども、目視出来る位置で詰まっ^{もくし}ていて側面の溝で触手がうぞうぞしている。

通行は不可、スライム類にお決まりの核も無いし魔の気配もしない。

こいつ等は魔物では無いのだろう。

侵入者排除機構^{しんにゅうしはいじょきこう}の一部なんだろうか？ …… どうもこの遺跡には殺意を感じない。

「気持ちが悪いな。」

その意図も、何もかも！

さて、閉じ込められちゃったみたいだから室内の探索と行きます

か。　　つても奥にある箱しか、めぼしいものは無いな。

故意にエバンを置いてずんずん進む。　その際に響く靴音と振動で足元が空洞じゃなかも思った。

箱には鍵が掛かっていて更に大掛かりな罠が付いていたが、盗賊にとっては間違いなく開く鍵……ここにも違和感が付きまとう。

罠が作動しない位置まで開き、いきなり難易度の上がった罠を苦労して固定。

暗い箱の中を明かりで照らすと中には、細長く歪いびつな形でアメジスト色をした石が一つ。

アーティファクト『増強の守石』か……これは思いがけず良い物を見つけることが出来たな！

思わず邪悪な笑みが浮かぶ。

「なあ、エバン？」

声を掛けられやっと気力を振り絞って立ち上がり、フラフラと側に寄る。

「本当に短い間だったけど、良い稼ぎになった。」

ゆらり、とサイラーが振り返る。

「俺様なー、実はお前らみたいな駆け出しを騙すのが大好きなんだ。」

酷い宣言と極度の疲労で思考が濁る。

「そろそろ頃合いだしさ、死んでくれないか？」

狂気を孕んだ満面の笑顔。

わさわさと黒と黄色の体毛が服やら鎧やらの隙間からあふれ出し、
全身を覆う。

髭面のおっさん顔が崩れて、昆虫の黒光りする甲殻に変化……その
フォルムは蜘蛛。

脇腹からもう一对の腕を生やし、おもむろに人差し指を頭上に振り上げると蜘蛛糸を発射。

その糸は壁に張り付きその身を支える。

更に一本をアーティファクトに絡めて引き抜くついでに、停めて置いた罫を作動させる。

すると玄室の床が崩れ、巨大な落とし穴になって地に立つしかないエバンを襲う。

「ビンゴだったなー！」

サイラーが悦に浸りながら。

「ここを紹介した師匠を恨んで逝けや！」

彼は道を踏み外した魔族だったのか。

悪意に飲み込まれ、何の抵抗も出来ないままに俺は奈落^{ならく}に飲み込まれた……。

パーティー分裂（後書き）

今回、難産でした。

こつこつお話を作るのは難しいですね。

不自由な二択・新しい軀

笑う大蜘蛛なんてもの初めて見たよ……。

「てっ……いやいや、呆^{ほう}けてる場合じゃないって!」

物凄い高さから落下しながら咄^{とつ}嗟にギミックソードを抜き放つて
みても遠過ぎて掠りもしない。

「くそ、長さが全然足りないし飛ばねえし!」

底が深すぎて黒い穴にしか見えないが、このままじゃ間違いなく
お陀仏だと思う!

何か無いか? ここにあるもの? 布……は、この風圧じゃ裂け
ちゃうし。

「空気は泳げねーてば、俺!」

ん!? なんだ、空気……風圧!

「そうだ!」

空気を圧縮錬成すれば行けるかもしれない。

善は急げ、ロッドを出してる暇なんてないから指を剣で傷付け、
手のひらに血の錬成陣れんせいじんを描き込み、下に向け祝詞のりとを唱える。

『イカシ全てを内包する王 集約する白 天を抱き空に至れいた 圧縮空気錬コンプレスト エア
成陣』

陣が輝き圧縮された空気が錬成され、正面からの風とかち合い一
瞬だけ落下が停止する。

「~~~~っ!!」

そして数秒の窒息。

体もミシミシと痛む。

再落下し、底付近で水が溜まっている事に気付き、もう一度空気を錬成。

「ダバアアン！」

派手に水柱を上げて着水。

二回目は意識を保てずに気絶……、そのまま暗い水底に落ちていた。

ぼんやりと漂い、混濁こんだくしていると何処どこからか囁く声がある。

声は「君は面白いな。」と言った。

「頭上で何をしているかと思ったが、あの高さから落ちて五体満足な人族などそうは居ない。」

興味深そうにして言う。

「貴方は誰ですか？」

体が動かないので、声を出してみたが出ていないようだ。

しかし、声は「大丈夫、伝わった。」と言う。

「私はこの場に封じられていた水神の小神いぢが一人だ。」

もう永い事ここに徒に在る。

「私を封じていた要かなめは失われた様だが、私はこの生せいに倦うんでしまった。」

これも何かの縁^{えにし}よ。

現在、絶賛・溺死中の君を助けてやらん事もない。」

「どうだろうか？」

と、言つか選択肢なんて有って無いようなものじゃないか？
って考えたら笑われた。

「理解が早くて助かる。」

含み笑いの声の気配。

目の前に蒼い珠が現れ、俺の口に飛び込んで来る。

それを嚥^{えんか}下した瞬間、現実でも光が爆発し全てを染めた。

「痛たたたたあゝ。」

痛みに目が覚めると何処かに寝かされていた。

起き上がろうとしたら、痛すぎて目がチカチカする。

見える範囲で見ると、添え木やら包帯やらでガチガチに固めてあり重症の様だ。

外せなかったのか左腕には亜空間バックがちゃんと有って安心した。

バックから虎の子のポーションを取りだし一気にのみ込む、かなり苦いが吐かない様に我慢。

それで骨折以外の傷はほぼ完治した。

包帯を解いて確認すると赤い打ち身があるだけになっている。

事前の処置も良かったのだらう、綺麗なもんだ。

具合を確かめながら室内を見回し、外が物凄い明るいのに愕然がくぜんとする。

そんな始まりだった。

流されて何処よ、ここ？

「やっと起きられたんですかー？」

なんだか、おっとりした声の女性がパタパタしながらドアを開けるので、体がパキパキすんなーとか思いつつ………うっかりストレッチなぞしながら見つめ合ってしまった。

案の定、大目玉。（当然か）

彼女（アネットさんと言うらしい）は医療関係者と言う様な身のこなしでも無いし、何らかのスキル持ちでも無さそうな雰囲気振りまいている。

強^しいて言うなら、微笑ましいかな？

見た目は童顔でうっかり持ちだが、残念……巨乳じゃないみたいだ。

とか、つらつら要らん事に思考を割いてたら

「なんか、失礼な事考えてませんか！？　ともかく寝台に戻ってください。」

と、即座にツツこまれた。

その後、本職の医者が来て診察して貰い、確かに骨折以外は完治のお墨付き、出歩きの許可も得た。

どうやら一週間も意識不明だったとかで、ずっとあの娘さんが世話をしてくれたようだ。

しかも、両の二の腕と背中^{こんぺき}に紺碧^{いれずみ}の刺青があるらしく強引に誤魔化したけども多分、水の中で呑み込んだ蒼い珠のせいだろう。

今のところ効果は不明だけど保留して、まずはここが何処なのかについてかな。

考えを纏^{まと}めて医者に問うと、ここはイストラロウスと言う街で、もつとも大きな地上への穴の一つ。

その真下に位置すると言った。

そもそも、この地底世界は鉱壁や大河、森林、溶岩湖などで約五つ程の地域に分断されていてイストラロウスは中心より南南東に位置しているんだとか。

更に天井には何箇所か大穴が開いており、一つはこの場の頭上。

穴の中心となる場所は^{だいはくふどう}大瀑布洞と呼ばれ、地上の海水と呼ばれる辛い水の降る滝穴でそこを基準とする条約がある。

西側にも大穴は存在するらしいが医者は知らないそうだ。

少し脱線したけども、イストラロウスは地下部分に大きな岩山が有り、地上と繋がりが欲しい地底人や飛べない民が集い開拓をし、

その上部のスペースに人間や空飛ぶ種族・地上の民などが流入して街を作り成り立っている。上街には翼人が多く住み、下街には地底人が多く住んでいる大都市だ。

上街には地上へと続く巨大な相互移送陣そどういせうじんが掘られ交易と交流がある。

都の頭上には光を蓄積・拡散する太陽のアーティファクト『愚者の円盤ディスク』が設置されていて、この地方に広大な緑を提供しているそうだ。

もちろん、夜間には殆ど視力の利かなくなる翼人達の生活のサポートにも効果を發揮している。

俺が厄介になっっている病院は上街にある翼人街の医療施設で、自治軍の所属になっている。

長期入院の見込みが強く、民間では見辛かった俺の治療を根気よくやってくれていたそうだ。

大変ありがたい。

そんなこんな、話を聞くうち大分暗くなつて来たのでゆっくり休むように指示を受け、アネットさん（医者のお孫さんだそうだ）に療養食を出して貰い就寝。

翌日の昼頃に瀕死で流されていた俺を助けてくれた翼人騎士にお礼と実益を兼ねて練成した「暗視スコープ」贈り、続いて冒険者ギルドに寄りエリクシル姉妹（ウアラとサーナイアの事）二人の安否確認や、サイラーの殺意ある所業の報告書・師匠宛の手紙などをハ

ウルベルに郵送依頼して過ごした。

ふと、こんなに陽光が照っているのに体にロープを巻き付けて居ない自分に今更に気付き驚く！

やっぱりアレのせいなんだろうな、自分に色々起きてそうでも不安だ。

幕間 小水神との夢語り

目の前で優雅に紅茶をすすする男性が、ドーン！

えっと、ここは俺の一人部屋だった筈なんですがー？

……貴方、どちら様ですか！？

「私は小水神だ、ごきげんよう」

前置きはさておき。

「と言う事で、相も変わらず夢の中なので気にするな。」

こうして顔を会わせるのは初めてになるな。以前は君が瀕死だったので説明が出来なかったが、今やお互いの核に成った『知識の柔石』についての事だ。

「んん？ さり気無く核って言いました？」

「その事についてだが、私の力と存在ちからを受け取って貰うにあたって体の作り変えが行われた様なのだよ。」

小水神いわく、普通の人族にはそのままで神を降ろす事は不可能であるので致し方無いと言う。

「理解したかな？ そう言う事で君は今、この瞬間も君は少しずつ神族に成っている。」

「今は宝珠ほうじゅにより私の神聖水神魔法が付与されているが、私の存在が完全に君に吸収される頃には君は間違いなく小神になるよ」

また、さり気無く重大な事言っただね？

「更に『知識の柔石』自体の能力として、この世界に存在しない知識の検索をかける事が出来る。」

と言うものだ。

使い方は意識して思考するだけと言う万能ぶり……、有効に使うと良い。

これから始まる、ほぼ永遠の生の慰みなぐさになるだろう。」

もう驚きません……俺。

「しばらくは共に在れるだろう、せいぜい楽しませて貰うよ。」

言いたい事言ったらお休みかいな？

「ちなみに、布教して一定数の信者を得れば独自の流派を興す事も出来るぞ？ 生き神としてな。」

さいですか。

アーティファクト『知識の柔石』初使用

小水神との邂逅^{かいこう}の後に早速、宝珠を使用してみようと思う。

神族化と聞いて正直舞い上がっているけど布教には今のところ興味無い、それに面倒そうだし。

彼が言った通りに、集中して考え事をすると頭の中にもう一人居るかの様に頭脳が回転する感じがした。

まず手始めに失くしたギミックソードに改良を加えて造^{つく}れるか試してみようかな。

以前までは俺の体力的に限界で、必要以上に軽く作っていたけど水神の加護^{かこ}でタフさが上がってるので威力を上げる事にする。

適度な強度と軽さも欲しいので、以前は作れる要素さえなかったアルミニウム合金（アルミニウム×超合金）を錬金合成。

持ち手と一節刃目^{いっせつじん}を一体成形にして、継ぎ目の強度も補足。

グリップに細かなブツブツスキンと指に合わせた凹凸を作り滑りづらくした。

内部に魔力での巻き取り・送り出しの出来るリールを取り付け、よりトリッキーな運用を可能にし収納時には片手剣として使用できる造りに調整。

見た目より軽いので長さを稼ぐ事も出来て、二刀流に対応。

今まで使えなかった鞘さやを利用できるのも良い点だと思う。

刃の形状はフォレストマンティスと言うかまきり螳螂の鎌に似せて節と節の間に、これまたアルミニウム合金製のコイン（節刃よりやや小さい）をはさむ。

良い感じだ！

まずはアルミニウム合金を作るため陣にアルミニウムと亜鉛、マグネシウムを置き祝詞のりとを唱える。

『巨神の鎚もて大地を穿つ 歪みゆが撓みたわ 深遠の忌月 合金アロイ練成！』

陣から激しい重圧の波動が消えた後に超合金が出来上がる。

鉄が足りないので、以前作つた盾を共に陣にすえて盾と合金の表面にも陣を描き足し更に詠唱えいしょう。

『灼熱の息吹 具足の嘶き^{いなな} 幻想を越え現想に遇え^あ 鍛冶練成！』
ブラックスミス

今までに無い程の光の嵐と烈風で眼を開けていられない。

暴風が去った後には鞘に入った二振りの長剣が出来上がっていた。

抜刀すると脳内で構築したままの剣身をさらす、二本とも一通りの動作確認を終え問題無く動くのも確認して満足した。

ほぼ全財産を使ったけども悔いは無いさ！

よし、こいつの名前は「捕食の鎌^{プレアシヨシックル}」にしよう。

サクサクと『命名』の陣を発動すると銘が自然に刻まれる。

そう言えば、今まで錬成を行う時は必ず陣と祝詞^{のりと}の両方を使って発動していたけど脳内で鮮明に励起^{れいき}出来ていれば今みたいに短縮詠唱でもいけるんじゃないかと思案^{しあん}。

試しにバックから各種の薬草を出し、量の調整をしてから頭の中にポーションのレシピをしっかりと思い描き『薬剤錬成！』
ドラッグ

短縮詠唱を行うとポーションは無事に出来たけど、何故か錬成陣が自然に出てしまった。

しかも、蒼色……。

もしかして宝珠の影響を受けてるのかな？

その後、同様の錬成を数回繰り返したけど、大きな変化は無し。

まあ、今回は短縮に成功したんだから良しとするか。

イストフラウス

その後、一週間ほど病院で療養し初対面の印象が芳しく無かったアネットとも大分仲良くなり、左腕の骨折もかなり良くなったので吊り布も外せる事となった。

療養中、流石に公衆風呂に入りに行く事は出来なくて体を拭く程度しか出来なかったので不快指数も限界！

最終的にここに風呂場を作るなんて事も考えたりしたけど、自分の部屋でも無いのに錬金術で風呂を造り付けるのも如何なものかと躊躇^{ちゅうちょ}。しかも俺みたいに無尽蔵に水が出せないと効率的に使えないしで実用性も低い。

なんで今日は公衆浴場に行き、冒険者ギルドにも寄りたいと医者に相談したら孫のアネットを案内に付けるならと許可をくれた。

（ちなみに水”が無尽蔵に出せる”も水神の加護です。）

ネックだった背中 of 刺青は『偽装の指輪』で隠蔽^{いんぺい}済みだから無問題！

とりあえず、「捕食の鎌^{プレデーション}」を一振りだけ持って、約束通りアネットと共に出発。

考えてみると、ずっと寝台で魔道書や宝珠の検索ばかりしていた

ので街を歩くのは二回目になる。

なんかテンション上がってきた！

折角、大都市に来たんだから勿体無いよね。

すると

「今日は何処に行くんですか？ お爺ちゃんたら詳しく教えてくれないで。」

歩きながら困り顔でアネットが溜息を吐きながら聞いて来た。

「ほら、療養中は色々あつて風呂に行けなかったしなー？ 怪我もそうだけど、刺青とか。」

納得の表情で、

「あー、背中のこと……。あれは確かに大きいですし派手な色ですものね。」

けど問題が解決してないと思うんですけど？」

にまにましながら指輪を見せて。

「昨日、やっと偽装用の魔道具が出来たんだ。」

なんてやり取りをしながら雑貨店やら八百屋などを冷やかしながら下街へ。

イストフラロウスは立地上や治水設備の関係で、下街にしか浴場が無いが数は地底世界でも稀有けうな程に多い。

今回はあんまり盛況な店に行きたく無かったので中堅どころの<ノームの憩い>浴場に行く事に。

<ノームの憩い>は地底人・人間・翼人推奨の浴場で、一度に沢山の人族が入浴出来るのが最大の売りらしい。

番台のお姉さんに450札を渡して、別々の入り口から中へ……。

すると何故か中でもう一度、一緒の部屋になっていて、おまけに混浴だった！

「なんでやのん！」

思わず叫んじやたよ！

すみません、お願いだから不審がらないでごめんなさい。

てか、しかし宝珠で学んだ知識と違うから！

アネットも普通にしてるし、皆も気にしてないのか手早く洗って出て行く。

これって普通なの！？

ええ、温泉ってのんびり癒しに浸るもんじゃないの？

前情報で期待し過ぎていて気分ガタ落ち。

余りにも癪だったので番台の姉さんに質問した所。

1・混浴なのは建て始めた時、単純に資金が足りず工賃を安くして貰ったからだと言う。

2・混浴は自分も恥ずかしいと思うが、店を継いだばかりでまだ蓄えが無く改築に踏み切れないと言っていた。

「もし良かったら、俺に改装の手伝いをさせて貰えませんか？いくらかの案もありますし、俺は錬金術を学んでいるので工費の面でも役に立てると思いますよ？」

と、提案してみる。

相当、悩んでいたけども後日、旦那も交えての話し合いなら良いと言う事で、二日後のこの時間にまた来る事に。

とりあえず、さっぱりした二人は冒険者ギルドに移動。

以前、書いた書簡の返事がないか聞いたが、まだ返事はないそうなので片手でも出来る依頼が無いか探す。

すると、薬剤調達の仕事と解体作業の二件あるとの事。

薬剤の方はポーション作成依頼と風邪薬の作成依頼だったので、昨日実験で馬鹿みたいに大量に作った物と以前作った解熱剤を納品して即換金。

12000札の稼ぎになったので大分気持ちが悪くなった。

解体作業の方も錬金術で出来そうだったので、これから依頼主の元に契約に行く事にする。

今回の依頼主は下街に住む鉱石大工でヒルベルトさんと言うらしい。

ちなみに鉱石大工とは地下都市や半地下の居住スペースで主に石や宝石建材での建築をする職業、地底人に多い。

新しく建設する場所にとっても硬い鉱石が居座って困っているので、壊せるならお願いしたいと言うがどの位硬いんだろうか？

まずは見てみてくれて事現場に移動したけども、これは凄い

ね。

精神集中して宝珠の検索を使用。

導き出された答え、多分これはクリスタルじゃ無いのかな？
しかもでかいし、そりゃー割れないよ。

「ヒルベルトさんこれ相当硬いんで、提示されてた謝礼だと厳しいですね。」

もし破壊出来たら、この鉱石を分けて頂けるなら受けますがどうでしょう？」

クリスタルの強度を説明するついでに利用価値も教えると理解してくれ了承を得た。

いつもの様に詠唱。

突き出した右手の平、前方に魔法陣が浮かび上がる。

『烈火の巨人 一つは二つ 二つは四つ 痛みと共にそが身を別て
バーシアウト
分離破壊！』

石の表面にも特大の蒼い練成陣が浮かび暴風が吹き起こる。

連鎖する様に小型の陣が足されては弾け、足されては弾けして緊張が頂点に達した瞬間……、大量のステンドグラスを砕いたかの様な、けたたましい爆音と共に四散した。

久しぶりに全開全力で、苦手な直接系の錬金術を使ったので息が乱れる。

魔力を沢山使い過ぎたので少し休ませて貰ってから、追加報酬としてクリスタル原石を10Kgくらいと確認サインを貰い上街に向かう。

……途中、鍛冶屋や武器防具屋とかで、良く廃鉄や劣化武具が見受けられるけどどう処理してるんだろう？

今度、調べてみようかな。

経済活動に影響を与えたらしい。

今日は二日前に交渉を申し込んだくノームの憩い>浴場の姉・旦那夫妻との話し合いの日だ。

以前、検索した案もしっかり頭に入れて気楽な調子で街に出る。

気付けばこの街も大分長くなりアネットの案内もほぼ要らなくなつて来たし、この地に降る強い陽射しも俺をもう焼く事は無い、かも？ と体感出来るくらいには慣れる事が出来た。

そのまま路地を下り続け、まだ時間も早いので冒険者ギルドに寄る。

密かに、冒険者ランクが上がって受けられる仕事が増えた。

ついでに依頼を物色するが受けたいものが無く、今回は俺から「珍しい素材や鉱石の調達依頼」を出しギルド員に張り出して貰い、また散策に戻る。

この街には錬金術師が俺しか存在しないみたいで、素材の調達には特に苦労している。

前に通った道を思い出しつつ下街へズンズン下っていくと、武装ストリートに出る……。ここら辺は武器屋・防具屋・各鍛冶屋・金物屋などの店舗や工房が並び、その裏の区画で魔道具屋がひっそりと商いをしている。

表向き綺麗に整備されている様だけど、裏には必ず廃材・廃鉄が放置されている。

今までは気にもならなかったけど、どう処理してるんだろうか？

検索すると山ほど鉄の再利用が引つかかるのでもしかしたら良い儲けになって、なか尚且つ素材も手に入るかも。

まずはとりあえず、地域で一番大きな武器屋に飛び込んでみる。

「すみませーん。旅の錬金術師なんですがお聞きしたい事があります。」

すると店番の青年が営業スマイルで出向き。

「はいはい、どういった用件でしょうか？」

すぐさま対応してくれたので、

「こちらで保管されている廃材についてどう言った処理をしているのか知りたいのですが良いですか？」

すると快く、

「貴重な木材部分と宝石部分だけ解体して、廃鉄は一定量溜まったら埋めてしまえますね。」

この辺りの大抵の武器・防具屋ではその様に処理してるのでは無いかと言う事らしい。

なんと良い話……、もとい勿体無い事だ♪

「どうでしょう。滞在している間だけ無料で廃鉄のみ回収しても良いですが、如何ですか？」

そう提案するとホイホイと釣られてくれたらしく、手軽に鉄を手に入れる事が出来た。

気が変わらないうちに、そそくさと廃鉄を『圧縮練成』で小鉄球に変え退店。

街にある武器・防具屋全店で同じ契約を行い、大量の鉄を得た。

悪どい？NO 商売上手と言って欲しいなw

んで、少し寄り道したが良い時間なのでくノームの憩い>浴場へ。

まずは自己紹介、奥さんがカーマインさんと言って女性らしいすらつとした体型の美人さんだ。

旦那は地上から来た海人族でキツツェンと言う筋骨隆々の髭中年

で威圧感がある。

基本、海人族は一生を縄張りを出ずに過ごすそうだけど彼は好奇心が強いんだろう。

身体的な特徴としては耳がヒレのようになっていて両手足に水かきがあり手も足もデカイ、首もやたら太くエラ呼吸も出来る。

水中では、中型の腕に装着して使う鎌刃の付いた小手が一般的。

こんな所かな。

挨拶もそこに話し合いを始めたんだけど、旦那のキツツエンさんが言う事には「海の種族だから入浴の概念がいねんがそもそも無く、この地に来てから学ぶ事が多く失念している事も多い。」とか？

今回の混浴も故意で無く、奥さん共々の不慣れから来るものなんだと言う。

「そんな事情なんで、改装を格安でおこなってくれるなら是非お願いしたいし、地域住民からの要望も多い。」

で、他に何か提案があるそうだけど、どんな事だろうか？」

俺にしたら待ってましたの質問だったので、解わかり易くシャワーの有用性と構造についての説明をし錬金術で無くても作れる事も盛り

込んで売り込む。

新しい技術であまりピンと来ないのか、食い付きが思いの外悪いけども取り付けには賛成してくれたので良しとする。

その場はこれで終了にして、以前仕事したヒルベルトさんを訪ね今回の浴場の話に協力してくれないか？ と打診。

すると、

「水周りには詳しくないので不備が出ては困る。」

と断られてしまった。

「けど妹分に得意なのが居るから交渉してみるかい？」

と、ダークエルフの女性大工 ルビー嬢ラバニアさんを紹介してくれた。

しかし夜も遅くなってしまったので、翌日訪ねる約束をしてこの日は泥の様に就寝。

約束通り、朝も早い時間からルビーさんと打ち合わせ。

「はじめまして、エバン君。

君の考えたシャワー？　だっけ。

あれ、なかなか面白いね。」

懐かしそうな表情で遠くを見つめ。

「まだ森に住んでいた頃に浴びた滝みたいで私は好きよ……、これなら協力してあげる。」

報酬は弾んでねっ？　と言われて苦笑い、硬度の高いピッケルでも作ってプレゼントするかな。

ルビーさんを伴って、キッツェンさんに昼過ぎから改装を始める

事を告げ、貰った時間は三日間……、その間は住み込みで作業を行う予定だ。

初日はルビーさんの指示に従って不要になる壁や設備を破壊したり、解体したりと場を整えていたんだけど問題発生。

どうも、この浴場は単にお湯を沸かして風呂にしているとはかり思っていたんだけど、源泉に接続している魔道具の不全で成分が分解され単なるお湯になっているんだと判明。

急遽、夫妻と再度の話し合いの末、良くなるのなら俺に任せてもらえる事に……。

「この祝詞がこの回路に過剰供給を起こして、あー……これで逆転してる。」

この文字違うし！」とか。

あーでも無いこーでも無いと描き変え作り直し、一晩中改良してと張り切って改善策を探し、俺自身も考えて上手い具合に収まった。

ルビーさんと協力して配管を進め、欲しい能力の魔道具を練成しては設置。

気を効かせて、宝珠の知識から滑りにくい模様パターンを検索して床に施して完成！

出来上がった時は二人して跳び上がって喜んで、お互い恥ずかしい思いもしたけど、こんな巨大な建築物に手を入れたのは初めてだったので良い経験になった。

お互いの仕事振りを称えてルビーさんと酒場で乾杯！

そして期日の日、きっかり三日後。すっかり姿を変えた浴場は天然温泉に生まれ変わり「見間違える様だ。」とキッツェン夫妻も大喜びしてくれた。

魔道具の改修で更に報酬も上乘せして貰い、二人してそれぞれの一番風呂の恩恵おんけいも体験。

確かに、これは癖になる……！

なんて浸かり過ぎて、のぼせたのはお約束かな？

- - 数日後 - -

ロコミと元々の温泉の魅力が発揮された事により老若男女の間で温泉ブームが起き、夫妻は嬉しい悲鳴を上げてゐる様だ。

ルビーさんも俺も、今回の仕事で幾らか有名になったみたいで指名依頼なんて受け彼女は温泉大工に転職したらしい。

俺は未だ世話になっている病院に風呂を格安で作ったくらい。

医者のもビックに珍しい鉱石くブラッドストーンくも貰ったから満足なり。

お家にかえろう。 帰還の旅 1

圧縮される空気の悲鳴、収束する干涉光^{かんしょうこう}、練成陣が消えると手の平サイズまで圧縮された鉄球が出来上がる。

今回で三回目になる武器・防具屋の廃鉄回収も今ので最後だ。

あれから更に一週間の療養の後、すっかり専属になってしまった医者のオベール爺さんのGO！サインも出たので、本格的に帰還の用意を始める事にした。

いい加減、師匠にも心配をかけているだろうし、以前に出した書簡も届いているか怪しい。

そろそろ行動に移すべきだろう。

それに先日、上手い具合にハウルベル方面に向かう商人の護衛依頼も見つけたので道中で迷子になったり、食に困る事も無い筈。どうしてか『知識の柔石』は、この世界についての検索には効果を発揮しないので元からの知識を基準に考えないといけないのだ。

さいわい、商人のトスバル・ゼラブルさんとは明日の朝に合流予

定なんで、この街で世話になった人達・商売に携わった人達に故郷に帰る事を告げて回り、ついでにいつ戻るかも解らないので廃鉄の回収契約も無期延期にして貰った。

アネットなど、

「もうーあんな大怪我しないで下さいね？　いつも危険な事をしてて心臓に悪いんですから！」　なんて泣きじゃくっていた。

すっかり虜になったくノームの憩い>入り納めにも向かい、キツツエン夫妻とも別れを惜しむ……、「餞別です。」とカーマインさんから改築と同時に始めて貰っていた事業、温泉卵を頂いたりして過ごした。

仕上げとしてもう一つした事。

滞在中、上街の相互移送陣そういじやうじんに出向く機会があつて、じつくりと陣の研究・観察をしたんだけど、どうもあれはある空間Aと空間Bの仮想位置を折り曲げ零ゼロに見せかける事で世界を騙す陣であるらしく属性的に俺には使えない。

完全に魔術的仕組みだった。

しかし、一部を改ざんして水属性に限定する事で移送能力だけは真似る事が出来るかなと思つた……。

結果から言うと実行して成功したんだけど、やっぱり俺の様に水神族・または水に属する亜種専用ライン（ウンディーネとか竜人、海人など）になった。

後は任意の場所で逆転させた同じ陣を練成するだけで繋がるので
ハウルベルに着いたら繋げよう♪

更に、旅に出るにあたって『亜空間バック』の大きさが足りなくな
ってきたので錬金術でちょっとした小屋サイズまで容量アップ
改造を施してみた。

改造したらいけないなんて規約には無かったしー。

- - 翌日 - -

別れを惜しんでくれたアネットや爺・病院の皆との別れを済ませ、
待ち合わせの乗り合い所に。

トスバルさんが遅れている様なので、のんびりと装備品・消耗品の確認をしながら人間観察。

俺と同じ様に依頼人待つ冒険者のグループや商人。

あるいは場違いな程に高貴な人達やこれから乗り合い馬車に乗るのか、今さっき済ませて来たみたいな別れをするグループ。

各地から荷物を満載した交易品を運ぶ岩ヤギ達と煩雑はんざつとしている。

ちなみに地底では地形の悪さから馬は足を痛めてしまう為、もっぱら岩場に適した岩ヤギを使う場合が殆どだ。

岩ヤギはどちらかと言うと魔物に近い種で、頭部に三本の刃の様な角を持つヤギで幼少時に仕込めば大人しく育つので重宝されている。

俺が乗る予定の馬車も例に漏れず岩ヤギ車だろう。

それから20分程遅れて、やっと合流。

トスバルさんは地底人男性で恰幅の良い体系、頭頂部の空いた帽

子に付属のグラサン。

「商談が長引いてしまって申し訳ない！　今回はよろしく願います」と握手を交わす。

彼は男女一人ずつ使用人を雇っていて、一人は女性の地底人種でシャンテさん。

ゴーグル型のサングラスにハーフマント動きやすい服装。　多分、年齢もそんなに離れてはいないと思う。

「よろしくおねがいします」と緩そうに返してきた。

最後にもう一人は魔族・多分、男性でマイク。

少し構えてしまったが、制御が甘く幼い様子……、容姿はまんま歩く犬。　異界で言うハスキー犬に酷似こくじしている。

モフモフしていて可愛らしいかも？　服装は落ち着いた色の薄いロングコートで下にエプロンを着けている。

「えっと、よろしく願いします？」って言った後、トスバルさんに首を傾げてお伺いを立てていた。

良いね！

トスバルさんが主に扱うのは軽い武器や防具・香辛料に日用品な

ど、時には植物の種なんかも扱うようだ。

行商ルートはイストフラロウから西へ、中継都市キンドマックを経由して南下するルートを使用している。

俺はキンドマック迄の8日間を護衛しながら同行し別れてから北上……、岩壁の村から東に向かいハウルベル魔道国に入るつもりだ。

街道に沿っての旅なのでたいした危険も今のところ無く、カナン、シグウェと小さな村を通過。

3日目の夕方にルインナラカと言う宿場町に宿をとり、久しぶりの自由時間となった。

途中に村に寄ったからって、満足な食事に取りつけた訳でもなく、肉と酒の魔力に勝てず酒場に直行！

テーブルに乗り切らない程の料理を頼み、届く先から丸かじり。

どうも神族化し始めてから相当に食べないと満腹感を感じなくな

ってしまったので困ってしまう。

今日みたいに我慢が効かない時も増えた。

一通り食い散らかし酒場で飲んだくれている皆の見世物になってしまったけど、仲良くなった町人達から不穏な噂を聞いた。

なんでもここ最近、魔族と神官が率いる盗賊団が暴れていて危険だから、護衛をするなら十分気を付ける。

この近辺を根城にしているらしく、騎士でも齒が立たない。

曰く、死の魔法を使う魔女神官が居てかなり怖いなど、色々と物騒だ。

この辺は早く抜けるに越した事無い様だ。

もう一日程、商談で時間がかかるそうだから少し調べてみようかな？

思いがけない再開 帰還の旅2

宿場町・ルインナラカはこの周辺地域での補給場所として有名で、東西と南から伸びる行商路の交差点として栄える町。

町規模にしては大きな冒険者ギルドや販売店の数々。ハウルベ
ル魔騎士団の遠征駐屯所、非公式の盗賊ギルドなども在り人が絶え
ない。

治安の悪い道・風俗道もあるが、全体としての治安は決して悪く
ないのも特徴。

自由時間二日目。

トスバルさん達は既に商談に向かった様で、俺はのんびりと遅い
朝食を摂っていた。

いつも通りデラックス特盛りですが、何か？

食事の後は、まず冒険者ギルドで情報収集。

受付に、周辺に現れる盗賊の情報を聞いたが生憎と討伐依頼は出て無いそうだ。

サロンでも同様に噂程度のものしか聞く事が出来なかった。

同郷という事もあり、騎士団の方にも顔を出してみたが調査中なので一般人には、まだ教える事が出来無いから十分な警戒をし、もし遭遇しても無闇に交戦しない様にと釘を刺されてしまった。

もちろん、依頼主を危険に晒せないので逃げの一手だけど、襲われればその限りでは無い。

満足な情報を得られないまま、徒に時間^{いたづら}だけが過ぎて行き、焦りを覚えた始めた頃にたまたま通^{いた}り過ぎた食堂。

そのウェイトレスに見知った姿の女性が居た様な気がして急いで引き返す。

背中あたりの長さのソバージュをポニーテールにしている背の高い女性、毛先は不揃い。

あれから半月程経っているのを見た目は少し変わってるけど、あの顔・その長身は間違いない！

「ウアラだろう？ ……、ウアラじゃないのか？ 俺だエバンだよ！！」

「無事で良かった！」

思わずつかみ掛かり、迫ってしまう。

「きゃああー!!」

再開出来た喜びと興奮で詰め寄ってしまったが、何だか怯えている様子でこちらも驚き、彼女の肩を掴む力が緩む。

そこを逃さず女将さんと思われるふくよかな女性に投げ飛ばされる。

「家の娘っ子に襲い掛かるたあー良い度胸さね！ その首、そっくり切り離してやろうか!？」

厨房から長包丁を持ち出し俺の首に据える。

「まつ、ま・ま・ま……、待ってください!! 怪しい者じゃないんです！」

本気の殺気を放ってくる女将さんに、必死に弁解をして誤解を解くのに数時間を要し何とか話だけは聞いて貰える姿勢に落ち着く。

後から気付いたけど多分、あれくらいの武器ではもう死なないんだろつなーと変な確信と共に思うと、少し自分の存在がおぞましくもある。

まあ、痛いのは痛いから嫌だけど。

どうにもなら無い事は置いといて。

彼女は間違いなくはぐれたウアラ本人だと思うけど、本人は記憶喪失らしく、名前も女将さんの亡き娘（マリアさんと言うらしい）の名を頂き名乗っているんだとか。

ただ何故か性格も変わっていて人見知りなのは相変わらずだけど、明るく流暢に話しかけてきたのが意外だった。

忘れてしまった記憶の中に以前の性格を作る記憶や、過去に封じられた何らかの事件があったんだろうがこちらからは聞けない類いの記憶だろう……触れないに限る。

口調自体も随分と女性らしいし、後ろからみたポニーテールが鈴蘭の様に広がって花の様に見え可愛い。

少しドキドキしながら誤解が解けた所で、店の手伝いを中断してもらって今までの経緯とはぐれた理由。危険人物の特徴と彼女に妹が居てサーナイアと言う名前である事を教えていく。

しかし、全く思い出せないらしく反応も薄い。

もしかしたら何かの封印か呪いに罹^{かか}ってるのかも？

また、以前の性格や冒険者であつた事。 スキル・得意武器に影
神の神官だつた事を聞かせても、

「私そんな男みたいな人だつたんですか!？」と、微妙な表情。

身のこなしから多分、所持スキル・神官としての自動発動^{バッシブ}スキル
も失っている様なのも気になる。

じやなきや、戦士として劣る俺が襲い掛かってもまず捕らえられ
ない筈。

現状では謎ばかり重なっていくので、どうしたものかと思つてい
るとマリア本人から（思い出すまでは使わせてもらう様なので俺も
そう呼ぶ事にした。）お邪魔で無ければ同行して、何か思い出せそ
うなハウルベルと言う国に行きたいと言う。

記憶以外の要因の場合でも魔動の進んだ国で調べるのも良いと思
う。

いよいよとなつたら、宝珠を併用した大掛かりな鍊金設備を創り
使つても良い。

現在、護衛している商隊の顔合わせがあるので同行するなら明日の朝、俺の泊まっている宿<野うさぎ亭>に来て貰いたい事を告げ。

「報酬交渉なんかはするけど、今は戦う術はあるの?」

聞いてみると『亜空間バック』の認証が上手くいかなくて使えない、ギルドカードも手元に無いから難しいんじゃないかしら?と言う。

「けど、弓なら少し使えます。」

とか……。思い出すまでは俺が養った方が良かったのでそうしてもらおう。

これは決定事項ね?と言うと、ほっとした様な気配がした。

荷造りやらお別れとかあるだろうと今日は帰り、疲れたのでドカ喰いしてしまった。

流石に今回は食い過ぎたかも。

ちょっと節約しないとな?

幕間 姫魔女

- - 大瀑布方面・とある山中 - -

昼尚暗い砦を取り囲む様に、明らかに急造の防壁の巡る拠点。

廃棄されたのであろう砦は虚ろな内部を晒しているのに、酷く熱気が渦巻いている。

防壁の内には統一感の無い粗末なテントが多数、設置され少なく無い人数の人族が活動している。

ここは最近急速に頭角を現している盗賊団の拠点……、その場所である。

要所を申し訳程度に照らす松明の道を、頭領と思われる男が悠然と歩んで来る、隣には杖を持った美女を従え、三步程離れて魔術師らしき男が続く。

中央に広くとられた場に群がる、有象無象の男達に頭領が告げる。

「今回の働きご苦労！ お前等の蛮勇で今日も沢山の得物が手に入った。今夜は久々に酒宴と行こう！」

その欲望に男達から喧^{やか}ましい喝采^まが上がり指笛や雄叫びが飛び交う。

「力無き独善に罰を！！ 乾杯！」

魔術師に渡されたゴツイ杯を受け、高く掲げる。

「『『『力無き独善に罰を！！』』』」

唱和の声を合図に一気に祝杯モードに移行する。

それを女……、サーナリアはつまらなそうに眺め、赤黒い葡萄酒を飲み下す。

「愚かな姉とあの小僧は、この有り様を見たらなんて思つかしら？」

軽薄な笑みと、コールタールの様に淀んだ憎しみの眼に火を灯す。

そんなサーナリアの顔を満足気にサイラーが眺める。

最近はこの様な構図が多くなって来た。

彼女を引き入れた時は面白半分だったが、中々どうして使える女だった、身近に良い女が居ると言うのも花が有って乙なものだ。

例えそれが死毒を持つ毒花どくはなだったとしても。

暫らくして場の空気にしらけてしまったサーナイアが、皆に返ろうと席を立つ。

今の彼女は艶やかだった黒髪が、銀糸の様な白髪に脱色されており、髪型は短髪を無造作にオールバック。

反面、大きくて愛らしい瞳で胸元が大きく露出。張り出した襟えりぐりに広い布地の白ファー付きソフトライダースーツ（ツナギタイプ）を着込んでいる。

色は黒で体のラインを強調する仕様、ヒールの高いブーツを履いている。

その手には不似合いな、おどろおどろしい髑髏石どくろの杖を握っている。

彼女を知る者が見ても、俄にわかには信じられない変わり様だ。

広場にたむろする手下達の間をすり抜け、モデルの様に歩く彼女に酔って気の大きくなった男が手を出す。

女に飢えた野郎所帯には色香が強かったのか、男のソレは完全に臨戦態勢で強引に口説いて来るが全く興味が無い。

「やめて頂けるかしら。　今ならまだ忘れて差し上げても良いですよ?。」

大勢の前で言い放つと、なけなしのプライドを傷付けられたのか激昂して押し倒してきた。

何日も風呂に入っていない、饅^すえた臭いが鼻をつき、興奮する事でより顕著に為った昂ぶりが体に触れ、堪らなく不快になる。

我慢の限界に辿り着く迄も躊躇も無く、私は死の神技を解き放つ。

『相応しき　因果応報』

靈感の強い者ならば、怨嗟に歪んだ中年女性の巨大人面が男の上半身を喰い千切る姿が見えただろう?

悪霊は満足したのか男の靈魂を引き剥いて飛び去っていく。

力の無くなった手を外し、何事も無かったかの様に離れていく彼女の後ろで、思い出した様に男の噛みきり口から夥^{おびただ}しい血が噴き出す。

クスクスと晒^{わら}う彼女の横顔を、魔術師だけがうつそりと見ていた。

「新参だったのか馬鹿な奴だ、うちの姫魔女様に手を出すからそうなる。」

彼女もまた既に、この無法集団を牽引する勢力であるらしかった。

マリア觀察 帰還の旅 3

商人の朝は早い。

早くに合流したマリアは、まだ眠そうにしながらも必死に起きて
いるみたいだ。

こんな所でも、以前と違いが多く痛ましい。

ほんの少し前、完全に俺と彼女の様子は反対だった。

早朝の家々からは炊事の煙が上がり、地底に無数に埋没する発光
石が人族や家畜の吐く二酸化炭素と反応して仄かに発光しだす。

徐々に仕事に向かう者や夜勤から帰る草臥れた色子風の女性達、
ギルド員やこれから冒険に向かう命知らず達、様々な人族が行き交
い町全体が生き物である様に身動きみじろしている。

俺達もそれに紛れ、既に出発の用意に入っているシャンテと岩ヤ
ギ達を撫でているマイクと視線を交わす。

馬車の奥に視線を向ける二人、奥に居るであろうトスバルさんに
声を掛ける。

昨夜、もう大まかな合意は得てるとは言え僅わずかに緊張する。

当人であるマリアの緊張は相当なもので見る方が気の毒だ。

けれど、点検を終えてゆっくり出てくるトスバルさんはとても優しい顔をしていた。

「あ……あの！エバンさんから聞いているかもしれませんが、数日の間ご一緒させていただくマリアと言います！ よろしくお願いします！」

ガバツと、音でもしそうな勢いでお辞儀をするもんだから頭がクラクラしたらしく、フラついてしまっている。

「……こちらこそよろしくお願いします。」

二人は暖かな眼差しで、トスバルさんは体型に似合わず倒れそうなマリアを支えながらウィンクして見せながら。 そんな風に好意的に三者三様、受け入れて貰えた様だ。

早速、手荷物を積み込んで彼女には馬車に乗り込んでもらい、俺はいつもの様に御者台横に飛び乗る。

御者は商人のトスバルさん。

暗くなる迄はトスバルさんと俺で交代で御者をし、夜間はシャンテとマイクに交代する。

見た目は犬だが一番、御者が上手いのはマイクだったりもする。

それから数時間……。

マリアはシャンテと既に仲良くなったのか、幌ほろの後ろから周囲を眺めながら二人でキャツキャツしている。

どうも彼女は実年齢より現在の精神年齢が少し低いらしく、少女と話している気分になる。

それがなんかくすぐったいと思いながら俺も世話を焼く。

例えば、彼女が女将さんから持たされた長包丁は嵩張かさばるから俺が亜空間バックで預かり、

申し訳程度のランクのシダ材の弓は鉄材の補強を付けて錬金強化しておいた。

これで自分の身くらいは守れる筈を建前に。

あれからもう一つ村を通過し、手早く配達等の頼まれ事を消化。

夕方には特に特徴の無いマンソンと言う村に入る事が出来た。

元凄腕の戦士と言っても女性、神の加護も無くなってしまっていた馬車の揺れはシンドかったらしく、疲労も濃い様子。

彼女には夕食を食べきったら倒れる前に眠って貰った。

この辺の気候は少し冷える位で過ごし易く、乾燥気味なので油断すると直ぐに風邪を引いてしまうから、しっかり毛布にくるまる様に言って部屋を後にし、俺は自室に戻った。

翌日、午前は移動しっ放しだったが何事もなく過ぎ、発光石も緩やかに暗くなりだした頃、尾けられていたのか待ち伏せられたか、沢山の盗賊からの攻撃に突如として襲われ幌ほろの隙間から相手の人数を数えたが、多勢に無勢だと判断した俺はマイクに全速での疾走を指示。

「うわーん！ 前にも沢山居るんです〜！ どうしましょー！？」

ベソをかきながらの悲鳴に思いつきり轢ひいてしまえと言い放ち、女性陣には弓での援護を頼む。

万が一が有ると嫌なのでトスバルさんには隠れてもらい戦況が悪い様なら逃げて下さいとお願いしておく。

使わないで置ければと思ったけど盗賊側からの攻撃は苛烈で火矢が打ち出されてきた。

出し惜しみは無理そうなので、神技『クリエイトウォーター』を最大級で吐き出し奴等の戦山羊いくさやぎごと押し流す……。

追い撃ちに蓄電石を錬成して波に投げ込んで濡れていた全員を感電させ致命的な火傷を負わせる。

前方ではでたらめだけど大量の射撃と、意外にもトスバルさんの正確な『光魔法の矢』ルミナスアローにより相手も火矢による反撃しか出来ずに撤退したらしい。

走行中に馬車の火は俺が消し、ひたすら逃げ続けて難を逃れた。

果敢に応戦していたマリアも、今更怖くなったのか小さく震えてシャンテと寄り添っていた。

記憶を無くしてから初めての戦闘……、無法者とは言え対人戦だったので仕方も無いか。

夜通し走り続け、岩ヤギの脚と体力の限界に近い所でギリギリで村に逃げ込む事が出来たのはとても助かる。

運搬の脚がこんな状態では明日の出発は無理だろう。

トスバルさんと話し合った結果、まだ日数的には余裕があるので

ヤギを休めるついでに馬車も補修してしまう予定にしたから、のんびり疲れを抜いてもらいたいそうだ。

狂乱の災禍

目の前には何処か思い詰めた様な中年男性の一对の視線。

あえて言えばグラマラスと言えなくも無い体型……特に腹だが、面と向かってただ見つめ合いたい間柄じゃ無い。

「あの、トスバルさん用件は何でしょう？」

強引にすつとぼけてみたけど、

反応が無い、只の屍の様だ……って、お約束は置いて。

まあ、大方の予想としては昨日の小さい河川の氾濫はんらん並みの水魔法の件かなー？　なんて予想は立っているんだけどね。

そんな風に考えていると、

「まず確認なんですけど、本当に神官では無いんですね？」

それを肯定すると

「私自身も低位の光魔術を使いますが、先日のあれはどう見ても自然魔術ではありませんよね？」

始めにと前フリ、

「誤解しないでもらいたいのは、糾弾きゅうたんしたい訳では無いと言う事です。」

「一体全体、あれだけの水を一体何処から引き出したんですか!？」

興奮が押さえられないかの様に声が大きくなる。

「この地方は比較的に見て水に恵まれてますが、殆どどの地域で水は貴重なんです。」

あれだけの水が呼べるのなら、いくら稼げるか……!

「是非、その様な技が在るならばご教授願いたいのです、主に儲けの為に!!」

一部、本音の熱弁をふるうトスバルさん。

なんだ、儲け話としての詮索だったのか。

構えて損した気分。

いやー 流石、商人としか言えないっすね。

今後、個人的に水を売る事を考えても良かもなーと頭の隅で考えつつ。

今回の俺の錬金術の師匠が旅立ちの際に持たせた物で、使い捨ての高価な魔道具だったと誤魔化してみる。

神族だとバレてしまったら、それはそれで良いが今は正直言っ
て面倒だ。

次は作り方を聞いておくからと話を納めた。

落とし所も決まり、本来の中休暇として村の中でも散策しようと目を向けてみると、複数の家屋から煙が上がっている事に気づいた。

そんな馬鹿なと目を疑う規模だけど火事臭い。

内密な話と言われ、かなり村の外れに来てしまっていた自分達を罵りながら元来た道を全力疾走。

近づくにつれ人々の怒号や悲鳴が聞こえ出す。

これは本格的に拙い……。マリア、無事で居てくれ！

村はどうやら魔物に襲われているらしく、ここからでは詳しい様子は解らない。

更に悪い事に、俺達の方にも魔物が迫って来ているし。

いつもの様に魔物知識スキルで看破^{かんぱ}しようとしたが、運悪く思い出せない。

相手は敵対的で、全身を鱗が覆い・粗末な槍を使っているとしたか解らない。

さいわい敵は2体のみに見えるし、今回は武器を携帯して無いなんて事も無い！

「捕食^{プレデーショナル}の鎌」を引き抜き、瞬時に接近……回転しながらの4連斬りを浴びせかけ、1体を瞬殺、血と臓物をぶちまけ絶命。

その際、返り血を浴びた箇所や地面から、モノが焼ける音と眼に沁^しみる煙が上がる。

「どうやら血が強い酸性の様です、遠距離魔法での援護をお願いします！」

指示し、残った遠心力を利用して左の刀身を射出、続いて手首を反し胴体を絡め捕ろうとするも意外と素早く、回避され下を潜って来た槍を右で弾き飛ばす。

左を巻き取りながら遅めの斬撃を繰り出し、わざと避けさせ距離を作る。

そこで後方でタイミングを計りつつ唱えていたトスバルさんの詠唱が解き放たれる。

『闇抜つ天の光明　請い願うは　条じょう鳴る魔弾　光の矢！』
ルミナスアロー

指先からの1条の光は3本に分かれ目標に突き刺さり、精神ダメージを受けた魔物は気絶。

昏倒した蜥蜴人とかけの血を浴びない様に止めを刺し、ロスを取り戻すべく再び走る。

村に着くまでにまた襲われたが連携してこれを撃退。

しかし、トスバルさんは既に体力も魔力も限界らしいが、置いて行く方が危険だから頑張つて走ってもらうけどね。

やっと着いた村は、既にかかなりのダメージを受けほぼ壊滅状態…、村人の声もあまりしない。

焼けていない家屋を回りながら生存者を探すが死体が有るばかりで収穫は無し。

暫く警戒しながら歩き、宿へ向かう。

すると俺達が泊まっている宿を中心に、さっきの蜥蜴人とかけや武装した大きいゴブリン等が包囲している場面に出くわした。

生き残った村人達と一緒にマリア達も奮起し、戦える村人と助け

合い前線を張って持ちこたえているみたいだが如何せん劣勢としか言えない。

咄嗟に魔力の尽きたトスバルさんへ自作の魔力回復丸を投げ渡し、お代は後日頂きますと言いつ放つ。

彼はちよつとビックリした顔をした後、にっこり笑って丸薬を噛み砕いた。

『引き寄せるは勝利の光明　籠めるは日輪の勇志　降り堕ちろ　ル　ミナスアーク！』

気合の入った詠唱と共に大きな光の柱が魔物に降り注ぎ、次々と意識を刈り取って行く。

どうやら今回も精神ダメージの様だ、恐ろしいな光魔法。

「これでホントにスツカラカンです。」

そう言いながら崩れ落ちる、息をするのも辛そうだ。

今ので包围に穴が空き陣形が崩れた。

厄介な蜥蜴人を大分減らしてくれたので前線に飛び込み、お得意の回転連撃をお見舞いする。

強化された「捕食の鎌」が翻る毎に血と内臓の竜巻が起きる。

適宜、刀身を射出し絡め捕り行動を阻害^{そがい}、そこを村の戦士が斬り付け・マリアとシャンテの急所を射抜く矢が飛び命を刈り取る。

長い戦闘が終わり何とか防衛に成功！

「無事で良かった、マリア！ シャンテもマイクも怪我は無いかな？」
皆で無事を喜び健闘を称える。

――その上空――

「あはー。あんなに喜んじゃて、まあ 無防備。」

ニタリと笑う人影は魔術師然としており厚手のローブからでも華奢なのが見て取れる、その手には長大な刃を持つ身長以上の大ガマが握られており、異常に紅い長髪が空を泳ぐ。

「そんなツマラナイ、お馬鹿さん達にはお仕置きが必要だよね？」

爛々と耀^{そうほう}く双眸には狂気の光。

瞬間、空間を飛び越え瞬間移動^{テレポート}して完全に警戒を解いているエバンの背後へ、大ガマはエバンの左の脇下に潜り込んでいる。

目の前には良く分かってない表情のマリア。

「お・馬っ鹿・さん♪」

嘲笑^{ちやうしょう}しながら魔術師が大ガマを振り抜く……、長い刃先がマリアの頬も浅く裂く。

「あああああああああああああああ……！」

反射的に首は遠ざける事が出来たが、脇から肩首にかけて鋭利に切り裂かれ大量の鮮血が噴き出す。

激痛で頭の中が真っ赤に染まり何も考えられない！

意味の無い声が際限無く漏れ続ける。

滞空していた左腕が「ボトリ」と背後の地に落ちる。

落下音によって緩んでいた場が驚愕^{きょうがく}に爆ぜる。

皆が逃げようと二人を中心に広場が出来た、マリアは動けない……むしろ自失状態か。

「ツマラナイ」

魔術師が冷めた目で一瞥^{いちべつ}し、

『我が名はスザフィーザラ 悪意の鬼子・恐怖の体現者達よ 我に従い奪い殺せ 眷属召喚^{ディベンデンス・コール}！』

無数の首持つ大蛇・人食い鬼・悪魔の様な何か・出来損ないの獣みたいなモノ……、男の詠唱により先の量に倍する魔物の群れが召喚される。

「生きていたらまた会おうねー？ 御機嫌よう」

そう言い捨ててまでも忽然と消え失せた。

未だ、嗚咽を漏らすエバンの傷口に突如、血色の氷が咲き血が停まる。

落ちた腕を中心に陣が浮かび、蒼白い光が起ち同様にエバンからも光が漏れる。

その陣は、エバンの背に在る刺青に酷似していると気付いただろうか？

世界を圧する様な強大な気配と共に、氷と雷光を撒き散らし余波で周囲の魔物が滅する。

そこにはエバンを守るみたいに巨大な獣が顕現していた。

大きさは優に3kmを越え、尾の先には雷光を纏う背には翼や角の様な器官が在り、頭上には氷の冠が帯電しながら廻る。

だが、その姿はイタチなのだった。

神獣×隻腕の錬金術師×それぞれの明日

騒ぎの中心に居るエバンは意識が定まらず、昏倒しない様になっているので精一杯で地面に両膝を付き突然現れた巨大な獣に寄り掛かって居る。

「その娘よ、お主は光の神の遣いであろう？父上を癒してくれぬか？」

巨獣が人の言葉を話す。

常日頃なら驚いただろう状況だけど、痙攣と共に我に帰ったマリアが慌ててエバンの肩に神技『癒しの手』を発動。

痛みが薄れたせいかエバンは気を失ってしまった。

今まで影神の神官であつたマリアが神聖光神魔法を使って治したのだけど、今それに気付ける存在は居ない。

問題無く『癒しの手』は、しっかりと柔らかな光を辺りに放ち癒しの波動を感じさせる。

反面、勇ましい巨獣は稲光を纏い魔物達を睥睨し。

「我が父上を傷付けた罰、万死に値する！　その粗末な命をもって償うが良い！」

大音声と怒声でもって言い放つと纏った稲光いなびかりを放射状に幾つも放電。

一本、一本が100万ボルト以上の光条が敵の身を焼き一方的な虐殺が始まる、雷に耐性の有る魔物も鋭利な爪と氷によってゴリゴリと潰す潰していく。

大量に居た魔物達も10分とせずに屠ほふり、元の位置に丸まり主を守る態勢に入った。

応急措置を終えたマリアに一応は礼を言うが、もう寄らせる気は無いらしく近づけない。エバンは回復の為か昏々と眠り起きる気配もない。

何とか生き残った人間達でもう一度生存者の探索をかけ、戦士職の村人が近くのルインナラカまで助けを呼びに行くらしかった。

私たちは魔力を過剰に使って昏倒してしまったトスバルさんを、三人がかりで宿に運搬して寝かせて出来る事を探そうと再度広場に集合。

けど……。料理人さんやお母さん達の作る炊き出しの手伝いをしたかったけど、お砂糖と塩を間違えたり、瓦礫につまずいてお皿割ったりで「あんなに働いた後だからー。」とか「ここはもう良いから大丈夫よ。」とか、やんわりと断られちゃいました。あんまり向いてないのかな？

今度は緊急医療テントに赴き、エバンさんにも使った『癒しの手』で酷い怪我を中心に癒す手伝いをしました。

不安に苛まれている患者や精神的な苦痛を和らげる光神様の自動^{シブ}発動スキル『精神の揺り籠^{ソウル}』と周囲の生命体の自然治癒力を高める自動^{バッシブ}発動スキル『自然なる治癒の波動^{ホーリー・スパーリング}』が役にたち、ここで移動までお手伝い出来そう。

ちなみにマイク君は厨房で料理を。シャンテは火の自然魔術が使えるので、生活全般の便利屋と狩りでの食肉調達でちゃっかり稼いでいる様だった。

遅しいなー、二人とも。

翌日には起きられる様になったトスバルさんも、行商品で買い手の付いていない品を格安で提供する事にしたらしく村長にとっても感謝されている様でした。

皆の協力と協調、皮肉にも生存者の少なさから復興は望めないけれどインナラ力まで避難する事は出来そうなんだとか、私が歩行困難者や精神疾患患者を癒せたのも大きいそうです。

知らせに行った戦士が騎士団を連れてきたら、皆で避難する予定で居るそうだけど……、廃村になっちゃうのね。

- 村が最後の足掻きと日常を維持しようとしている時 -

エバンは白く暖かい毛皮に包まれて目を覚ました。

強張っている肩を伸ばそうと立ち上がると、その毛皮の主も立ち上がる。 思ったより疲労は無い。

カシヤンと軽い音と共に肩に生えていた血色の氷も役目を終え地に還る。

そこにはやっぱり左腕は存在しなかった……。

巨獣の顔を見上げ、「おはよう……俺の息子。」と言うと彼は「おはようございます、我が父上。」と顔を擦り付けてきた。

何となく俺の体から生まれ出たのが分かった、かなり咄嗟だったけど、『御^{みたま}霊分けの儀式』が発動して別れてしまった神の血と肉と骨・コアの一部の邪神化を対極の神獣に作り変える事で防いだのだろう。

小水神の最後の置き土産かな？ もう体の何処にも彼の意思は感じられない、コアも割れてしまったから維持できなくなって俺の中に溶けたんだろう。

それにしてもあの男は何だったんだろうか？ ほぼ神の肉体に成

っている俺の腕とは言え、本来は切り取れたりしない。

何故なら直ぐに再生してくっついてしまつから、俺が水属性だからそれは顕著けんちょだろう。

考えられるのは同じ存在としか思えない。これはあまりのんびりして居られ無いかもね。

考えに沈んでいると、「父上、そろそろ命名をお願いして良いでしょうか？」と神獣が囁く。

どうも神獣に限らず、霊獣・魔獣・召喚獣に至るまで命名される事で力が増し、主との絆あそじ（強制力と読み替えても良い）が強力になるのだと言う。

言われて直感的に思い付いた名前「ヘイルサンダ」と命名した。

確か、古代祝詞語で<<完全な稲妻>>と言う意味だった筈だ。

その後、能力の説明を受けたのだけど彼は空も飛べるそうだ、あまり得意では無いと言っていたが移動の手段が増えるのはありがたい。

大きいままだと一緒に行動するのが不便だと言うと、猫くらいの大きさになるそうなのでそうさせる。

皆に合流してからマリアには泣かれてしまつし、マイクはヘイルに超怯えるし、もう隠して居られなくなつてしまったのでヘイルは

高位の靈獣で俺は腕を生贄にして彼を召喚したのだと、嘘を交えて無理の少ない説明をした。

納得したかは判らないがそういう事にしてしまい翌日……、俺達は村人達に見送られて廃墟になった村を出発。

道中、雨溜まりの直撃を受けそうになったり魔物に襲われたりしたが難なく撃退。大きなトラブルも無く中継都市キンドマツクに入る事が出来た。

トスバルさん達とはこの都市でお別れ、また何かあれば一緒に組む約束をして彼らは仕入れに向かった。

ちなみに武器は二本も持つ事が出来なくなり、それぞれを纏めて鉱石に戻し俺の血を混ぜて練成、長さを二倍に一振りで二度のダメージを与える金属の鞭・巻き取り機能付きと言う便利アーティファクト『撲殺金化鞭』に作り変えている。

完全に後衛になってしまったから前衛が欲しい所だ。

同行者探し 1

キンドマックに着いて、まず驚いたのが人の多さだった。

イストフラウスも人は多かったが、住み分けがされていたり閉鎖空間だったりであり目立たなかったから圧倒される。

「こんなに沢山人が居たら住むところが直ぐに無くなるんじゃないかしら？」

マリアがもつともな質問をしてきたので、おそらく半分以上は旅人か商人・冒険者だろうけどねと答える。

ヘイルサングヘキエキも小さくなったままで人の群れに入るのは初めてだから少し辟易ヘキエキとしてるみたいだ。

人が多い事も有ってか、俺を気遣って左肩に乗って居てくれるのは有り難いし落ち着く。

それは元が左腕だからだろうか？ 彼も左利きだし。

そうそう、あんなんでもヘイルサングの本質は守りである。これでも左に起因する性質らしい。

そんな事をつらつら考えつつ、人に紛れてからは身長が低い俺は波に隠れてしまうのでマリアに方角を教えて貰って歩き、冒険者ギルドに向かう。

気にはしてたんだけど鮮度が落ちていたり、腐ったりしたら堪らないので、バックの中の生体素材やらを売ってしまいたいのだ。

それなりの実力のある魔術師が同行してるなら『腐敗防止』ビュリフアイの魔法をかけて貰いたい位だ。

考え事に沈みかけたせいで途中、人にぶつかりそうになったけど、怒鳴りかけてたおじさんもこの肩をみると痛ましい眼をする……、何故か糖石（飴の様なもの）を貰って背中をポンポンされた。

むう、なんか釈然としないぞ。

嫌な気分になりそうだったからさっさと忘れて、ギルドに入る。

早速、素材の鑑定をして貰いつつ宿の手配もして貰う、今回は仲間を募集したいので泊まるなら近い方が便利だからだ。

暫くして、ダガーウルフの犬歯に毛皮・デスバイパーの毒袋・キメラの魔眼・戦山羊の角・魔石に蛇鱗など、素材が中々に高額で捌けたので、マリアの亜空間バックも見えて貰うと精神波が登録されているものと少し違う様なので調律出来ればまた使えるとの事。少し時間が掛かるので腕輪を外して欲しいとの事だ……けど、コモンドワードがわからない。

仕方無いので彼女は現在、記憶喪失であると伝えると考えた後、それなら2パターンの波長を登録してはどうかと言うので任せてみる。

元が一緒ならセキュリティとしても問題無いらしい。

金は掛かるけど直ぐ終わるそうなのでやって貰い部屋へ。

もちろん、個室を2つですよ！？

その後、二人で併設のサロンに行き休憩がてら中に居る冒険者達で頼りになりそうな前衛っぽい人を探してキョロキョロ。

何人が凄い装備やら強そうな人は居ただけど、なんてーのかな……、やたら真面目そうだったりビシツとしてたり上品だったりで、なんかしつくり来ない……、寧ろ俺達^{むじ}って浮いてる？

ヘイルサンダを見ると「父上は冗談が得意なのだな。」って感心してた。駄目っばい、マリアと苦笑しつつ掲示板に募集のメモだけ張って帰る。

なんか視線を感じたけど気のせいかな？

空振りしてる間に夜が近くなったので冒険者の酒場に。こっちはサロンと違って粗野ではか騒ぎだ、こっちもウキウキしてくるヘイルサンダもマリアも陽気な方が好きみたいだし好都合。

俺達は奥に陣取ってそれぞれのアルコールで乾杯！

皆、とりあえずビール派では無いようだ。

一緒に居てマリアが飲んでるのを初めてみるけど実は大好きみたいだね、お酒。物凄い飲みっぷりでウイスキーを空けていく。

そうなんだよね。彼女、茶色い系が好物らしい。

しかもペース速いなー、でも酔ってない様子。

な、なんか食った方が良くないすか？ 流石に心配になる。

ちなみに俺は梅酒とか果実酒とか。俺は俺なんすよ！その分どっさり食ってるのでイーブンで！

…。
いつの間にか騒ぎの中心になってる俺達にまた不自然な視線が…

騒ぐのに夢中でこの時は気付かなかったけど。

久しぶりに飲んで騒いで楽しかったのだけど、最後まで酔えなかった。

まあ、自動発動スキル『パッシブ全毒無効』が片っ端から解毒してくから仕方無いね。オートデトックス

そして翌日もギルドに出て、軽めの依頼を解決したり、調達系の依頼を受けたりして過ごし、夜は酒場で大騒ぎ。

マリアのバックにウアラの頃のギルドカードが残っていたので、更新してランクダウンして貰ってただけど再度、稼ぎ直して二人ともBランクまで上がっていたり。

狙い通りに、ここ数日で仲良くなったマスターに俺達に合いそうな前衛職を紹介して貰って一緒に飲み、気が合いそうなら同じ依頼を受けてみて相性を探る日々。

けど、こちらの事情まで込みで同行をお願いしたい信頼出来そうな人物は現れず。

依頼で地域の魔物に倒せないものも居ないし、ハウルベルは此処からまだ遠い。

仕方ないので出発する予定で挨拶周りをして馴染んできた宿も最後かと思いながら眠りに付いた。

同行者探し 2

プレッシャーVSプレッシャー。

焼けるような重圧を放つ、魔獣と竜人。

まるで空間の支配権を奪い合う様な視線の攻防。

それは見上げる様な巨体にライオンの様な鬣^{たてがみ}、しかし、頭部に有るのは縦に裂けた一つ目と牙鋭い口腔^{くわう}のみ。 対するは、重そうな騎士鎧を着込み、盾と長斧を構える人間形態の竜。

全身の鱗は炎の様な明るい赤色で長太い尾が地を這う。 眼光^{すなわ}には不退転の意志が宿り、あらゆる攻撃を引き寄せる……、即ち竜族^{ガーディアン}の守護者のみに許されたスキル『龍の眼光』を発動。 防御力で劣るエバン達を守る鉄壁となる。

その威圧は魔物にして、殺らなければ殺られると思わせるには充分で、後衛を狙う一撃さえ引き寄せて強靱な龍鱗と装甲で弾き散らす。 その隙を縫い逆にエバンの『撲殺金化鞭』がしなり手数以上の手傷を負わせ、マリアの放つ矢が急所に吸い込まれていく。 その矢には光神の操る自失魔法がたつぷり乗っていたりする。

- - そんな激戦から時を遡る事3日あまり - -

街を出ようとした翌日の早朝。 敵意は無いらしいが何やら戸をガンガンノックする訪問者の気配。

ただ人の部屋に来るには些いさか早いと思われる時刻……まだ眠い。

けど、出るまで叩きそうな気配がするので近所迷惑を考えて、素早く戸を開き奥歯を噛み締める。

準備は万端、鳩尾みぞおちに一発アッパーをぶち込み「五月蠅うるはい！」と抑え気味にくれてやる。

「げふうう」と鳴いた所をみるに良い具合に入っただみたいで何よりだ。

冗談はさて置き。 実際あんたはどちら様よ？ と聞くと、俺達と同じで冒険者だそうだ。

同じ宿に部屋を取っている竜人のエミリオ「ラグランシェと言うらしい、職業はガーディアンだそうだ。

どうも俺達の募集張り紙を見て来たらしい。

今は宿内なので武具一式は部屋に有るそうだが、本来は重武装で

龍化状態が普通なので、俺の一発を貰ってしまったらしい。

まあ、宿で完全武装で来る様な馬鹿はこちらも願ひ下げで滅殺確定だけだね。

ちなみに竜人族の特徴として半人形態と竜人形態があつて姿が全く異なる、人の時も広範囲の皮膚が鱗で覆われ瞳の採光がアーモンド型、鱗の分布は人によつて違う様だ。

竜人の時はワニの様な顔立ちで角を持ち、全身を龍鱗が覆い非常に硬い。更に翼と尾を持ち『龍の息吹』ドラゴンブレスを吐くのが特徴。

説明するとすさまじいね、戦闘民族。更に職能（職業固有スキル）も失わない。難点は怠惰な性格の者が多い事。生活スキルが壊滅的に苦手で魔力もあまり高いとは言えない。

彼も例に漏れず魔法が苦手だそうだ、ブレス属性は火焰。

ここ数日、暇が出来たらこちらを観察して自分に合うか考えてモタモタしてたら、仲間探しを止めて出発するって噂が聞こえたから急いで来たらしい。

天然つてやつですか？ そーですか。

じゃあ、寝起きでする話でもないし身支度を整えてマリアも起こ

して近くの飲食店に入る事にする。

ここはお手軽な値段で軽食が食えて、更にドリンクも付く冒険者に優しい店で味も中々。

それぞれが飲み食いしながらだけど、さっきのやり取りをマリアにも教える。その後、エミリオの口からも「俺も他の冒険者と同じ様にお試しパーティーに組み込んでくれないか？」と正式にお願いがあった。

俺達はお願ひされても良いかな〜と思っていけど、「そちらの靈獣殿もお願いします！」と言う言葉に「我は構わない。」と思わず言ってしまうてからエバンをすまなそうに伺う。

問題ないよと頭を撫でてやり「良いよ、まずはお試しで」と返す。

なんだか彼には敬語で反す気になれない（苦笑）

ならば、まずはギルドで適当な依頼でもと言つと。

「その事だけでも、俺が受け持つてる依頼を手伝って貰えないか？期限は残り1週間、見付かったばかりの洞窟調査だけど、現場が遠くてあんまり進んでないのだ。既に1・2階は終わっていて最後は3階のみかなって感触なんだけど、どうだ？」

「こり押し感はあるけど、俺達がまだ受けた事の無い依頼で、挑戦

してみるのはやぶさかじゃないけど、本来は雇う方なのはどうしてこうなった!? 最近おかしいなあー、早く国に帰らなきゃ。

ちょっと逃避しちゃったけどマリアが「調査の終わった場所の地図を見せて貰えます?」と言うと、竜言語を呟きノートサイズの線図を呼び出した。

驚く俺等……、魔法は苦手じゃ無かったんかい!?

「違う、違う。これは魔法じゃなくて竜言法と言う竜人族の技法スキルで決まった言葉で決まった効果が出るんだよ。昔、爺様に聞いたら血の力だと言っていたな? 俺にはチンプンカンプンなだけさ。」ワタワタしながら弁明する。

他にどんな種類があるのかは後で聞き出す事にして出された図を讀込む。割と広いようだけど通路は単純、記述には畏の類も無い様子。

「住み着いてる魔物は強い? どんなが多い?」斜めの絵画を眺めながら

「龍化した俺よりは弱いけど、集団で襲ってくる獣ぽいのが多かった気がする……、後は偽装系イミテーターの魔物が幾らか……。」何と云うか、良く一人で生き延びたな。

流石に竜人、普通なら全滅の臭いがするよ。 だけど、この三人なら余裕かな。

「解った、手伝うよ。 報酬も悪くないしね。」実は連日の仕込み

豪遊で所持金が危ないのも解消出来る。

無駄に私物も売りたいくないから尚更、断る要素が無い。

- -この後に街を出発、冒頭へと繋がる - -

エバンの技能で見抜いた魔物はラロップスと言う一つ目の獣系魔物で、自分より弱い魔物を支配する能力を持っている。そのため取り巻きが必ず居る厄介な奴だ、見た目も酷く恐ろしい、場合によっては気絶を堪えないといけない位。

どうもここはラロップスの巣だったらしく現在も集団に囲まれていて絶体絶命だけど、エミリオが『龍の眼光』で引き付けつつ珠に火焰ブレスを吐いてくれるのでボスの殲滅に注力出来ている。

彼は殺到する攻撃も盾で受け、時に避け、武器で受け流す事では無効にしている。

これは頼もしいな、無傷とはいかないが脅威だ。

ヘイルサンダも狭く巨大化出来ないが電光での範囲殲滅に貢献している。

そうこうしているうちにマリアの自失魔法がクリティカルシラロ
ップスは昏倒。健闘したが俺達には勝てねーさ！

難敵の撃破で俺達のテンションは高い。

同行者探し 3

どうやら此処が最後の玄室^{げんしつ}らしく、奥に続く部屋は無い。

手分けしながら死屍累々の部屋を探索しつつ剥ぎ取りも済ませていく……、余りにもラロップスの取り巻きが沢山居たので取れる素材も多く嬉しい悲鳴だけど、作業がなかなか終わらない。

俺は片腕になってしまったから、こういう作業が上手くいかず少し寂しい想いをしつつ警戒と探索をメインに行動。

迂闊にも軽く気を抜いていた時に、最後の悪足掻きだろう死に掛けのラロップスが居たらしく、その恐ろしい頭部をグリングリン回転させ飛ばして来た。

口を大きく開き狙う標的はエミリオ。

俺がすんで警告を出せたので気付いたらしく、振り向きざまスウェイで回避を試みる。

しかし避けきれずに肩を噛まれたけど殆ど鎧で止まり、浅い傷と鎧パーツの破損で済んだ。

肩から頭部を引き剥がし、背後の壁に叩きつけてやると鈍い音と共に今度こそ絶命。その衝撃で岩壁に亀裂が入り奥に材質の違う緑の光沢が見えたので、エメラルドかと思いエミリオに破碎して貰

う。

こう言う時、怪力つて便利だなと思うよね？ ガラガラと岩を退けた先には緑色の金属で出来た壁と薄暗い通路が左右に伸びていた。さっきのは破損した壁の一部だったらしい……、てえか余計な物見つけちゃったなー。けど、ここで帰るのは勿体無いと言う事で探索続行。

掘り起こした遺跡は、ほぼ金属で出来てる様で歩く度に甲高い音が響く、明かりは設置されていない様で少し先は真っ暗。

「危険だし、第一怖いよね？」って事でマリアに頼んで『^{ライ}持続光』の魔法で明かりを出して貰い、俺も松明に火を灯す。

何だか異界の施設の様な造りで、生き物の気配が限りなく薄い……。始めに向かった方には鉄の扉がありエミリオが開けようとしたけど重くて少ししか開かず、隙間から見えたのは狭い箱部屋のみだったそうだ、横に有るボタンも反応しない。

進入口まで戻り今度は反対へ。道なりに通路を進んで行くと、時たま扉に出くわすけど開く様子が無い。

誰もが「これは外れかなー？」と思い出した頃に、破損して開いている扉を見つけ恐る恐る入ってみる。

中は意外と広く沢山の乳白色の筒が立ち並んでいて、奥に円形に配置された色々な大きさの箱が沢山有った。二人はただ気味悪が

っているんだけど、間違い無い。

此処に来て異界の建造物だと確信した、電気が来ていないから動かないだけで軍事施設跡かもしれない。

筒の中には生物が入っていた痕跡があるけど骨と何か腕の様な巨大な機械パーツと一緒に転がってるだけで、なんか哀れだ。これも俺にしか解らない事だけど生体兵器でも作っていたのかもしれない。さいわいにも施設が稼動していないので、生存する個体は居ないと思うけど焦るな。

多分、こんな装備じゃ対抗出来ないよね？ 経済レベルの違いをひしひし感じる。

調べるたつてダイヤル回したりボタン押したりくらいしか出来ない。一通り探索して何処かのカードキーを手に入れたけど、使い方も謎だよな。

成果上がらず、これまたひしゃげた扉を潜った先にはなんと、まさかの稼動個体！ やばーい！ 皆に最大限警戒を促して急ぎ下がる。

この部屋は細長いがやはり狭く天井が低い、これではヘイルサンダも全力を出せず戦闘力も半減。どうも漏電しているらしく思い出したかの様に何処かの破損部から紫電が散る。この部屋は電気が生きてるのか、なんて迷惑な！

今さつき出て来たかの様な異形の魔物は二体、先程見た骨に付いていた様な機械パーツを腕部にしている人間族の様なもの、もう一体は周りの壁と同じ様な材質で出来た犬の様な物体。識別するま

でも無く知識に無い生物なので開幕、ヘイルサンダにお得意の氷雷撃をかまして貰ってエミリオと俺が乱戦状態に持ち込み、それぞれに人もどきと金属犬に衝撃属性ダメージを与える。

人もどきの方は朦朧もうちとしてくれた様だけど、金属犬は直ぐ反撃してきた。背にある二本の突起から長く尾を引く光線を発射、危険を感じたエミリオがエバンをプロテクト状態で庇い盾を構えるが構えた盾ごと碎かれ、小手をも破壊……、鎧も半壊し辛うじて龍鱗で停まったが凄いい熱だ、赤龍族でよかった！

「これは洒落にならないんですけどー！」 あんまりな結果に盾の柄を投げ捨てエミリオが叫ぶ。

『光とは白雉はくち 金色の喪失に歌い 新しきに遊べ 光神の慈悲よ！』
マリアの祈りに応え二体を巻き込んだ自失魔法が炸裂。

この一撃で人もどきは何もさせて貰えずに撃沈するも金属犬には効いて無い様子。

「ナイスサポート！」 俺も鞭を絡ませ、動きを封じるが力も異様に強い引きずられる。

更に光線を発射しようと充填を始めた所で限界と鞭を解き退避、阿吽の呼吸でヘイルサンダの落雷が直撃。雷を受け金属犬は白煙を上げて停止し、溜めていた光線が誤爆して粉々に爆散する。

次の部屋にも金属犬が一体起動していたけど今回は遠くから俺が錬金術で地面に拘束し、ヘイルサンダに雷を連発してもらって完封。

更に次の部屋は小さな広場があり、直ぐに急な斜面になっている。
多分大型エスカレーターだと思うがここも動かない。

そこを暫く下ると激しく漏電している箇所がありバチバチと空間を閉じる様に稲光が道を塞いでいる。破損しているケーブルの位置を特定してヘイルサンダに氷付けにして貰うと放電が収まった。

溶けたら嫌なので素早く駆け降りて行くと四角い穴にくるりと柵が張られ、俺達から正面に1つ、左右に対になる階段が底まで続き穴の真ん中辺りに何か設置されている様だ。

自分達の最大限の警戒をしながら慎重に下まで降りる。

どうやら安置されているのは破損し、古びたポールアックスの様だ。持ち手と刃の接続部付近に抉られた様な痕があり、かつては何か嵌まっていたんじゃないかと思う。

金属自体は見た事の無い材質なので、溶かして鍛え直せば面白い素材になるんじゃないだろうか？ としか思わなかったがエミリオは違う様で、どうしても言うので『知識の柔石』を使い『アナライズ解析』を発動、経歴を探る。

（以前、割られてしまったコア・アーティファクト『知識の柔石』は、ヘイルサンダから帰して貰い体内で再融合してあるので暴走の危険は無くなった。ヘイルサンダとは肉体のパスが通じているのでこの世界のこの年代に居る間はお互いに不都合も出ない。）

アナライズ

『解析』の効果でエバンの脳裏をポールアックスの過去が巡る、肉体に触れる事で同じ情報を共有出来るので全員で手を繋いでおく。

場面は鍛冶の様子から始まるかと思いきや、既にポールアックスと

して完璧なフォルムでそこらに生えてる筒の様な物に入れられている光景が映る。その筒には液体が満たされて居る様だ。大勢の作業者が何かの機器を弄り記録していく場面、今度はがらりと変わり紅蓮の業火吹き荒れる市街地、どうやら地上の様だ。

そこで遅しいエルフ女性に振るわれるたび爆炎を上げる姿が映る、既に決っていた穴には真つ赤な鉱石が嵌っている。

その後も人は変われど、何処かで破壊の限りを生み出す場面と感化され喜ぶ感情と強烈に嫌悪する感情がほんのりと感じられるのは一緒だ。

どうやら破壊と殲滅に特化させられた武器らしい、本来は守り助ける役割を持つのに、間逆の役割を求められ過ぎて壊れてしまった様だ。

意思を持つ武器として調整されていたのも不幸を呼んだのか。

その後、研究は凍結。施設は破棄され狂ってしまった武器としてここに放置され朽ちていった様だ。物とはいえ不憫な事だ……、『解析』^{アナライズ}の効果が切れ現実に戻ると、唐突に貧相な鎧を纏った幸薄そうなおっさんが不似合いな鋭利な刀を構えてポールアクスに手をかけていた……。皆一瞬、固まってしまったが直ぐに散開して戦闘態勢に移る。

必要以上にオドオドしながら、貧相なおっさんが「ちくしょー、気付かれちゃった！近づくんじゃないやねえ！」と言いつつ刀を振るう。

上手く避け切れなくて刃がエバンの腕を浅く傷付ける。どうやら何らかの魔法の品の様だと警戒を強める。

が……、なんか可哀想なんだよなー、このおっさん。

皆もなんか不憫な目ーしてるし。

「ううう、そんな眼で俺を見るなー！」おっさんが泣き出した。

おいおい、勘弁してくれよ。 呆れながら、

「その武器にそこまで価値は無いから辞めなつて」と説得してみる。

すると感極まったのか叫びながらポールアクスを叩き壊そうとした、あれに思い入れを持ってしまっていたエミリオが止めようとするが、盾が無いのに気付き腕でガード。 龍鱗が有るとは言え流石に防げず鱗が裂け血がしぶき大量にポールアクスにかかる。

反射的に右ストレートでおっさんの顎を打ち抜くと気絶し倒れてしまった。 なんて弱いんだ、おっさん（驚愕） 完全に入った様で暫く起きそうにも無い……、こんな所に放置して勝手に死なれても寝覚めが悪いので捕縛して連れて行くしかないか、嫌だけど。

厄介ついでにおっさんの持ってた刀に『アナライズ解析』してみる。

あー、こりゃ酷い。

後で丸々と教えてやる。

一息ついて部屋を探索。　どうやら此処が最深部らしいし、得る物も無い。　帰ろうかという所で先程のポールアクスが無い事に気付く、いや無いと言うか形が変わっているみたいだな。

その形は巨大な卵……凄いいメタリックだけど。

面白いからエミリオのバックに入れさせて帰る事にする。

帰路での道中、おっさんの身の上話をぶちぶち聞かされて、皆少しうんざり。

彼はカバサルⅡダナンと言い35歳の人間で戦士メイン、サブ盗賊の冒険者なんだとさ。　若い頃はそれなりにマツチヨでイケてたらしいが、今じゃ万年Dクラスの貧相なおっさん。

真面目に依頼をこなそうと頑張ってたそうだけど何時からか何もかもが上手く行かず、肝心な所でトラブルに見舞われ報酬を貰えず、人のおこぼれに有り付くのも困難になってあんな事をしたらしい。

しかも、付いたあだ名がハイエナ……幸薄いなー。

もつしないから逃がしてくれって言われたけど却下。

アデイクアギオス

ちなみに刀の解析結果、『不義理の息子』は一見、切れ味鋭く丈夫で錆びない上等の魔法の刀に見えるが実は呪いのアイテム。使えば使う程に持ち主の運気を奪い不幸を呼ぶ呪いが掛かっている、その運気は製作者に行き帰って来ないそうだ。

捨てても持ち主に戻る『^{リターン}回帰』加工済み。それといやらしい顔のアンデットのイメージが張り付いていた……。

うん、気持ち悪い。

それを教えてやるとあんまりな事にむせび泣いていた。あんまりにも不憫だったからヘイルサンダの毛を練りこんだ鉄輪で封をして『^{リターン}回帰』を無効にしてやった。

これで少しでも人生やり直せとしか言えないわ。

イシス

その後、休めそうな場所まで戻り錬金術による派生技『供物護方陣』と言う複数の贄を五方に配する事であらゆる害意から身を守る結界を張り、在庫が沢山あるポーションぶっかけて全員で仮眠を取ってとりあえずの落ち着きを得る。

んで、今回のメインの理由だったエミリオの加入は満場一致で決定。特にあの金属犬の光線は彼が居なかったら死人の出る事態だったもの。

後で^{ひん}労いを込めて、破損した装備一式を作り直してやろっと……。多分、市販の物より上手く作れる様になった気がするし。

って、あれ？　なんか本末転倒な気がする……。何ででしょ？

そんなこんなで街に戻った俺達は依頼を完了させて、大量の素材を売り付ける為にギルドへとぞろぞろ移動。

冒険者ギルド受付でエミリオが竜言法を使い、前回の様に地図を出しギルド指定の用紙に転写。

ワイワイ言い合いながら、お互いが気付いた注釈を付け足して提出する。

その結果、追加マップ報酬として基本報酬の2・5倍付けを貰い、

今度は素材の鑑定を始めて貰う。

その際に紛れていた獣素材からラロップスの存在を確認、ラロップスは要・討伐対象らしく素材報酬とは別にラロップス討伐の依頼を完了したものとして話を詰めたいので、賞金と聞き取りのために個室に来て欲しいと頼まれた。

通された部屋は華美では無いけれど、綺麗な備品で統一されて使い易い空間作りに成功していて好感触。

部屋の主はまだ若そうな青年に見えた。

「むさ苦しい所に呼び出してすみません。私はこのギルドの責任者を務めさせて頂いているメサイヤと言います。」

さて、まだパーティーを結成していないと言うことで、今回はどなたかに代表をお願いして宜しいでしょうか？」

対応に出て来た、メサイヤに尋ねられ今回は依頼を受けたエミリオに一任する事にして話を聞く。

「皆さんが討伐してくれたラロップスですが、本来この地域に生息する魔物では無いのです。」

生態も良く解っていないので、覚えている限りの情報提供を願いたいのですが如何でしょうか？

報酬も弾ませて頂きます。」

俺達に提示されたのは、相場よりかなり高い額らしくエミリオが興奮していた。

俺やマリアは元々、あまり金銭に関心が無いのでエミリオに任せきりでどんどん質問に答えていく。

聞き取りに少し時間が掛かったけどトータル30万札程の大きな稼ぎになったので良しとしよう。

報酬は一部パーティー財産とし、残りを全員で3等分。破損した装備はパーティー財産から出し俺が錬金術で修繕する手筈にすんなり決まった。

午後は自由行動で決定。なんでもエミリオはいくらポーションで治療したとは言え、やはり失った体力は戻りきつてはいないそうで宿に帰ってド力喰いして寝るそうだ。

守って貰った俺達は怪我も無く動けるので、このまま買い出しに行く事にして別行動。

まずは食糧品店で日持ちのする食材やら加工品、飲み物は水と酒に分けて購入。

直ぐ使う用に幾らかは新鮮な食材も買っておいた。

聞いた話だとキンドマックを過ぎると、暫くは大きな街が無いので嗜好品や調味料は多目に購入。

宿に帰る道すがら、マリアが意を決した感じで俺に。

「私もそうですけど、エバンさんも術師系なんですから少しお洒落しませんか？

お金も沢山入った事ですし、そうしましょう？」

畳み掛けよとばかりに。

「私達、地味すぎる気がします！」と何だか、わあわあ言い募られてるけどスルーしつつ確かに同じ格好ばっかも寂しいもんだね、グーラサン縛りも無くなった事だし新調しようかな。

実は、先の遺跡で更に神化が進んだみたいで、日光に弱いと言う弱点が相殺され、幾つか新しいスキルが増えたんだよね。

なんで、もう太陽を見ても日光浴しても火傷しないのです！！
まあ、焼きすぎれば火傷するのは人間族と一緒にだけだね。

じゃあ、それならと急停止した俺にぶつかってこけそうになったマリアに。

「わかった、服屋に行こう。

服も錬金術で作るから反物や布束を仕入れに行こう。

気に入った生地や模様があつたら覚えておいてね？」首を傾け見上げる。

物思いに耽りつつ、素材少し残して置けば良かったかな？ 次からは全部売りは辞めよう。そう決意し、来た道を引き返して大路大道に向かう。

ここは宝飾店や服飾店が固まっっていて、少なく無い女性達が生地を買ったり・既製品を眺めたり・アクセサリを見比べたりと賑わいを見せている。

割りと一般の街人が多いので人手を得ようと屋台や新鮮な食材、果実を扱う店や鋳物を加工した装飾品の露天などかなり賑わっている。

「うわー、生地ってこんなに種類あるんですねー！！ 凄い綺麗……」。

わっ、こつちも素敵！ あれは高そう、だけど可愛い。」 ぴよんぴよん飛び回り楽しそうだ。

マリア、周りの女性より背が高いからかなり目立ってるけどね。

とりあえず俺は苦手になっちゃった属性・火に強い生地ベースに、革系の素材の組み合わせや魔鉱石との組み合わせで作ってみようかな？ 留守番のエミリオには異界の着物みたいな自由に着られる物を作ってみよう。

久し振りに楽しくなってきた♪

- - 宿・エミリオ部屋 - -

エバン達と別れてから、宣言通り馬鹿みたいに大量に飯を頼んでオバチャンを驚かせた後に爆睡。

ああ、今回から同じパーティーになったのでエバンと俺、ヘイルサンダ殿で1部屋とマリアちゃんの1人部屋の2部屋で取ってある。

報酬もたっぷり入った事だし、多少の贅沢をしても罰は当たらない。

いつもは良い具合に寢床が決まるのに大いに時間が掛かるが、今日は格別に良い気分で眠りに落ちる事が出来た。

けど……。

「ぬああああ！」手の平に感じる柔らかい饅頭の様な感触に吃驚。
まだ寝付いて半日程じゃねーかな？ 良い気分の睡眠から突如降
って沸いた問題で飛び起きる！

何が起きたかって？ なんだって見知らぬ女性竜人が俺の寝床に
寝て居るんだ！？

しかも真っ裸でさあ！ こんなの俺じゃ無くても悶絶もんだぜ。

大声を出して所為で起きたのだろう、女性がその長い黄金おおいんの髪の毛を携えて起き上がる……、髪が上半身を滑り寝台を流れ落ちる。

その額からは2本の金属質な角が生えているが、竜人族に近いだけ
で一目で違いに気付く、彼女には体の何処にも鱗が無く採光も縦
で無い。

けど肢体は肉感的で官能的に過ぎ俺も漲みなぎってしまいそうだった。

「おはようございます、マスター。お加減は如何ですか？」彼女が
平坦な声音で問いかける。

「マスターって何！？ それ以前にあんた誰だ！」尤もな質問をぶ
つけると。

「マスターはマスターです。」

私はIZIG-F6イスと申します。」淀み無く反される返答、全部が意味不明なんだが？

俺が手こずっている間に買出しから戻ってきたのだろうエバン達が、さっきの大声を聞いていたらしくバタバタと飛び込んで来て…
…硬直。

エバンはスゲー生温い笑顔で、マリアは無表情で自失の燐光で輝く弓矢をいつの間にか構えている。（何時出したのー！！）

本気の殺意の出てるマリアに引きつりながら弁解。

「マリアちゃん！ 待って・待って、違うから！そう言っんじゃないから自失はタンマ！」

「俺は無実だー！！！」

エミリオの絶叫が響くのだった。

彼女の正体と錬金術

収拾が付か無くなりそうだったから、とりあえず彼女にはシーツを巻いていて貰って原因と思われるエミリオに説明して貰ったけど、俺達と同じで彼女が何者でどうやって此処に入ってきたのか、まるで判らないらしい。

「酔ってる訳じゃ無いよね？」と聞くが酔う程飲んで無いと言う。

彼女に事情を聞いてみても「マスターの所有物ですから」としか言わないので困る。

いい加減、エミリオも服を着ようと亜空間バックから衣服と鎧を取り出そうとするけど、衣服しか見当たらない。

確認すると布や革製品などはそのまま有るけど、鉄や鉱物、金属は綺麗さっぱり消えているらしい。

耐性を持つアクセサリも幾らか有ったんだけどそれも無い。

肝心な事に遺跡で手に入れた金属質な卵も無い！ その事を皆に話すとエバンが突拍子も無い事を言い出した。

「君、もしかして遺跡から持ち帰った金属質なあの卵だったりする

「？」

何を馬鹿な、と思いながらも彼女が肯定するので正解らしい。

俺の現実よ、帰って来ーい！

無くなった金属は、彼女が生まれ変わる為に必要な体積に足りなくて吸収してしまったと言う。

「なんか本当に面白い事になったな……。」

エバンの顔に思わず笑みが浮かぶ。

事態に付いて行けるのは俺だけみたいなんで、代表して何が出るのか質問すると「私の機能は、マスターを守る事です」と言う。

またもハッキリし過ぎて、すつきりしない答えで遂に『アナライズ解析』を使い皆で情報を共有する事にした。

すると、遺跡でエミリオがポールアクスを守った場面が鮮明に映り、強烈な歓喜の感情が感じられた。

次いで大量に竜血を浴びて変異した事でエミリオがマスター登録されている事が解り、エミリオの持つ「守る」と言う強い信念とイメージにより自らも守りたいと言う気持ちつかが再燃。彼女の狂った「滅び」に自身が勝った様子が窺えた。

今の彼女のデータは此方。じつは

● 『鉄壁の楯』^{イシス}

元がく自我のある武具>であつたからかマスターを慕うあまり、竜人族に似た容姿の人型に変化出来る様に生まれ変わった楯。(竜人族なのは竜血を受けたからか?) あらゆる攻撃に耐性が有り魔法すら弾く事が出来る。

同じ強度の装甲を同時展開出来る能力を所有。

ただし、攻撃能力は全く無いと言う物だった。

強いなイシス……。

けどエミリオにしか使えない様だ、個人認証ロックてやつか。

人族に見えるけれど本来は楯と言う事が確認出来てエミリオに対する誤解はとけた、けど女性型で超絶美人と言う事も有って裸は拙^{ます}かろうな結論に至ったが、

「衣服は元に戻ると破けたり外れたりしますよ?」とイシスに返され返答に困る。

考えるのが苦手なマリアが「あの装甲って言うの、イシスさん自身には使えないんですか? 上から被せたり……とか?」

無理かもですかねー?

「私も出来るか解りませんがやってみますか？」と言う事で、実践。

最初はイメージだけでやってみると髪の毛の先に鎧が出来ただけ、上から被ろうとしたり・パーツの留め具を開いたりすると髪の毛に戻ってバラけてしまう。

ならば布系ならどうだとやってみたら結果、髪が絡まったただけだった。

いつそ楯状態で居ると言うのはどうだと聞くと、「もう知らない頃には戻りたく有りません」と真顔で返された。

すまん、そうだよな。

何度かやるうちに髪の毛であれば、どの位置にも防具を作り出せる様になったが被るのは上手いじゃない様だ。

「もういつそ、体に巻いてから装甲にしたらどうだ？」とエミリオが言うので、やってみると見事に装甲に変化した！！

ただ、このままじゃゴーレムの様に厳いかつ過ぎてあんまりなので、革や服に見える様に調整して何とか軽装の女性に見える格好になった。

今度は楯に戻って貰いエミリオが装備、装甲も展開して貰うが今回は問題無い、装甲の形はある下に装備している物に影響されるそうだ。

彼女の楯としての姿は騎士盾形状で縁部分は外側に反り返っている、表面は受け流しやすく継ぎ目が一切無くシンプルだ。

中央に彼女を表す茨いばと花の刻印とラインが入っているのみだった。

楯状態の彼女は自発行動が出来ないので「武装解除の命令は豆にしてやんなよ？」と忠告しておく、装甲自体は1秒で着脱出来る様なので尚更だ、じゃないとマリアがキれるのが目に見えている。

安全が確保され安心したからかエミリオが船を漕ぎ出し……、遂には倒れる様に睡眠に入ってしまった。

意外と無理をしていたんだね？ 驚いたけど流石ガーディアンってやつかな？ 良い根性だ。

イシスが枕になってしまってるけど本人が嬉しそうだから、まあ良いか。

マリアは……、真っ赤になってるね？

邪魔するのも無粋だし、暫く二人きりにしてしてやろうと退出してマリアは部屋に帰して俺とヘイルサンダで工房を拝借しに行く事にする。

流石に大量に、そこそこの難易度で錬金するには工房が必要で困

つてただけど、廃工房が郊外に有るそうだから失敬して作ってしまおうと言う魂胆なのだ。

少し遠いので屋上から出てヘイルサンダの本来の姿に戻し、飛行して行く事にして空へ。

舞い降りた建物は、壁をくり貫いて造られていて思ったより頑丈そうだ。

内部は見た所、気配は無くきつと、無人。

ここは工房としての機能しか無い様で居住には向かないかな？
広さは10畳くらいで総岩石造り、元は鍛冶工房だった様で隅に割れた水瓶と冷却プールに炉が見てとれた。

更に奥にもう1部屋、6畳程の空間が有り朽ちた鉄と木材が欠片だけ散らばっている。

倉庫として使われていたのかな？ 上も有るが休憩室しか無く今はガランとしている。

てか……、あんまり探索したく無いの！ 下に戻り必要なスペース分だけ工房の床を掃除して、久しぶりに鍊金^{のりこ}ロッドで祝詞を書き付けていく。

中央に祝詞文字で大きな陣を組み、四隅にリンクする様に防御結界と拘束防壁を焼き付けていく。

2対の円の真ん中を通る様に文字を書き込み、四角を画き対角を結ぶ文字の線を繋げる。

最後に全ての祝詞に神力を流し、真ん中に立って『起動！』と錬金ロッドを振り上げる。

立ち昇っていた橙のオーラが真つ青に染まり部屋を満たす。

どうやら上手く陣が掘り込めた様で、祝詞文字が淡い蒼光で揺らいでいる。

後は適切な素材と集中力で脳内イメージにふんわりと現実を沿わせていけば完成である。

久しぶりのまともな錬金術に没頭してしまい、時間が矢の様に過ぎる。

廃墟には絶えず祝詞が流れ、高く低くに韻を踏んで独奏がたゆたう。

喉にも神力を込めながら歌い上げ、最後には陣が役目を終え焼き切れた。

簡易の陣だったから良く持った方かな。

しまつてある完成品を思い出して満足な気分になる。 いやー今

回は良い仕事出来た！

作成したのは4点、まずはエミリオ用に落ち着いた黒地の着物・頑丈さの祝詞補強、材質は魔獣合革で同じ素材で腹回りが革張りの幅広帯（帯の縁は金属補強）のセット、鎧はイシスが居るから良いかと思う。

俺用には魔系で織り込まれた布と以前貰った^{フラッドストーン}血石を錬金合成し、硬合皮のケーブを合成した赤の術師服。

マリアには女性用ミスリルアーマーに祝詞文字を模様の様に配置して回避力を強化、腹部に硬皮を使用して^{かが}屈み易くした軽鎧、（肩当は無し）尻後ろ側は燕尾服の様に金属が覆っている感じ。

もう一つはスカートが穿きたいと言うマリアの要望で、上半身は鎧があるのでシンプルにまとめた長袖ワンピースにして邪魔にならない長さのスカートにした。

素材はソフトレザーでプリーツが大きめに入っている。色味は凄く薄い青の混じった白ベースに黒を要所に散りばめたんだけど、どうだろう？。

皆、気に入ってくれるかな？

幕間 パロットの惨劇（前書き）

今回はかなり残酷な表現、猥雑な言い回しが有ります。

本編、大筋では無いので苦手な方はスルーして下さい。

幕間 パロットの惨劇

狭い皆内をゆっくり歩き、螺旋階段を登る。

岩が剥き出しの壁には作り付けの窓があり、訓練に見立てた私闘に精を出す馬鹿な手下ばかりが見える。

最早、苛立ちも感じない位に慣れてしまった手下達を意識の外にやり、私室や幹部の部屋の有る最上階を目指す。

二階は会議室や有能な駒の部屋になっているので今は静まりかえっている。

このまま寝てしまいたい気分だけど、サイラーの召集だからそうもいかないかな。

気を取り直して魔術師の部屋をノックする。

サイラーは既に着いていたようね。

「少し遅いぞ、早速始める！」

何だか最近は無縁が出て来たと、自然に彼に注目。

「いきなり本題に入るが、組織がでかくなって来たんで食料が不足

気味だ、武器も女も少ないんで奴等も我慢が効かんらしい。

そこで近くのこの村・パロットに押し込み、そっくりそのまま全部頂いちまおうってー腹よ。」

片方の口角だけ上げる癖で笑い地図を指差して、かなりのどや顔で見回す。

確かに備蓄が無いのも不安ね。

私だけなら困らないけど、暴走されるのは面倒臭い。

「ゲスいけど、私は良いと思うわ。確かあそこはギルドも無かったわよね？」

それに魔術師、ザラが頷き。

「強者の気配はしない。

つまらないが街道から遠いのが良いねー。

クク……ック……助けなど呼べない！ 兵隊の補充も出来る♪」

「なら、決定だな。」

「細かい話はザラの方から雑魚共に通達しといてくれ。

サーナイアには後詰めを頼む。

ああ、死霊も呼んで置け

で、万が一ヤバくなったらばら蒔けば良い。

護衛にはお前のお気に入りの女戦士をつけてやるからよ。」

役回りに僅かに不快感は有ったけど私は鬱々と、でも……しつかりと頷いた。

- - 決行前日 - -

砦広場のテントは除けられ、既に荷役の車に積み込んである。

取って変わりに沢山の愚か者の群れが騒がしく詰め込まれている。

皆、思い思いの得物を掲げ親分・サイラーの言葉を待つ。

サイラーが壇上に立つと爆発的に歓声が沸き上がる、少し落ち着いたのを見計らい、「力無き正義に罰を！」剣を振り上げる。

「「「力無き正義に罰を！」「」「」すると手下達が唱和し、更に広場の熱気が沸く。

私は形だけ倣い賛同はしない。

この気質だけは何か嫌だ。

うん、生理的に受け付けないのだと思う。

けれどサイラーの側を離れるのは不安。

あまり深く考えると、頭が潰れそうに痛くなるので考えてはいけない。

私が思い悩んでる間に集会は済んだらしく護衛の女戦士に腕を引かれた、彼女は奴隷商を襲った時に偶々生き残って居た子でカナリアと呼んで欲しいそうだ、確か今年で16になるとか言っていた気がする。

初めて見た時は散々犯され、両手足を縛られて酷い有り様だったので使い物にならないかと思っていたけど、サイラーに預けたら人並みになって戻って来た。

ザラの魔法かしらね？

まあ、治ったなら良いわ。

なんでも有名な道場の娘らしく戦士として十分な実力で今では重宝してる、喋れる様になったのも良い。

血気盛んな男達を尻目に私達は後部の車に乗り込む。

私の車はサイラーの呼び寄せた巨大蜘蛛の背に載せ牽^ひかせる、小さい家みたいな蜘蛛車で単体の戦闘力も高い、無理をさせれば壁だって歩ける、数が少ないので幹部にしか支給されていないけど慣れるとキモ可愛い。

足も速いし、安定感も有るのに手下は普通に戦山羊を愛用している、何故かしら？

以前、卵を産ませて譲ったら騒動が起こったので今は自重しているけど、またぶち込んでみようかしら？

面白かったのよね……。

思わず笑みが浮かぶ。

そんな思考に耽^{ふけ}りながら蜘蛛に揺られる事2時間半、隣でカナリアが顔を赤くしているのに気付かずに心地良い振動に身を任せていたら、村の近くの野営予定地に到着していた。

どうやら地図通り実際に野営しやすい広さがある空間で、繁茂する植物が私達を隠してくれる様だ。

私の担当している手勢は護衛の女戦士と調教済みの男達5名、残りには必要に応じて死霊を召喚する手筈だ。

村を囲みサイラー隊・ザラ隊に分かれ同じく潜み野営に入っている事になっている。

作戦開始は深夜深く……、ザラの用意した合図用の石が割れたら突撃らしい。

雑事は手下達に全部任せてカナリアだけ伴い少し荒れた土地に移動する、静かに瞑想し輪廻白神の自動発動スキル^{バッシブ}。

ソウル
『魂の揺り籠』
プロテクト

同じく輪廻黒神の自動発動スキル^{バッシブ}。

クレープヴォリユフデ
『貪り合う愉悦』
アンデットマスター
『死霊籠絡術』が発動しているのを確認。

このスキル群により私の周囲には常に非業の靈魂^{はへ}が待る、けど白神の加護により私は襲われる事は無い。

おもむろに両腕を差し上げ左右に広げつつ祝詞のりとを唱え、祝詞に合
わせ踊り、霊を魅了する。

『ゆらゆらとふるべ 地の底 物陰 異界の柱 さぞ暗かるう さ
ぞ寒かるう くさくさと只憎かるう 共に逝き益せ 黒魔女ワイルドデスマムの威圧』

繰り替えされる祝詞が途切れる頃には、こちらの浸食に痙攣して
いた靈魂は完全に支配下に置かれ、私に呑み込まれる。

今回は3体、こんな村ではこんなものかしらね。

これでまた1つ人外に近付いた。

そう……、あの小僧に憎悪を叩き付けるには人の身では駄目なの
だ……。

ザラからエバンは神に成ったと聞いた時は怒りのあまりに精神暴
走（輪廻信徒特有の限界衝動で周囲に処理しきれないストレスを撒
き散らす）を起こしたのを昨日の事のように思い出す。

あれから私に出来る変異、魂を取り込み存在のレベルを上げた。

その所為で既に汗もかかず・如何なる汚れも私を穢けがせない、甘い
瘴気を纏う死の魔女、それが今の私の全て。

野営地に帰りつき、暫くして合図の石が割れた。

見張りと動物の世話に1人残し、死霊を1体置いていく。

2体には先行させ寝込みを襲わせ奇襲をさせるのだ、自重する様に言われていた気がするけど関係無いわ。

その後を追いかける形で二匹の戦山羊に2人乗りした男達と、私とカナリアの乗る蜘蛛車が続く。

先に着いた死霊が命令通りに眠る村人、特に男からじわじわと息の根を停めていく。

気配に気付いた子供の泣き声や住人達の悲鳴が響きだした頃、頃合いとサイラー隊・ザラ隊も加わり剣撃の音と範囲魔法による騒音で村が満ちる。

今回の目的は略奪なので火魔法は控え目に放つてある様で以前より威力が無い、ザラは相当ストレスを感じて手を抜いてるんでしょうけど我慢してもらおうわ。

先程の自動発動スキルを発動している私の周りには、新たに現れた死霊達が集まって来ている。

先ほど使った魔法でまた憐れな者達の魂を拘束して浸食していく。定められたステップを踏み腕を振り乱し、唄うように祝詞を垂れ

流す。

その度に新たな死霊兵が飛び回り、かつての同胞に冷たい手で^{すが}縊り、凍える抱擁を求め呪いが連鎖する。

可哀想な事に、宿には冒険者パーティーが宿泊していたらしいのだけど最早、村には死霊と野盗しか居ないのに救助の為に疾走していた。

エルフが召喚獣を呼び、戦士が魔力を付与され帯びた武器で道を切り開き、輪廻信徒が浄化の奇跡を起こし私の支配を無効にする。

中々にバランスが良いパーティーの様だけど相手が悪いわ。

直にサイラー達に殺されるだろうけれど、気に食わないので集中的に高位に練り合わせた悪霊を差し向けてみる。

- - 数時間後 - -

あらかた制圧された村をサイラーに合流する為に歩いていると、はぐれたのか・隠れていたのか、涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔の少女が人形を引きずりながらモタモタとこちらに向かってくるのが見

えた。

私を見つけて安心したのか「お・姉ちゃん、助けてえー……」
「！」と、走ってきた。

子供特有の走り泣きの鬱陶しい声……。

そして、ここには今私しか居ない。（何故かって？ 魂魄制御が利かないので先行させたのだ。今の私は見境が無いの）

「お母さんが冷たいのー、白いのが一杯居て怖いのー！」どうやら少女には霊達が見えているみたい、だからここまで来れたのね？

でも、詰みだわ。

「そう、大変だったね？　じゃあ、お姉ちゃんと一緒に逝きましょう？」

ゾブリっ！

形を得る程に高密度の靈魂達が大口を開けて少女を喰い散らかす。
いたる所を噛み切られて虫食いの少女は、即死出来ずに痛い・痛い
と泣きながら魂まで私に喰われていく。

「嘘は言っていないでしょう?」

クスクス笑いながら私はゆっくり村道を歩む。

ハウルベル帰還

宿に戻ったのが遅くなりそうだったから屋台でおじさん達に混ざり、串焼きや肉の揚げ物、芋の煮物などをがつついて帰る。

かなり美味かったので仲間の分もと包んで貰い亜空間バックへ放り爆睡。

翌朝、振る舞いがてら作った装備を渡そうと集まってもらったら「相当、ニンニク臭いんですけど」って女性陣に言われてしまった。

屋台飯ってそんなもんだよね？

臭い消しの香草も有るからと食べさせてみるとかなり好きな味だったらしく喜んでもりもり食っていた。

酒飲みにはたまらないよね、実際。

綺麗に皆で食い終わってから残骸を片し、鍊金した装備を並べていく。

まずエミリオに着物を渡し、「異界の戦士が着る戦闘や普段の生活兼用の装束を真似したんだ」と手渡し、着替えて貰った。

結構長めに作ったので下はスカートみたいだが脱げる心配が無く、腹帯もしっかりきたようだ。

「おお、人間族用の衣服より動きやすいな！」

龍化しても破れないのも確認してもらい問題無い事を確認。

「尻尾も出せて良いな、穴空けなくて良いのは嬉しいぞ」と大変喜んでくれた。

けど、斧を作るのは時間が足らなかったので今回は市販の物を買
い直してー、共有財産から良いんでお願いする。

続いてマリア。鎧とワンピースを渡す、今回のワンピースはシン
プルさと防御力・着やすさを重視した仕様で衣服としてより防具と
して気に入ってくれた様で早速着てくれている。

ミスリルの鎧は初めてらしい。

「うわ！、柔らかいし軽い。でも手触りは金属なの、変で不思議
！！」

まだ慣れないそうだけど、防御力は上位だよ、金属を糸の様に
編み込んだ鎧だからね。けど、これは間違い無く一品物なので大
事にしてもらいたい。

俺も着慣れた服は仕舞って気分一新！ 今回の術服は丈が長い
で腕が見えなくても変じゃないので無用な詮索が減る……、はず！

ヘッドマスクを外したのでなんか気恥ずかしいけど慣れたよね？

「エバンは気付いて無いけど長旅で髪も伸びて女性にしか見えないの、ってマリアは思います」

昼からはハウルベルに向かうべく宿を引き払い、買い物目的でぞろぞろ移動。

途中の武器屋でエミリオの斧を購入。

今回もバトルアクスにするそうだ。ポール系までいくと流石に両手じゃないと扱えないので、イシスを使うなら片手で持てる必要があるんだとか。

ギルドにも寄り、輸送系の依頼と討伐指定魔物情報をチェック。

狩りと実益を兼ねた旅にする予定なんだと皆と相談、蓄えも十分に有るとは言え何があるか分からないので慎重だ。

「奇襲以外はマリアの矢とヘイルサンダの氷技、俺の金化鞭で攻めて、念の為エミリオが前に出てカウンター待機と防御なんてどうかな？」

接敵と同時に殲滅を繰り返す感じで、これだと素材剥ぎ取り部品の傷みもコントロールし易い」と提案して、概ねその方向で行こうと決まった。

実際歩いてみると、前情報通り本当に暫くは補給地が無く減っていく備蓄に怖い思いだったけど大きな怪我もトラブルも無く小さな村に着けた。

ここ迄で、ゆうに3週間はかかっている。ケチら無いで馬車で

もレンタルすれば良かったかも……、と後悔先に立たず。

次は絶対、ヤギ車を買う事を誓いつつ村に立ち寄る。

遠かったがここはもうハウルベル国内、俺の住んでいた王都にも1週間とかからない筈だ。

村に一軒しか無い宿に部屋を取り一晩ゆっくり休養。

最低限の補充と武器の買い換えをして岩やぎを2頭買って分乗、俺はマリアの前に座り手綱は任せて道案内に集中している。

向こうはイシスとラブラブしてるみたいだけど極力知らないフリをしつつ残りの距離を走破した。

岩やぎの振動に揺られながら遠くからでも判る、そびえる王城と街並み、城壁外に溢れ広がる外町を目にした瞬間……目頭が熱くなつた。

ひよんな事から住み慣れた国から離れ、なんの覚悟も無いまま長いことさ迷い片腕すら失った。

あまつさえ人ですら無くなった俺を師匠はなんて思うだろうか？悪い事ばかりでは無かったけれど、本当はしんどかった。

やっと帰って来た祖国はだいぶ感傷を呼び起こしてくれたけどへ

イルサンダが無言で頬を擦りつけ慰めてくれた、マリア達に涙がバレ無い様に拭い、あれが祖国ハウスベルだと笑顔で宣言した。

大きな城壁門を通過し検問も難なく通過、中央大路には大勢の人が行き交い商家が軒を連ねる。

「今日はお祭りか何かなんですか!？」とマリアが本気で驚いていたので、記憶を失っている事を思い出しこれが日常的なんだよと教えると更に驚いていた。

イシスは建造物の方に気が向いてるようで、カラフルなタイル貼りの通路や中央大路の遥か先には本城が存在感を醸し出しているのを見。本城から円心状に通路が伸びて大路から伸びる横道と合流していると言う説明に「凄く大きいんですね!？」と驚いていた。

直ぐに師匠に会うのは踏ん切りがつかずに夜になると誤魔化して、まずはそこその宿に部屋をとり岩ヤギ達を預けた。

城塞都市であるためどうしても場所が狭く、騎獣も連れていきたければ委託施設か城壁の外に預けることになるからだ。

外町の方が安いけど、治安が良くない。

必然的にランクの高い宿屋の近くに委託施設が建てられる事になった為、高めの宿に泊まってもある意味トントンと言えるのだ。

皆は長旅の疲れが出たのか、風呂（イストフラロウスから広まっ

たみたい)に入り寛いでしまつたら起きていられなかつたみたいだ。

俺も疲れは感じているのだけど眠気にはいたらない、多分睡眠もどうしても必要では無くなつてきているみたいだ。

暇をもて余した俺はフラフラと街を歩く「我也連れていつて欲しい」とヘイルサンダが言うので今は一緒だ。

軽い散歩の積りだつたけど、自然と足は歩み慣れた道をたどり気付けば師匠の工房付近まで歩いて来ていた、間違い無く起きてないだろうと思ひ踵をかえした時。

「エバン君でしょう？　そうですね？　ジャストタイミングでドンピシャでした。」

なんて、のたまうのは我が師しか居ない。

振り向いてなんか返してやろうと思つたらきつく抱き締められた。

思わず息が詰まる。

「はっ？……くっつ！」すぐ片腕が無い事に師匠が気付いてしまったみたいで驚きの声が漏れる。

寸でで言いたい事を飲み込んで「お帰りなさい、良く……生きて戻りましたね？」と言つてくれた。

お陰ですんなりと「ただいま」と言うことが出来た。

会ってしまえば話したいことは沢山ある、立ち話もなんだからと二人、工房に向かいまずは試験の課題からとなった。

「既に懐かしさすら感じてしまえますね？」と言うと苦笑い。

「まあ、そう言わず付き合いなさい」て事らしいので『撲殺金化鞭』をベルトから外し机に置く。

厳密にはあの遺跡で手に入れた素材では無いけれど、この方が面白だろう。

「これを貴方が作ったのですか!？」

いぶかしむ師匠は撫でたり振るってみたり、材質を確かめたりと忙しい。これは何か混ざり物の金属・・・なんですか？ 余りにも軽いのにひどく固く粘り気がある。

何か細工も有りますね？ これはアーティファクトだと私は分析します。

試験品で師をからかう気なら覚悟を決めなさい!! 激昂する師匠にまずった事をさとり慌てて弁解する。

「そんなつもりでは有りません、実は聞いて貰いたい話があるんです。判断はその後でお願いします。」

本当は隠し通したかったけれど、こうなつては仕方無い。

俺は遺跡で死にかけた事『知識の柔石』を得た顛末と効果、それゆえ神族化している現状を話せる範囲で正直に吐露した。

「そんな事が……。俄かには信じられないですが、エバン君の言う事です。信じて見ましょう。」

けれど災難でしたね。貴方の書簡にあつた怒りはこれですか」

逡巡の後、解りました合格です。

「と言うか皆伝と致します。」

もう、私が教えられる事は無さそうですし工房も譲りましょう。

しかし、そのレベルの錬金術の作成物は極力自分に以外作らない方が良いですよ？ 争いの種にしかありませんから。

最後に本来、錬金術はどうしても日数がかかります。

精度もバラけますし、こんな物は造れません。

いらぬ誤解も生まれます。

今日はもう遅い。明日、お仲間も交えてまた話しましょう。

勿論、紹介して頂けますよね？」

マリアやサーナイアの件もある。久しぶりに離れの私室に戻り、懐かしい自分の寝台で寝る事になった。

人物人相紹介 7 / 6

あまり本文では容姿の紹介や色の想像出来るものを入れない様に書いているので、想像がし難いかと思います。こんな物を書いてみました。

現在は暫定、主人公サイドしか書いてないですが希望があれば他も追加するので、お気軽にどうぞ！

絵とか付けてくれると本当に感動しますので、描いちゃると言う方ガンガン想像で下さい。

掲載させて頂きますよ。

名前	エバンニード
種族	地底人↓神族化中
性別	男性
年齢	18
職業	錬金術師／軽戦士
容姿	隻腕・低身長・色素欠乏の真っ白な肌と紅い瞳、髪は白に近い赤、腰まで位に伸びた。華奢。

装備

鎧 血石のローブ

体 肌の露出しない丈夫な服

腕 右手首に「亜空間バック」の腕輪

武器 「撲殺金化鞭」 凄い長さ、一振りで二度のダメージを与える金属の鞭・巻き取り機能付き

名前 ヘイルサンダ

種族 イタチの神獣

性別 オス

容姿 体長3km以上の鼬・頭上に茨の様な氷のリング状の冠、常に帯電してゆっくり回転してる・尾の先に雷を帯電・毛皮は白い。
装備 今は無い。

名前 マリア（元ウアラエリクシル）

種族 人間

性別 女性

年齢 21

職業 光神神官Lv4 / 弓士

容姿 高身長・黒髪・背中あたりの長さのソバージュをポニーテールにしている、毛先は不揃い。肌は浅黒く微乳。

装備

鎧 ミスリルの鎧（肩当無しバージョン）

服 合皮レザーワンピース

腕 左にの腕に「亜空間バック」の腕輪

武器 シダ材の弓・金属補強ありで矢筒は腰

背中 背囊

名前 サーナエアエリクシル

種族 人間

性別 女性

年齢 21

職業 輪廻神官 生命Lv2 / 死Lv4

容姿 高身長マリアよりは低い・銀系の様な白髪、瞳は大きく愛らしい・巨乳。

キャライメージは土屋アンナさん。

装備

体 ファー付きブラックライダースーツ

腕 左にの腕に「亜空間バック」の腕輪

足 ハイヒールブーツ

武器 『独裁恐怖の杖《ワンド オブ ファー》』 殴りつけると強力な衝撃と痛みを与える拷問吏の杖、ヘッドはおどろおどろしい髑髏石。

名前 エミリオ「ラグランシェ

種族 竜人

性別 男性

年齢 23

職業 守護者/重士

容姿 高身長（180以上）、額と胸などが赤い鱗で覆われ採光が立ってたアーモンド型、筋骨隆々、髪は短い。

装備

体 武士のエセ着物（戦闘時はイシスの装甲）

腕 白銀の小手

足 白銀の足具

尻尾 「亜空間バック」の腕輪

左手 イシスの楯

右手 バトルアクス

名前 トスバル「ゼラブル

種族 地底人

性別 男性

年齢 25

職業 商人／初級魔術師

容姿 身長は平均・腹のデカイ肥満体・短髪・肌は白く瞳は桜色。
装備

頭 サンバイザー？

鎧 ソフトレザーアーマー

背中 背囊と水筒

名前 シャンティイオク

種族 地底人

性別 女性

年齢 22

職業 商人見習い／猟師

容姿 低身長・長髪・白い肌に紅い瞳・童顔・割と巨乳。
装備

頭 サングラス使用のゴーグル

鎧 ハーフサイズのマント（ポンチョみたいなもの）
体 重ね着の服 露出無し。

武器 ファストボウ 小型で連射の利く小弓、矢筒は右の腰。

名前 マイク

種族 魔族・コボルト系

性別 男性

年齢 11

職業 料理人

容姿 直立した犬人間、身長は小柄な方・ハスキー犬みたいな顔、
瞳は青・手の甲には毛があるが平には無い肉球完備。体毛は長い。

装備

鎧 落ち着いた色の薄いロングコート。
体 エプロン

神聖魔法を学ぼう、ただし実践に限る。

懐かしい離れで休んだ翌日。

約束通り仲間達と師匠の初対面は、イシスの額角が天井に刺さって屋根が壊れかけたのを除けば波乱も無く、穏やかに過ぎた。

前々からマリア達もエバンの作る錬金装備の事について、何となく（錬金術のイロハを知ってはいないけど）おかしいかもしれないと思っただけらしい。

「気付いていたなら教えて欲しかった」と言ったら便利だったから言わなかったと口を揃えて言われてしまった……。

「そんな連携なんていらん！」

それに関連して、俺が神族である事も師匠に話した範囲で言わなければ辻褄が合わなくなってしまうので、意を決して打ち明けた。

マリアは思った程に動揺も無く受け入れてくれたけど、エミリオは酷くショックを受けてしまい、暫く畏まった雰囲気は抜けずに悲しかったが、仕方が無いと思う。

それと書簡に書いたサイラー、サーナイアについての件は共に行方が分からない事が分かったただけだった。

後は工房の権利委託の手続きを終え夕食を共にしたのだけど、思
い出話にヘイルサンダが元俺の左腕だったと言う話をしたらかなり
興味があつたらしく、さんざん弄くり回されてヘイルサンダは辟易
している様で笑えた。

その後は自由行動にして、俺はマリアと精神障害に詳しい人探し
に明け暮れて散々断られて一日が終わってしまった。

さて、マリアの記憶の回復手段はどうしようかな？ 当てが尽き
てしまった……。

更に翌日、ヘイルサンダは居るが1人行動で以前、イストフラロ
ウスの外れに設置した水族専用移送陣を繋げるため外出し、現在は
その帰りである。 接続に少し手間取ったけど次は上手く出来そう
な手応えがあつた。

思えば、反則気味だけど試練も終了して、国にも本職の錬金術師
として申告できたのが嬉しい。

そんな風に浮かれながらギルドへの道を歩いていたら、突然知ら
ないおじさんが俺の肩を掴み「君が我が神ですね！？」と言っ
てきた。

驚いてドキンとしてしまったのを誤魔化そうとして、更に土坪に
はまり下手な芝居に終わってしまったけど。 非常にまずいかもし
れない。

しかも異常な事に、街中でこんなに不自然に付きまとわれてるのに誰も不審がらない……、何でだろう？

そこそこ人の居る大路なのに变だ。

てか、この人何者？

数瞬の混乱から無理矢理立ち直り、ヘイルサンダと共に拒絶しようと武器に手を伸ばし、帯電を始めたタイミングでおじさんは機敏に間を空け。

「一般人に刃を向けるなんて！！」と大きめの声で、さも驚いたと言つように演技してきた。

そのおじさんは、ざっくりした服を鎧上から被り詳細が解らないが、きちんと武装している様に見えたとし武器も携帯している様に見える。

しかし、今度は先程あんなに無関心だった周りの人達が不穏な気配でざわつき出す。

なんだこれ？

みんなグルなのか？

訳がわからな過ぎて、とても怖い。

数十人に囲まれるかもしれない恐怖と、なんとも言えない嫌な予感が止まらないので、足に神力を込めバックステップからのターンを決め路地裏へと逃れ全速力で駆け跳び、塀を飛び越え、壁を蹴り上がり屋上へと逃れた。

さながら盗賊職の様な身のこなしだった筈だ……。

「流石に逃げ切れただろう」と荒い息を吐く。

しかし、その背後からおじさんの声がする。

「思い込みは危険ですよ、我が神？」……ゾクツとした。

急いで神力を纏い直し屋根を駆けながら街の外に向かって逃げ続ける。

本当は人混みに紛れたいけれど、先程の人達の顔なんて憶えていない！ 溢れ出る神力が上手く制御出来ずに屋根を踏み抜き、鞭で掴んだ尖塔の先をくびり折ったりと思う様に進めない。

背後からは一定のリズムの足音が聞こえる。

完全に恐慌をきたした俺はその違和感に気付く事が出来なかった。

更に屋根を跳び碎き、街を破壊しながら城壁を越え、下街に紛れ

疾風を引き連れて開けた場所に出た。

振り返った先には当然の様子におじさんが居た。

取り巻きは居ない！！ そんな折り、おじさんが

「何を焦っているんですか？

私に取り巻きなんて居ませんよ？

初めからね？」と不敵に笑った。

俺達はほぼ同時に常識の限界に達し、ヘイルサンダは本性を現し帯電する氷の冠に翼を背負う巨獣に。

俺は鞭を構え直し戦闘態勢をとる。

「おお、怖い怖い」と言うおじさんの軽口が合図になりヘイルが鉤爪を振り降ろす。

何時の間に抜いたのかおじさんは双剣を構え、難なく受け流してしまう。

死角になる様に動き鞭を振りぬくがこれも紙一重で回避。

何度かの攻撃の結果は全て外れ……。

どうも、スキルが何かで認識阻害をしているらしく、ヘイルの氷雷撃も俺の鞭も紙一重を埋められない。焦りが募っていく、ヘイルもそうなのか、発動の速い雷撃をばら撒きイラついた様に噛みつきを繰り返している。

鞭を捕らえる方向で操り、同時に＜短縮詠唱＞を併用して鍊金魔法『貫通石槍』ベルガベトロメオを発動。

配置はおじさん後方！ 地面を変質させ石の槍を無数に突き出させる。

これには流石に焦ったのか、おじさんも負けじと詠唱。

『願い給う ジェミニハイドロゲン 双水爆槍』

双剣の柄尻の石が輝き、斬線を起点に極太の水撃が俺の放った石槍を蹴散らし砕く。

あれは神聖水神魔法じゃないか！？

「ご名答、力だけが全てじゃありませんよ？」まだ余裕そうにおじさんが糸目を向ける。

ならばと＜短縮詠唱＞押し包む 拷問の母性 イロンメイディア 鉄の処女！』

蒼い遠隔陣がおじさんが立っている地面に刻まれ、陥没。

落ちたであろう犠牲者を閉じ込める様に穴が埋まり、内部からザスッと鈍い音が響く。

「今度こそやったか!?」動きを止めた俺に詠唱が降りかかる。

「油断大敵ですよ?」空中で眼を見開き。

『灼熱の貴精に忠誠を 双炎爆槍』
ジエミミザ・ボンバランス

もう一振りの双剣の石が輝き、二条の野太い炎槍が迫る……これは、避けられない!

「父上!!」着弾と轟音。

けれど衝撃はやってこない。

間一髪で割り込んだヘイルサンダが弱点に関わらず庇ってくれたらしい。

綺麗な白い毛皮は焼け焦げ、巨体が地に付く。

今度は神聖火神魔法……なんだ?このおっさん?

理不尽な怒りが沸く。

ゆらり……と上体を上げた俺の顔は怒りの余り表情を失くしている。

無動作で鞭を振りぬいた為、おじさんの紙一重を埋められたのか俺の鞭が絡みつく。

更に無詠唱で初めての神聖水神魔法『水爆槍』を>>神力<<で発動。

視界を埋め尽くす程に水の槍が鋭さを秘めて殺到。

その結果……おじさんは粉々に砕け散った。

無理矢理でも授業料は高くつくのかよ！？

初めて神力を沢山使ったからか全身に疲労感が重くのし掛かっている。

ヘイルサンダも平気そうだけど苦々しい顔をしている。

理性が戻ってきて最初に気付いたのはこの場の惨状。

二人して本気で暴れたから山は崩れ地面には大穴や掻き傷、一部は水没していたり爆散したりと地形破壊全開、あまり宜しく無い状態だね。

一番の問題……、あの怖いおじさんは下半身が直立したまま残り、バラバラになって地面に散乱していた。

過ぎてみるとやり過ぎたかなって思う気持ちも出てきたのに、あろう事か人体の破片がバシヤンつと水になり『水爆槍』の水溜まり水も巻き込んで再生を始めた！！ おじさんはみる間に元通りになって初めて見たときより艶々してすら居る、がマジで怖い！

離れてブルつてると、「先程は失礼しました我が神。 訳有って挨拶が出来なくて申し訳無い、私は水の精霊の男性体でウンディオラのヒノンと言います。 以後、よしなに。」

「……。」

「……はあ！？」「思わず二人の息が揃う。

えー、水精霊ってあのー？ 半透明で女性的で美しく優しい精霊デスヨネー。

しかし、再生って見てる方はかなり不気味なんだなー、気を付けよう。

「女性体しか居ない訳無いでしょう？ 気持ち悪いとかも嫌ですかね？」にこやかな糸目が怖いからっ！

てか……おじさん、もといヒノンの拾い上げた双剣の赤い方からも人型が飛び出す。

こちらはかなり小さく、炎の様な羽のある小人。

察するに火の精霊かな？ 具現化するなり、「神様怖い、神様怖い、あんなに硬い水どっから出したのよー。カノンのガードが、ビクって上がった時は身代わりかと思った。ほんと、消滅するかと思っただっちゅーの！ ヒノンなんかそのまま死ね！」

アハ！濃ゆい子だな、この子。

「我は苦手かも知れぬ」

俺達の生温い視線にも気付く余裕が無い様だ。

暫く罵つてるのを見ていたら唐突にこちらの温度差に気付いたらしく、凄いい早口で「私は火の下位精霊のベイシェットって言います。優しくして下さい。ほんとお願ひします。すみません!!」最後の方は絶叫と大差無い感じになってしまっていた。

それを「まあまあ」と言いながら双剣の青い方から同じ様な姿の青いのが出て慰める。

「私は水の下位精霊でアステルパスと言います、宜しく願ひします。」今度は落ち着いた感じでの紹介だったけど、あまり興奮を隠せていない。

大人しいのはキャラなんだろうか？

「と、こんな感じの3体になってます。今回の目的は大水神様の意識に貴方がひっきり、水神族なのに神聖水神魔法が使えない事にお気付きになった水神様の命で貴方に帰属するようにと、もう一つは神聖魔法を（力ずくでも）早急に教えて差し上げる、との事でした。」

部下の神力も加算されるし、メンツと言う事でもあるらしいですよ？　と言うタレコミになんて迷惑な……、お陰で確実に目立ってしまったと、うな垂れる。

後、壊したものは直しておいて、信者減るから……だそうです。

うわー、殺意の波動に目覚めそうですが、どうしましょう？

シ
まあ、これ以上暴れても仕方無いので渋々ながら錬金術『岩石操ロックラ

作』で手早くこの場を修復。

壊した街並みは後で『アボカタスト復元』かな。

「「」では、今日から宜しく願いします。」「」

三人共声を合わせてきたのでしばし黙考、次いで絶叫。

なんで一緒に来るのさ!?

俺の疑問に「帰属したからですよ?」って当たり前のようにして着いて来る。

帰属ってそういうもんなの?

ちなみに、話に入れなかったヘイルは密かにむくれている。

拗ねるなよ息子……まあ、少し気分が浮上したけど。

「あつ、私、この姿の時は軽戦士ですから」カノンが唐突に言う。

「私も後天的な変異なので人族籍も持ってますし」って事らしい。
して、精霊2体は普段は剣に宿って表には出ないそうだ。

なんて知っておくべき事を聞きながら……先程、全力で逃げた道

を今度は復元しながら戻り、その足で元々の行き先である冒険者ギルドへ。

正直、帰って現実逃避したいが無駄な抵抗なんで却下。

初遭遇時もそうだけど、どうしてかヒノンに口では勝てないのだ。

さらっと「話術スキル有りますから」って心読まれたかと思ったよ、この野郎？

- 冒険者ギルド・ハウルベル本所 -

素材を売り、ギルドで新たにパーティー人員追加登録して帰ろうとしたら「お待ち下さい、奥でギルドマスターがお待ちです」って、受付の声。

今日はヒューイは居ないらしい。

逆らっても良い事が無さそうだったからお連れされましたとも、ええ。

出された茶をすすりながら、相変わらずギルドマスターの部屋で殺風景だなんて思ってた。

案の定、挨拶の後に「あなた方の素性の説明をお願いしたい。破損を直したからって全てチャラにはなりませんよ？」って釘刺された。

ハウルベルのギルドマスターは坊主サングラスの地底人族男性らしい。

名はゼクスと言うそう。

どう誤魔化そうかと思ってたら、影から人が滲み出てきてマスターに耳打ちして消えてしまったけど見事な気配消しだね？

今、全然分からなかった。

ゼクスから仲介して聞くと「城に出向くように要請が来てる、今すぐに向かえ」とのお達しらしい。

うん、どんどん話が大きくなるんですけど、どうしたら良いと思う？

無視は先程と同様に良くない結果しか予想出来無いので、仕方無く影の人について王城へと向かう。

間近で見る城はでかく重厚な圧迫感を持つて俺達を迎えた。

城壁には広い跳ね橋が架けられ、深くてそれなりに広い堀がぐるりとしている。

住んでる頃にはここに来るなんて事は一生無いと思い込んでたのに数奇なもんだね？

お腹一杯な気分で影の人に連れられ、俺達は謁見の間に歩を進めた。

後始末と王家の事情

言われるがまま連れられて踏み入れた謁見室は全体的に白く、吹き流し部分が2つの三角に割れた国旗が壁に等間隔で掛けられ毛足の長い真つ赤なフカフカ絨毯が真つ直ぐ道となって入り口の扉に向かって敷かれている。

窓は無く魔導の灯りが多数浮かび、煌々と照る光が闇を恐れるかのように部屋を清める。王の両隣には凄腕そうな神官と騎士が控え五段ほど階段を降ると死角を埋め合うように兵が配置されていた。

そうなんだ、配置されていたのに何・故・か！俺達は王家の食堂で王様達と食卓を囲んでいた……。

どうしてこうなった？

現実逃避に国旗を眺めて見る。

全体背景は黒、中心に属性色をあしらった六芒星が描かれ星と月の意匠の杖が交差した図案になっている。魔術的な意味があるのかもしれないけど畑違いでさっぱり解らない。

長方形の、一目で高級と判る檜材の食卓の上座に魔導王その人が座し、両サイドには見たため同年代で線の細そうな男性とピシッとした姿勢の女性が席についている。

俺の隣にはヒノンが底の読めない表情で座っていて、目の前には豪勢だけでなく工夫の凝らされた料理が並ぶ。

見た目が馬鹿に豪奢にならないよう配慮までされているのか下品には映らなかった。

「お初にお目にかかる、私はこの国を預かる魔導王リルディノス・ハウルベルだ。向かって右が第2王子のシャスティア、左が王女のアニルヒネと言う」意外にも丁寧な紹介を受け失礼にならない挨拶を交わした……、主にヒノンが。

情けない事に礼儀作法に疎い為、丸投げである。

俺は連れられてる間に教えられた作法に反しない程度に畏まるので精一杯だった。

ヒノン曰く既に神族スジであるのは知られている筈だから誤魔化さないでも良いと言う事なので、立場は明かしてしまう。

案の定だった様で微かに驚いていたが直ぐに動揺は収まる。

うあー、ホントに前情報ありっぽい。

気を張り直して今回の事情を話し、害意が無かった事を主張、ヒノンも上位神の意向ですと発言してくれたので丸く収まった。

しかし、今度からは結界を張りたいので一言欲しいとお願いされ、防衛長官直通の通話アーティファクトを受け取った。ギルドの方にも同じ通達をギルドマスター留めで出して貰えるそうだ。

して……今回の問題を納める代わりに、この第2王子シャスティアを隊に加入させてくれないかと来た！！

成人祭も済ませ今年で20になるそうで若いうちに旅して世界を見るのが王家の通例だそうだけど、どうせなら神と旅するのも良からうなんて言っている。

実際は生存率も良いだろうと言う目論見かな？ クラスは魔戦士だから戦力としては申し分無い。

得意系統は土、武器は槍を使うそうだ。

詫びと言う枷の割には易い願いだったので引き受け食事を始める。

けど本当の枷はそこじゃ無かった、工房の権利を受け取った村が悪くない立地に有りながら何故か立ち行かなく、閑散としているとか？ 水神殿も造らせるので原因を調べてくれないかと言うのだ……。どうやらこちらが本命の様で断れる要素が無い。

どうしよう、図らずも布教になってしまった。

「私、とても不安です」今まで頼ってばかりだったけど、声に出さないと伝わらないんだって気付いたから。

エバンさんの巻き込まれ体質は異常だけど、最近は流され過ぎてる気がするんです。

どうしたら散歩のついでに家来が出来て、精霊付きで、更に貴重な魔戦士の王子様が着いてくるのか皆目、見当もつきません。

私が怒つてるとすまなそうな顔してくれますが、それとこれとは別なんです！

こんなんじゃ、少しだけ記憶が戻ったなんて言えない……。

目尻にじわつと涙が浮かぶ、いけないこの頃なんか涙もろい。

サーナ大丈夫かな？ 沢山お説教したけど結局私は着いて行く事にしました。

決まってしまった事でも選びとったのはエバンさん自身ですもんね？ 新しい仲間になった王子様はかなり金銭感覚に疎い様で、ポンと馬車を買ってしまいました！ しかも振動軽減のスプリング付きです。

その額、なんと54万札！！ 私、ゴールドカードなんて初めて見ました！

装備は総ミスリル銀製の武具であまりに目立つので、エバンさんの持っていた幻覚の指輪で偽装して貰ってます。

私達も慣れたもんで、最初こそ驚いて喧々譁々でアワアワしてましたけど馬車買っちゃった時点で駄目出し、余裕でしたw

レカント 1 嵐の前の何とやら

いやはや、大水神様の思惑通りに大事になりました。

我が神も災難ですな。

失礼、私はウンディオラのヒノンと申します。

「火精霊のベイシエツトさんも、水のアステルパスも居ますわよ！」

ちよつと食い気味、間髪入れない挨拶の二人は私の双剣に宿る下位精霊達です。

精霊と言えど女、寄れば姦しいとはこの事か……。

私は状況を利用して無理矢理にパーティーに入りましたけど、思ったより早く馴染む事が出来て何よりでした。

多分に、イレギュラー要員のシャスティア王子のお陰も有るでしょうかな。

何でも長く王宮を空けるのは初めてとかで大層、ハシャイでおいでの様子で微笑ましいものです。

使えるものは何でも使えってね。

「あれはなんだ？ それも見てみたい！」

との興味に、率先して解説を加え時に適度に絡む事で加速度的に警戒心を薄められました。

私達は現在、エバン様のお師匠でいらっしゃるハチガネ様の工房で別れを済ませ、ハウルベル王の依頼を受け一路、エバン様が治められる予定の村・レカントに向かっております。

（相変わらず爺むさい喋りよね、ヒノンって。そう言うの若年寄って言うのよね？）

ベシエットが残念そうな思念を飛ばしす。

アステルパスまで（精霊化したのは晩年だそうよ？）なんて絡んでくる。

暇なのでしよう。

私は全スルーです。

何故、思念で会話しているかと言うと地底地域では精霊は珍しいので二人には人前で出ない様に強く念を押してあるので面倒くさ……と、つい本音が……その方が安全だと思われるので更に念の為に出るな喋るなと命令してあるのです。

この辺の事情はパーティー内で話してあります。

精霊の宿る武器も希少なので嚴重に越した事も無しですしの。

精神同調してるので、彼女らの声を無視出来ないのが玉に傷ですが。

いかんいかん、話が逸れましたな。

レカント迄はヤギ車で5日程の距離、岩山など迂回するので近い割には日数がかかるようですな。

見える範囲では緑が少なく、私達、精霊種には過ごしづらい土地柄。

地底らしい低めなのに湿度の低い気候になっている。

退屈な移動の旅、順調に見えていたヤギ車は魔物の巣に入り込ん

だ事で少し停滞していた。

戦闘は唐突に始まる。

「ザシユザシユ！」

白刃が閃き、軽やかにひるがえる刃は実際の切断音を半分に聞かせる程に鋭い。

連続で切り裂く音。

凄まじい速さでスケルトンやゾンビなどがバラバラとみじん切りにされ再生力を上回って塵に還す。

ヒノンの双剣は魔法の炎と冷気を纏い揺らめいている為、断面は焼け焦げ、又は凍りついている。

王子も槍を突き出し、大地を操作してと上手い事仲間が囲まれるのを防ぎ、後方支援役の俺とマリアで行動を妨害しつつ隙を見つけて止めを刺していく。

問題は倒す端から復活して埒が明かないと言う事か。
所謂、死にぞこ無いの集団アンデッドの巢。

まるで沸くように、アンデット達が不浄の土を糧に土塊を張り付けたまま立ち上がってくるのだ。

目的地に近づくとか何かが起こると言うのがジンクスになりかけてるが、今回は不浄の地に迷い込んだようでウンザリする。

もしかして誰か『試練』のバットスキルでも持ってないか？

しかし、嘆いても敵は逃がしてくれない。

気分を入れ替えて全力を尽くすのみ！！

「ヒノン……、広範囲の火神魔法で道を開いてくれ！」

「王子は土壁で移動を阻害、巨大な落とし穴とか出来ればそれも頼む」

「マリアは光神魔法で広範囲攻撃をヒノンと被せるように、聖光属性の強いのが良い」

「エミリオはドラゴンブレス一択！」

各々、是の返事と共に指示のに従い行動を開始。
自身も詠唱に入る。

最速で王子の土魔法が地面の体積を削り前方の広範囲を土の柱が押し通る。

ヒノンが祈りを紡ぎ祝詞を叫びながら、火精霊ベイシエットと同調して振り抜いた刀身から爆炎が扇状に羽ばたき、業火の羽毛を無数に飛ばす、『核熱の鳥』を打ち下ろす。

マリアが長い詠唱を終えヒノンの術に被さる範囲に『降り注ぐ慈悲の光弾』を請うと曇り空を割り、天から浄化の光がアンデット……ひいては霊体の支配力を消滅させ、エミリオが未だ厚い魔物の層に火焰ブレスを豪快に吹き付ける。

飲み込まれた物体は瞬時に高熱と炎に炙られ灰しか残らない爆炎。
駄目押しに、以前は強引に発動させた『帯電水の津波』パララウエープを俺とへ
イルで協力発動させ最大規模で奴らを巻き込んだ。

振るわれた力で地形が変わるが今回も気にしない！

流石に終わっただろうと思い、土煙やら火炎、電撃の立ちこめる
中立ちつくす。

様子を見ていると、奥の方から新たに煙を切り裂き、倍の数のア
ンデッドが再び湧き出してきた。

何度か特攻を繰り返したがどうにもならず、全員が肩で息をして
いる。

何やら強力な不浄の異物があるのかも知れない。

拙い事に疲労が色濃い。

「無理だ、撤退しよう！」

想いは皆同じだった。

撤退するべく足止めし、それぞれが全力でヤギ車に乗り込み、走
り出す頃には既に新しいアンデッド達が腕やら足やら出して生えて
来ようとしていたが、もうお腹一杯だ。

駄目押しでエミリオがドラゴンブレスを吐いて清め、逃走方向の
道を洗淨。

危険地帯を突破。

これで今日のブレスはもう撃ち止めたそうだ……。

「あの辺にはもう近づきたくないですね」

呟いたヒノンの一言に全員が同意したのだった。

念の為に、と言うか恐怖の為に丸一昼夜休まずヤギ達を走らせた
事により、予定より特段早くレカントに到着したが、流石にヤギ達

は限界の様で動きも鈍くブハブハと息も絶え絶えでフラついていた。

よく足とか骨折しなかったな。

この俺等に治療術の使い手が居ないので助かった。

最悪、捨てて行かなきゃならない所だったかもしれない。

ちなみに任命見届け任務で付いて来てる騎士達は、壮絶なモノを見すぎて啞然としていたが気にしない！

レカント 1 〽嵐の前の何とやら〽(後書き)

10/10 修正。

レカント 2 へ邂逅へ

レカント村、大瀑布方面へと伸びる門を破壊し50人を越す盗賊が、一組の男女を先頭に雪崩れ込む。

その乱暴な訪問に村長が慌てて姿を現し、何度も頭を下げながら慈悲を請う。

村長はまだ40を越えない位に見受けられるが、疲労と心労の為に眼は落ち窪み頭髪にも致命的なダメージを負っている様で禿げ散らかし、老人にしか見えない様な有り様だ。

騒ぎに敏感に出てきた村人達の顔色も総じて悪く、対する盗賊の戦闘に居る男女は精力に満ち、見下ろす様に威圧感を放っている。

直ぐに襲わない所を見るに、何度か同じ様な訪問をされているのかも？ と気付くだろう。

人垣の後方……、戦える者を呼ぶ為か数人の子供達がチヨロチヨロと走り去るのを見逃す余裕さえ見て取れる。

「村長よ。我らに服従し、潔く村を差し出す用意は出来たか？」

「よもや断る……、なんて愚かな考えなんぞに辿り着いてはいまいよな？」

戦闘用に調整された戦山羊を進ませ男が問う。

「なんなら、殺さずに奴隷として使ってやっても良いとさえ言うてやったのだ、返答は如何に？」

さも当然と男は言葉を吐く。

レカント村は総人口・200人にも満たず、内3分の2は女・子

供や老人であり成人男性で、かつ戦いの心得の有る者など一握りにも満たない。

元冒険者も数人居るには居るが現役で無く、武装した盗賊の集団に敵う訳が無い。

更に最悪な事に、若い女性や子供数人を人質に取られ国やギルドに助けを呼ぶのを『制約』の魔法で禁止され縛られてしまっていた。

一人娘のオウリーナの身柄も心配だった。

必死の言い訳で何とか、もう少し良い条件にと神経を逆撫でしない様必死に請願しながら、単独で救出に向かってくれている人間の帰りを待つべく交渉しようと乾いてしまった口を開く。

一瞥し、今まで黙って口を開いた事の無い女性が何の感情も無く髑髏の杖を向けてくる、すると短剣程の刃が飛び出し村長の喉元にヒタと添えられ薄く切れたのか血が流れる。

「申し訳無いのだけど、不届きな冒険者もどきは始末済みな。面倒臭いのは嫌よ？」

まるで穏やかとさえ言える声音で囁かれた言葉に肩が痙攣し、体がはねる。

信じられず、驚愕に間抜けな顔のまま見上げれば、女の背後に確かに見知った救助隊の面々の苦悶に歪む靈魂が浮かびあがり村長の心を絶望に染めた。

- - 時は少し遡る - -

遂に村の若い娘達が拉致されるに至って、彼らが重い腰を上げた。

元・冒険者で戦士のヤン、野戦士のエイナ、魔術師のブラウンの三人だ。

若い頃は魔導国で腕を鳴らした彼らも既に40に手が届きそうな年齢だ。

昔はオーガでさえ倒せた三人だが、加齢にブランクと表立って戦う事など無くなっていたが、この所業は許せない。

こんな寒村には依頼に出せる報酬さえ無い。

しかし、このままでは座して死を待つのみ。

そんな想いで盗賊のアジトに忍び込んでいるのだ。

幸い、村にはもう少し若い冒険者夫婦が残っている、あの二人なら私たちに何か有っても何とかしてくれるだろう。

……そんな甘い考えもあった。

実際、アジトに潜入する事は野戦士の「畏感知」や「忍び足」ですんなりといった。

どうしてもかわせない見張りはブラウンの魔術で眠らせエイナが落とし、死角からのヤンの剣撃でサククリと処理。

そんな感じで一時は娘達が捕らわれていたと思われる場所まで行けていたのだ、けれど結果は失敗。

娘達は美しい者は既に売られ、普通の者達は犯されて殺されたり、狂ったきり捨て置かれていた。

……もう遅かったのだ。

そして、あの女の操るゴーストに見つかり憑り殺され、その戦列

に加えられてしまったのだった。

そして、今に至る。

遅れてやって来た元冒険者夫婦が見たのはそんな場面だった。

「ヤン、エイナ、ああ！……ブラウンまで！！」悲痛な声で妻がむせぶ。

いずれも先輩であり今回の窮地に駆けつけてくれた実力者だったのに何たる事だ。

目の前にしても信じられないが今は呑み込み、呆けてしまった村長に代わり皆に逃げる様に大声で叫びを上げた。

夫は村人が逃げる時間を稼ぐべく、固定盾に付属した鞘から曲刀を引き抜き、いつの間にか妻も愛用のメイスを準備しているのを確認した。

「交渉決裂……、か」

男は二ヤけ、一息で魔刀を引き抜くと村長の首を切り払った。

呆気無く首が飛び、コロリと地に落ちる頭部、素早い前蹴りで残った体を倒すと思い出した様に首の切り口から血の噴水がしぶき村人に振りかかる。

あまりの鋭さに死んだ事に気付かず。

数秒は村長の目が忙しく動き、口を開閉していたがじきに停まる。

それを皮切りに恐慌に陥った村人が我先に逃げ出し、前に出よう

とする夫妻の邪魔をする。

このレカント村はひょうたんの様な形をしていて、裏門である此方は小さい広場を囲う様に民家が並んでいる。

ひょうたんのくびれ部分は洞窟の様になっていて、正門に向かうにはこの道からしか行けないので必然、道は渋滞してしまっていた。付近の住人は真つ先に家に閉じ籠って身を守ろうとしたが、盗賊の用意していた破壊鎚や火矢で焼き出され、質の悪い武器で切られる苦しみを受けながら絶命。

女・子供も引きずり出され美人・美形は連れ去られそれ以外は早速犯され殺されていく。

酷い有り様だ。

支配されアンデッド・ゴーストにされた元冒険者達も自分達には無い、暖かい血肉を求め解き放たれて戦列に加わった。

瞬く間に平和だった村が狂気に侵されていく。

洞窟にまで雪崩れ込んでくる盗賊達。

村の半分まで押し込まれ、後退した先で夫妻と戦える村人数人で防衛に徹していてもジリジリと削られてジリ貧でしかない。

全滅の二文字が頭によぎる。

何故なら、道が狭くなっているので何とか防衛出来ているだけだと夫妻だけは分かっていたから。

レカント村正門方面。
体力の限界の岩ヤギに牽かれ、やってきたは良いがヤギ達が怯えている。

それに、これから向かう予定のレカント村周辺が異常に明るい。
……喧騒と悲鳴、近づくにつれ濃い血臭と何かが燃える嫌な臭いが流れてくる。

これは明らかに襲撃されていないか？
もしかしたらもう手遅れかもしれないが見捨てる訳にはいかない。

レカント村のハウルベル街道方面はきつめの下り坂になっているので、只でさえ入村し辛いのに疲労困憊のヤギに重い荷車付き。
絶対に間に合わないと思いヤギ車を停める。

レカント村の地理は頭に叩き込んである。
隠しておきたかったけど仕方無い、と……ヘイルに本来の姿に戻って貰いマリアとヒノン、俺の三人で飛んでいく事にする。
エミリオは龍化状態で自前の翼でイシスと飛んで貰う事にした、
どう考えても重すぎてヘイルも遅くなるだろう。

こねる王子を強引に説得し護衛騎士と共に岩ヤギを荷車から外した後から合流、出来れば村の背後に回りこんで裏門からの挟撃を頼む。

先行到着した俺達が正門を破壊して進入した内部は大きな広場になっ
ていてまだ無事な民家と怯える村人達がへっぴり腰で並んで立
っている。

お世辞にも防衛にはなっていない。

時間も無いので新領主である事を告げ強引に外へと促し洞窟部に
侵入。

参戦を知らせながら駆け防衛ラインに到達、まずは神獣版ヘイル
が得意の『氷雷撃』を激戦区に投下。

巻き込まれた盗賊達が氷の彫像になり雷がその部分を粉々に弾き
飛ばす。

しかし、いきなり現れた巨獣に驚き、恐慌状態の村人が正門の方
に逃げ帰る。

けど、ここはかえって好都合

幾らか飛行に慣れている俺も神聖水神魔法『水爆槍』を打ち出し
降下先を確保する。

流石に狭い洞窟内で顕現し続けるのはしんどいのでヘイルが小型
化しエバンにしがみつく。

案の定、ボタンと派手に落ちたマリアが「痛あ！」と半泣きで転
倒。

いきなり小型化したヘイルに？まっていたマリアは上手く着地出
来ずに尻餅をつき涙目になっていた、が援軍は援軍だ。

全身傷だらけで満身創痍の元冒険者夫妻をターゲットにヒノンの

砕いた魔石から癒しの範囲魔法が飛び、一命を取り留めた夫妻。

「大丈夫ですか!？」

エバンが大柄な盗賊を鞭で打ち据えながら気遣うと、懸命に笑顔
を浮かべ。

「かたじけない、お陰で生き返った!」

「これでまた戦える!」

と二人して前線に復帰してきた。

現在の配置は先頭にエミリオ&イシス、直ぐ後方に冒険者夫妻中心にマリアが陣取り両翼に俺&ヘイルとヒノンが残った村人達と雑魚処理にあたっている。

だが、残念ながら防衛に参加した村人達は武器が折れたり、体の一部を失ったりと戦え無さそうなので避難して貰う。

いつもの如く、エミリオが前で敵を引きつけイシス盾や斧を巧みに使い皆のダメージを肩代わりに無効に、時に尾撃も交え攻撃の要にもなる、ブレス枯渴でも守護者は健在。

右翼ではヒノンが双剣で舞いトリッキーな動きと神聖火神・水神魔法を織り交ぜ確実に数を減らすのに成功していた。

マリアは相変わらず凶悪な自失魔法を打ち込み稀に湧く死霊を光神魔法で浄化して憑り込まれる犠牲者を減らす。

俺も水攻めにしつつ錬金術による回復をこなし、鞭で動きを阻害する。

器用貧乏かもしれないが、全員の手数を増やすのに貢献している。

夫妻も負けじとく剣技を駆使してジワジワと盗賊達を屠っていく。

俺達は守りが薄いから地味に助かっているかも。

盗賊達も各々の得物で少なく無いダメージを与えてくる。

一時は駄目かと思っただが何とか押し返し始めた。

「皆、もう一分張りだ!!」

気合の声を上げた瞬間、俺達即席パーティーに、負属性の回復魔法が降りかかり、全員が吐血……膝が崩れ落ちる。

「あら？ 耐えるのねー、憎たらしい男」と髑髏頭の杖が振り下ろされる、イシスと打ち合わされた髑髏は術師が振るったと思えない程の衝撃と炸裂する魔術光を伝えてくる。

「サーナー!!」

「サーナイア!」俺とマリアの悲鳴が重なる。

「なんだあ？ 俺様だっているぜ、冷たいなww」
にやけ笑いでサイラーも戦山羊から飛び降りる。

サイラーが刀を打ち鳴らすと、奴らを取り巻いていた数人の盗賊が昆虫の様な外骨格に押しつぶされ異形に变じ、同じ盗賊から悲鳴が起きた。

勿論、戦山羊も外骨格に潰され昆虫化した。

全員がこの変化知っていた訳じゃ無い様でひそひそと相談し、今

まで暴れていた盗賊が我先にと逃げ出した。

なんだ？ 仲間割れか？

逃げ切れなかった盗賊は異形にの腕に捕まり生きたまま捕食されていく。

「サーナっ、逃げて！」

マリアが怖気を振り払って言った台詞にサー・ナイアが憤慨の表情で杖を突きつけ。

「どの口がそんな事を言うのかしら？ あの時、私を見捨てたくせに……！」

憎しみを纏ってパッシブスキルを起動、ソウル プロテクト『魂の揺り籠』クレイプ『貪り合
う愉悦』ヴォリユブテ アンデットマスタリー『死霊籠絡術』の3つが改めて立ち上がる。

ヤギを降りるとそのヤギも自制を無くし出鱈目に走り出し異形化。

「邪魔よ！」

怒りに任せた杖が、ヤギだったものの首に豪快に打ち込まれ首の骨が折れた。

無残に崩れ落ち痙攣を繰り返す元ヤギ、脆そうに見えたがそんな事無い筈だ。

あの杖は要注意だな、エミリオが警戒レベルを引き上げる。

無駄な動きを隙をと見て、ヒノンが魔石を砕き全員に回復魔法をかけた様だが、標準の効果を表さずに痛みが引かない。

俺はそれでも声を嚔らし「止めるんだサーナイア、こんな事していても何にもならないって!」と言い切る。

「姉さんを誑かすあんたは黙っていて!」

ヒステリックにサーナイアが喚く。

サイラーは面白そうに昆虫人間に乗っかり見物気分の様だ。

「眼を覚ましてサーナ、貴女あんなに優しい子だったじゃない」

泣きながら訴えるマリアにサーナは俯き、ギラギラした目付きで再度、負の回復魔法を放つ。

マリアは抵抗に失敗して酷く喀血……、やばいかもしれない。

「止めるんだ!」

俺は我慢出来ずに、サーナイアを拘束するが抵抗する素振りも無い。

「やっぱり貴方は姉さんが良いの?」

「私は邪魔なの?」

「だから裏切るの!?」

泣きながら搾り出す言葉にマリアが顔を跳ね上げる。

「そして死ぬの?」

『ワイルド
デスマム
黒魔女の威圧!』

全てを恨む黒い波動が空間を満たし今まで蓄えたゴーストを呼び

寄せぶつけてきた。

こいつは最高にヤバイ、ガスガス押し寄せる死の手を持つ悪霊達、霊的防御の無い俺達にこれらの体が触れるだけでも凍える様に痛い。

熱が奪われて終わりが近づく。

エミリオが崩れ落ち、地面に落ちたイシスが人型になり泣きながら体を抱える。

ヒノンが……、マリアが座り込んだまま生気が薄れる。

零れ落ちたヒノンの双剣が冷たい光を照り返した。

なんだか、ひどく現実感が無い。

肩から転げ落ちるヘイルサンダを見つめながら……俺の体も崩れ落ちた。

レカント 2 〽邂逅〽 (後書き)

10 / 11 修正。

覚醒の神子

・ ・ サイド・マリア ・ ・

ここは何処だろう？

目蓋の向こうが明るい。

目を開けたいのに上手くいかなくてもどかしい。

何故だか声も出ないし、私さっきまで何をしていたんだろう？

思い出せない……。

（起きて下さい……）

（起きて、愛しい神子よ）

誰だろう、暖かい声。

私はゆっくりと目を開いた。

（始めまして神子よ）

現れたのはとても綺麗な女の人、何故か声には反響がかかったか
の様に頭がクラクラするみたいに感じた。

すると心を読んだかの様に

（ごめんなさいね、これ以上小さくなる事が出来ないの……少し存
在が辛いだろうけど我慢してね？）

そう言えば目の前の女性はとても大きく見える気がする。

髪は頭丁で団子の如く括られ、両サイドから毛束が2本、天使の
輪に見える様に浮いている、輪の先はうなじで交差して首筋から胸
に流れいる。

不思議な髪型……。

髪色は金で見た事も無いような美人さん。

胸もとても大きく真っ白なワンピースを身に纏い、右手に向日葵
の弓を持っていた。

綺麗。

思わず思考が漏れる。

（ありがとう）

うふふ、と笑いの波動が伝わる。

（でも今はそんな事は良いの、貴女の妹を仲間を助けてあげて？）

（貴女にしか出来ない事なの）

ふつくらと笑い、唐突にゆっくり体が回転する。

その胸の先には別の女性の上半身、背景が夜の闇に染まる。

同じ顔付き・同じ美貌、殆ど同じなのに控えめな美を持っている
様に見えた。

彼女は黒のストレートで同色のローブを纏い、左手に百合の花を
象った柄の剣を握っていた。

（我が神子、私からも頼む彼女を、助けてやって欲しい）

（あれは騙されているだけなのだ、可哀想に）
悲哀の波動が満ちる。

（もう時間が無い）

（心、安くして待て）

（（新たなる希望の双子とならん事を！））

2つの波動が混ざり合い、私に色をつける。

そうやってまた意識が離れ、本来の体へと帰り行く。

曖昧だった状況も認識した。

ふらふらと立ち上がり、もう一度目を閉じた。

夜の闇と月、真昼の暑さと星を感じる。

（瞼の裏が熱く頭が割れそう）

（けど、やる事はわかってる……私の唯一の肉親守るのだ！）

（皆だって助けて見せる）

【強い意志が力になる】

目の前を隔てていた様な壁が粉々になるイメージ。

忘れていた記憶が盛大に溢れ出す。

その瞬間、サーナリアも微かに揺れたかと思うと、光の無かった

瞳に生気が戻り新しい涙が次々と流れ落ちる。

双子だからだろうか、マリアの記憶の封印崩壊に引きずられる様にサーナリアにかけられた洗脳も一緒に解けたらしい。

更に、死霊に魂ダメージをしこたま受けた仲間たちの遺体から眩い光が立ち上り起き上がる。

まとり付く冥界の腕も体を触れずに怨めしそうに引っ込んで行った。

後には不思議な顔で起き上がるエバン達が残る。

「私……私、なんて事を……取り返しのつか無い事を沢山してしまっ
たわ」

よろめき座り込んでしまう。

「皆、死にたく無かった筈なのにあんな風に……ああ、ごめんなさ
い！」

握りこんだ爪が自らの皮膚を裂く。

「憶えているのは最後の顔……。痛い顔、苦しい顔・泣き顔・死に
顔……」

「謝って許される訳無いけど、私」
サーナリアの嗚咽が止まらない。

座り込んでしまった、正気に返ったサーナリアには興味が無いと

ばかり、サイラーは見向きもしない。

「チツ……けつたくそ悪い、潮時か」

ニヤニヤしていたサイラーの顔付きが唐突に変化し、吐き捨てる。

昆虫人間から降りると、すぐさま魔人化し戦闘体制を整える。

当時は全力で変化しても蜘蛛人間化するだけだった変身も、あの時得たアーティファクトを強化に使っているのか見た目が凶悪になっている様だ。

頭部は人間のままだが複眼が剥き出し、わき腹と背中から2対の腕が突き出ている。

皮膚は体毛に覆われ黒と黄色の斑の毛色。

全ての手に刀・短刀・大型ナイフを装備し六本の腕を巧みに操る。

「さて、あの時の後始末と逝きますか！」

何が楽しいのか、またニタリとニヤついたまま構えをとって襲い掛かってきた！

レカント 3 く嘗ての友

サーナイアが正氣に戻った事で憎しみで制御されていたゴースト達が動きを停めた。

それは良かったのだけど、無念から身を寄せ合い、大きな怨念の塊に融合合体してしまった様で新たな難敵が現れてしまった。

今は無差別攻撃をしてるが、早々に浄化しないと拙い！

更に正体不明のスキル発動を始めたサイラーを、援護するように15匹前後の昆虫軍団が一斉に動き出す。

これからは見たまんまインセクターと呼称する事にするが蟹の様な脚を動かしガサガサと迫る。

全身を茶色っぽい甲殻で覆われ、胴体は蟻の様に3部位からなっていて凄く固そうだ。

更に、元からの腕は大きな鋏になってしまっていて宿主の頭は腹部に潰され存在し無い。

細長い腕から繰り出される、素早い鋏。

エミリオとヒノンが先頭で必死に受け流すが如何せん復活したてで上手く捌けずに細かなダメージが増えていく。

奴等の猛反撃に侵入してきた村の正面まで押し戻され、民家の多いゾーンまで後退してしまっている。

インセクター達に周囲の障害物を気にする様な知能は無いらしく、愚直に直進してくるのが昆虫臭くてまた恐ろしい。

左翼側、茫然自失で泣き崩れ、立ち上がれ無くなっていたサーナイアにも平等にインセクターが腕を振り上げ刺し殺そうと頭上に迫っている。

サーナイアは気付いていない。

「させない!!」

しかし、人格が統合されたマリアが久々に<影神の神聖パッシブスキル>を同時起動。

懐かしいスキルは

『追従する影』

『溺愛する闇』

『立ち上がる幻想』の3種。

闇の鎧を光の装備に結合し、神聖戦士としてまた大剣を握る。

刹那……、インセクターとサーナイアの間に割り込み固い鉄を割り飛ばす。

『立ち上がる幻想』で影を実体化させ任意の形に留め、『追従する影』影の刃で犠牲者に更なる同時攻撃を繰り出す。

しつこく攻撃してくる残りの腕前に『溺愛する闇』による闇のシールドが自動展開、余裕で刺突を弾く。

身体能力の加護も問題無く戻った様だし……、むしろ以前より力強い。

「ウアラ姉さん!？」

能力の再確認をいていたマリアに妹の声がかかる。

突然の肉迫に驚き思わず、と言った感じた。

「さあ、立って、走るの！ 今は生き延びることだけを考えて！ 私達たった二人だけの姉妹でしょう？」

一喝され、臍氣に意思の光を取り戻した瞳で、口元をキュッと引き締めた妹にウアラは柔らかに聖母の様に微笑んだ。

一転、覇氣のこもった鬼神の表情で豪快にインセクター達を尻ぎ払う。

それだけで甲殻が割れ、砕け、脆い四肢が千切れ舞う。

「皆、こいつら関節が脆い、腕も貧弱だ！」

肯定の返事が重なるが、そんなに簡単に屠れるのは君だけだよ？
って全員が思ったのは言うまでも無い。

……流石、2神の加護。

「そう、ほいほいと倒されちゃ堪らんぜ」

忌々しげにサイラーが喚き、先程から準備していたスキルを発動。顎が外れるんじゃないかと言う位に口を開き、尋常じゃない量の蜘蛛糸を吐き出す。

咄嗟に全員が回避するが、狙いはフィールドの方らしく、そこらじゅう蜘蛛の巣が成形される。

「第2ラウンドと行こうじゃないか？」

頭上の巢に飛び乗り天井から逆さに立つサイラー。

後衛を狙い直進してくる。

蜘蛛糸がヤバイと睨んだエバンが、全力で振るった鞭で蜘蛛の巣を攻撃するが、意外に強度があり散らす事が出来なかった、粘性が無いのだけが救いか？

繰り出されるサイラーの六連攻撃を鞭をしならせ弾き、絡め俺に釘付けにする。

不敵に笑うサイラー。

どうやらインセクターも頭上の巢に逆さに立てるらしく。

インセクターのいくらかも、おもむろに巢を利用したのは誤算だった。

このままでは碌な武器の無い村人の方に楽に向かわれてしまう。後方で頑張っている村人達の方へ行かない様に、ヘイルも雷を飛ばし感電死を狙って攻撃。

焼け焦げた天井のインセクターが転げ落ち仰向けに死骸が落ちる。元になった人には悪いが、本当に虫みたいで気色悪い。

あえて表現するならゴキブリの死骸の様な雰囲気なのだ。

ここまでは振りだったが、暫くの攻防の末、インセクターを全滅させサイラーを再び、奥へと押し込む事に成功していた。

やはり、マリアの存在が大きい！

前方に目を転じてみると、挟撃が上手く決まった様で王子と騎士が逃げた盗賊を鎮圧・捕縛する姿が映る。

ほぼフリーな MARIA が最後のインセクターをなで斬りしながら走り、サイラーに斬りかかる。

肉薄、『追従する影』の刃が別軌道で幾重にも斬りかかる。これが影神の恐ろしさの真髄、身体強化と他方向同時攻撃……。しかも魔法属性のおまけ付き。

サイラーも6本に増えた腕で器用に捌き魔族スキル<切断系>を吐きかけ不意の体術や巣を使ったフェイント、短刀によるコンパクトな刺突で応戦。

MARIA も負けじと剣の平で受けてからのまき打ち、頭上からの唐竹割り地面さえ裂く程の一撃を見舞う。

堪らず離れたサイラーに影を利用した弓からの矢の雨を浴びせる。

全てサイラーに切り払われたが残心の硬直中に聖光属性を付与した大剣による強撃をお見舞いする。

避け切れなかった斬撃が遂にサイラーの胴体に深い傷を残し、強化に使っていたアーティファクト「増強の守り石」を割り砕く。

そう、全てを狂わせたあの遺跡の戦利品が今動きを停めた。

その後方ではゴーストの塊、レギオンをエバンの全力の結界で封じ神属性の雷をヘイルが叩き込み、エミリオの竜言法による清めの印で消耗させる作戦が展開。

ヒノンは王子の加勢に向かい、未だ多い盗賊の殲滅に参加してい

る。

アーティファクトが壊れ、本来の力以上に能力を引き出していたサイラーの魔人化が強制的に解ける。

傷口は大きく内臓を晒し、喀血し大地を舐める。

「下手こいたなー、もう少しだったんだけどな」

「死んでからもお前達を呪ってやるからな!!」

マリアを見上げる下品な中年の笑顔、中途半端に変化の解けた顔はこんな時だからこそ欲望に塗れていた。

「さようならだ」

両手で逆手に持った大剣を振り下ろす。

地面に突き刺さった刃は見事に胴と首を切り離し血の水溜りを作った。

サイラーとの出会い、ダンジョンを共に走り回った事、スライム津波、短いなりに濃い思い出が蘇るが今は振り払う。

サーナリアも少なからず思う所がある様だが、毅然と前を向く事にしたようだ。

まだ戦いは終わっていない……。

少女達は顔を上げ仲間の元に、前に歩み出して行く……。

レカント 3 〽嘗ての友〽(後書き)

10/11 修正。

覚悟

長い様で短かった、村落防衛戦は少ない死者を出しながらも全滅の憂き目を回避する事に成功していた。

多くの家屋がインセクターの行進に踏み荒らされたが、生き埋めになった人間も居ないらしい。

村長が亡くなり、縁者も生き残る事が出来なかった為、内情に一番詳しくかった冒険者夫妻を筆頭に戦う力のある次代の若者達で自衛の為に組織を作って貰い、俺達が留守にする間の守りと復興に努めて貰う事にする。

ゴタゴタしていて聞いていなかったけど冒険者夫妻は夫がエーギルさん、妻がアイシャさんと言うらしい。

ついでに水族移送陣を屋敷予定地に設置して緊急移動を可能にしておく。

現地にヒノンを置いておく事で連絡もスムーズにいくと思う。

今回、捕縛出来たのは盗賊の生き残り8人程とサーナイアで9人。幹部であるサーナイアを捕まえ無い選択肢は取れなかったが、流石に盗賊と一緒にの移送で無く手錠つきではあるけど俺達のヤギ車で連行する事が許されただけマシなんだろう。

ハウルベルに戻るのは俺とヘイル、マリアと王子、護衛騎士達。ヒノンは先に上げた通り連絡役として、エミリオ&イシスは村の防衛の長として残って貰った。

とんぼ返りの道中、現場から離れ落ち着いてきたのか、ポツリ…
ポツリとサーナニアの告白を聞く事が出来た。

俺達とはぐれ、ウアラと落ちた穴の先ではまたもスライム津波に
会い、無我夢中で逃げた事。

逃げ込んだ通路は行き止まりでキマイラの巣だった事。

パニックで戦力にならないサーナニアを庇いながらの戦闘、キマ
イラと言う強敵、流石にまかないきれずにマリアが先に脱落し津波
に連れ去られ、孤立して弄ばれている所をサイラーに助けられたと
言う事。

その辺から意識の混濁が頻繁になり、いつの間にか生きている者
全てが憎くなっていたそうだ。

おそらくサイラーが何かしていたんだろうが、俺には解らない。
自分の意思では無いといえ実際に多くの一般人を殺害してしまっ
ている事も拙かった。

季節はそろそろ秋に入るが地底の気候にあまり変化は無い。

出発して直ぐ、マリアとサーナニアは時間を取り戻すかの様にお
互いから離れない。

心配していた術師からの襲撃も無く、無事に5日の旅程を終え俺
達はハウルベルに帰還した。

この5日で、どうやらマリアは統合した自分を受け入れたらしく、
今後はウアラマリアに正式に改名する事にしたそうだ。

「もう一つ決めた事があるの」唐突にウアラマリアが言う。

「あの子をもう独りぼっちにしたくないの、申し訳無いけど私はここに残る」

彼女の決断にやっぱりな、と言うのが俺の感想だった。

「暫くはフリーの冒険者としてやろうと思っの、依頼がある時はよろしくね？」

そう言って笑う彼女は透明で美しかった。

俺は「必ず」と言っで見送らずに別れた。

その足で王子達と王城へと上がり、罪人を引き渡して王へ報告に向かう。

「災難でしたな」

先に報告を受けていた様子のハウルベル王。

お互い労いの言葉を告げ合った後、早速に復興の手筈を詰めていく。

この日、俺は自分の守護する国を持つ覚悟を決めたのかもしれない。

覚悟（後書き）

情報の齟齬が有ったので、修正しました。
すみません（汗）

流れ出す心

話し合いの最後に差し掛かり「自分の拠り所を作ろうと思う」と、俺はハウルベル王にそう宣言した。

影響が勝ち過ぎるとか、前例が無いだとか、神族らしく無いとか、もう辞めた。

ぶっちゃけ、どんなのが神らしいのかも手探りなんだと吹っ切れた。

一度、心の赴くままに振る舞ってみようと決めたからだ。

駆け引き無く良い放つ俺の爆弾発言に、王が息を飲む気配がする。

「それは我が国に神の守護を与えろと言う事ですか？」

言質を取る様に窺う王。

しっかりと頷く俺に「ふむ」と頷き。

「ならば、私も一人の人族として、国王としても信仰を捧げましょう」と即決する。

大国の王が、臣下に何の相談も無く、1・2も無く従う程に神の契約とはそれだけ有り得ない、国にとって利益のある事だったりす

る……。

「拙いかな？」

なんて気持ちも、ムクムクもたげただけど無視！

そ知らぬ顔で信徒の証として前もって錬成しておいた聖印を贈る。

3本の棒が雪の結晶の様に交差した意匠は水の意味を持ち、俺専用の神聖武器として位置づけたギミックソードの絡んだ飾りを添えてある、中心にはアクアマリンを抱くエンブレム。

これを通じて双方向に、祈りと加護のやり取りが出来、お互いに力を増す仕様にしてある。

更に、同じ物をもう一つ渡し、新たに建設して貰う事になるだろう神殿用に使用して貰う事にした。

その後も長く続いた話し合いで、復興に必要な建材や食料・生活支援や人材の援助について細かく詰めて行く。

人間相手なら妥当だけど、こんな話も出た。

「不躱ですが、今後の防衛の要に我が魔道騎士団より精鋭を5人程派遣しようと思うがどうでしょうか？ 此方の都合で半年事に呼び戻し、交代での派兵とさせて頂く事になるかの？」と言う提案。

多分……、情報収集の意味合いも強いのだろうけど、その防衛能力は魅力だ……無償の様だし、断る理由も無いのでお願いする。

更にシャスティア王子にも土魔術による建築支援と整備の協力も約束して貰い、粗方の話がついた。

次に、人選自体は王の方で行ったが、魔導騎士の宿舎に移動し先の話し合いの結果、同行する事になった精鋭5人と顔合わせをする事になった。

まずは順当に、副団長のアハゼン・シュテルグさん。

地底人女性で20代半ば位に見える。

得物は強弓でゴーグル型サングラス愛用。

次に攻撃隊から男女2名、守備隊から男性1名、補助魔法隊から男性1名と言う内訳だった。

特に補助魔法隊員、ボグラ・ドラの食い付きが凄かった。

本当は攻撃隊の騎士になりたかったらしいが、才能が無く神聖魔法でも良いから攻撃魔法を覚えたいそうだ。

隠れ戦闘狂なの！？

そんな理由かよ！？って内心、軽く引き気味だったけど、強い信心力は俺の力にもなる……。

俺の教義と相性が良いかわからんし聖印を進呈して契約を交わした。

様子見だね。

彼は入信者になれた興奮からか、「道中、命に代えてもお守りします！！」としつこく着いて来たが、普通の武器を受け付けない俺には必要だし。

まだまだ足りない物資の融通に、人材の確保にと水族移送陣を使つて移動の予定なので、あの手この手で他の騎士達と一緒に村に向かつて貰える様に言いくるめた。

これ以上、付きまとわれるのはく今はく不都合しか無いので、念を入れて予め用意しといた依頼保証書を副団長に渡して、さっさと先行出発して貰う事にして別れた。

時間は有限。

急ぎ王城を後にした俺の前には師匠が立っていた。

「直ぐの帰還でしたが、お帰りなさいですね？」
ええ笑顔の師匠……、変なもんでも食ったんだろうか？

「今……。失礼な事考えてますね？」

馬鹿な考えを見透かされたみたいで焦り、
「そんなわけ無いじゃないすか？」と逃げた視線の先で「ザアアアッ」と、大量の雨水がアーティファクト『ウォーターブルーフ完全防水』の防壁に弾かれて、空に一時的に滝が現れた。

一般市民達の悲鳴が上がるが反射的なもので皆、実害は無い事を知っている。

暫く濃霧が続いたので天井の水滴の張力が限界に達したのだろう。

この国の絶景の一つだ。

おもむろに、まだある右手を差し出し掌を向ける。

「師匠……、一緒に俺の国に来て貰えませんか？」

「まだ生まれる前のごしらえの段階ですが、貴方の力が借りたいんです」

照れ臭かったが何とか言い切る。

「面白そうですね。と言いたい所ですが、直ぐには身動きが取れませんね」

「いずれ、身辺整理が済んだら伺いますよ」
今はまだ興味を引ききれ無いみたいだ。

「なら、それまでに精々見れる国にしておきますからね」
差し出していた手を上げお互いの拳を打ち合う。

「楽しみにしていますよ？」

では、とお互いに何も無かったかの様に別の道へ歩き去った。

その足で冒険者ギルドに赴き、国王から連絡が行っていたらしい冒険者ギルドで、ギルドカードのブラック化と亜空間バックの上位

交換作業、返還の制約の解除等が早やかに行われた。

これで領主待遇だな。

その後ギルドマスターと面会し、新しい俺の国にギルドを建てる予定なので、ギルドマスター及び職員の派遣を要請したいと持ちかけた。

頭金は俺の作る錬金術製品の進呈（勿論グレードを下げたり、制約を付けるのは必須）更に俺の教団との自動契約のアーティファクトを置かせて貰う予定を伝える。

この世界の神は怠惰な者が多く、自ら契約して歩く様な神は少ないので信徒獲得にかなり有利な筈なのだ。
今は少し手も沢山の力が欲しいのだ。

力不足で泣くなんて御免こうむる。
最低条件として、マジックアイテム如き（アーティファクトの下位製品全般の事）で傷など負わないようにになりたい。

これが第一目標。

ギルドマスターの反応は悪くない……本部とのやり取りも有るかで後日、返事待ち。

良い答えを期待しつつ、今まで貯まった素材や討伐依頼の消化を済ませ、地味にランクも上がった。

そうこうする内、すっかり気温も下がり夜の気配も濃い。

師匠の工房を使っても良いんだけど、昼間のやり取りの後で借りるのにメリットを見出せない。

今日は宿に泊まる事にする。

それに外はまだ、雨玉警戒令が解けてない筈なので防壁の出入りが出来ないから良いか。

- - 翌日 - -

天気は地底日和。

エン・ラクシス
『起動！』

淡い光を放つ移送陣に干渉して空間を跳躍、王子たちには単独で戻って貰う事にして一端、村に戻る。

帰って直ぐにヒノンに会い打ち合わせで情報の交換を済ませ、村人に広場に集まる様に召集を頼む。

てか、思ったより集まりが良くて準備に焦ったけど、動揺を押し隠して少し高めの台に乗る。

事前段取り通り、アイシャさんに風魔術『風の囁き』ウイスパー・ボイスを使って貰い、声を遠くに届く様にする。

これで演説の用意は完了。

傍らには神獣化したヘイルサンダを控えさせ、俺も今出せるだけ

の神気を纏っている。

けど、正直言ってしんどい。

全然扱えて無い。

けど、頑張るしか無い！

その甲斐有って、これだけで村人達にはどよめきが走り、畏怖から声を聞く体制が出来上がる。

今はそれでも良い。

「皆さん、先日の激戦、まずはお疲れ様です」

「見知った方も居るかと思うが新領主に任命されたエバン・ニードと言います」

「背後に控えるのは神獣であるヘイルサンダ」

あの時の防衛戦を思い出し顔と名前と役職が一致したらしく歓声
が上がる……。

皆を宥め、落ち着くのを待ち言葉を繋ぐ。

「当初、普通にこの地を治めるつもりでしたが、あの時の嘆き・亡
くなった方の無念に触れ本腰を入れ、統治したいと考えました」

「その為には今より力が必要なんです」

「皆さんを守る力になってください」

「なぜなら俺は、なりたての水の小神、まだ十分な地盤がありません

ん」

「私達はハウルベル王との約束により権利も得ています、ここに私の国を……神都を建設したいと考えています」

爆弾発現により一層のどよめきと驚きが上がるが気にせず。

「どうか協力をお願いします」と言い切る。

「陰ながら、人間族の領主として影からの支援をと思っていましたが、先の襲撃は私達にも大きな傷痕を残しました。」

「私は決心しました！ 神として全力でこの地を、あなた達を導きたいと思いました。」

「私を助けてくれる方は前へ、共に神の都作りを手伝ってくれませんか？」

話すうち場を静寂が満たす。

当然か。

はなはだ胡散臭いと、我ながら思うが……皆、賛同してくれるだろうか？

緊張の時間が過ぎる。

体感時間的に大分経ったと思うが動きが無い。

駄目だったかと、不安で堪らなくなつて動き出そうとした時、――

人の少女が躍り出た。

「私！ 良くわからなかったけど、あの時、皆を守ってくれたって知ってる！ もしかしたら今、生きてるかわからなかったのも知ってる……だから……信じてみたいよ！」

素朴な好意が嬉しかった。

笑顔で聖印を差し出す。

大衆の目の前で契約が交わされ、眩い光に包まれる少女……彼女にも何らかのスキルを得て、俺にも光が戻り神気の維持が楽になる。

繰り広げられた光景に、本物を感じ、「わっ！！」と皆が詰め掛けた。

きっかけが必要だったらしい。

俺は仲間達と聖印を配りながら、まずは第一歩を踏み出せたが……これが正解かはくまだくわからない。

流れ出す心（後書き）

後半。

読み返しての違和感があったので大分、書き直しました。

始動「エバンニド教団」

聖印配りはヒノンとエミリオ & amp・イシス、冒険者夫妻エーギルとアイシャ達に任せて合同契約の祝詞を紡ぐ。

勿論、さつき信徒になってくれたミカちゃんにも配るのを手伝って貰った。

実は初めての女性信徒、教団には1人以上の巫女が現れると言うからもしかしたら彼女かもね？

皆の手伝いもあり、あまり待つまでも無く全員に聖印が行き渡った様子を確認・詠唱に入る。

『幾千の調べ 悠久の窓際 水の柱が一つエバンニドに追従するを
誓え さらに契約は為される』

祝詞の旋律に従い自然と村人達から返答が帰る。

『『『契約を望みます』』』

何十もの声が重なり、聖印を繋がり、神気が交換され、双方の体に刻み込まれる。

村人の頭には直接に俺の教義が響いている事だろう。

今ならまだ契約破棄が出来るが、そんな気配も感じず……暫くは、新しいスキルの発現や肉体の加護に村人が驚きの声を上げ出すを見る。

俺自身もこの契約で水神としての神格が上がったらしく、失ったままだった左腕の切り口に自動的に光が集まる。

そして何故かの錬成陣！

予想外の事に固まっていると、勝手に陣が回転を始め手先の方に移動……。

通過した陣の後ろから金色に光る金属の腕が現れる。

肩部はつるんとしていて肩・二の腕・腕部と3部位に別れている様だ。

サイズは不釣り合いな程に大きく全体的に丸い印象を持った。

腕から二の腕にかけて覆うようにタワーシールドの様な四角い金属合板が張り付いていて見かけが非常にゴツイ、けど表面には流れを現す細かな細工が見て取れ繊細さも併せ持っていて綺麗かも？

続く拳も巨大で、成人男性の頭部を包めるサイズ……。

肉厚な指先は鋭い爪状になっているらしく金属質なのに、手の平をニギニギしてみたなら感触があるのに驚き嬉しくなる。

暫く動かしてみた後、人間サイズにも出来る事を発見して小さくしてみる。

元の腕と同じくらいになったけど、金色で金属製なのは変わらない様だ。

皆は単純に驚いてるようだったけど、イシスなんかは親近感からか「……遅い／＼」とか、言ってエミリオを慌てさせたりなんて一幕も。

けど、良い事ばかりで無いようで、神気の総量が上がった事で平然とオーラを纏っていられる様になったけど、逆に「周りが圧力を感じているみたいなので押さえ気味に切り替えて下さい」と、焦るヒノンから忠告されたのだ。

どうやら神気の強すぎる存在の近くに居ると魂が押し潰され、精神にダメージを負うそうだ。

酷いと自我の崩壊とか。

こりゃ、これからも押さえ気味にせにやらんみたいね。

興奮は冷めない様だけど、ざわつきが収まったのを感じてこれからの展望としての話をする。

まず村を一度取り壊し、新たに区画整理と人数分の家の建て増し、神殿と露天風呂・錬金工房の建設・陣による神聖結界の設置をしたいと思つて居ることを告げる。

更地にすると言う所で多少、反対の声が出たが、財産の保障の約束をすると確約する事で納得してくれた様だ。

更に他所に親族があつて連れてきたい場合、申請してくれたら受け入れるとも言つておく。

にわかに活気付いて来たのを見計らい、これからここを中心にした邪気避けの結界を張りに行くと告げて祝詞を紡ぎ、聖印の巨大版を地に突き立て、ヘイルに跨がり飛翔。

これが完成すれば中位の魔物や邪霊、アンデットの侵入を阻止出来る事を告げる。

多分、これは俺の教義の特殊魔法で規模こそ小さくなるだろうが、信徒にも使えるようになるとも告げると商人系の村人がやる気を出していた。

背後の岩盤を迂回し、まずは基点として北を目指す。

風を切り裂き、岩の平原や川・幾つかの地底森林を飛び越える。
久々に二人でする全力飛行は存外に面白かった。

そのままの勢いで日に二本づつ八方位に中程度の聖印を穿つていく旅。

飛んでみて知ったこの地の周辺には、意外にも有用な土地が多いのを知り気分は上々、最後はゆっくりと飛んで村の聖印に戻る。

この頃には既にシヤスティア王子と魔導騎士達も村に着いており、早くも民家の撤去を始めてくれていたらしい。

疲労はあるが最初の聖印に触れ、追加の祝詞を紡ぎ陣を張る。

各方位から波動が伝い成功を教える。

多分、遠くでは中継地を繋ぐ点が円になり、川となり、東西南北よりこちらに向かつて水が流れてきている筈だ。

中心に到達する迄は魔術干渉をしていなくては為らないが会話位なら出来る。

しばし待ちながら出向いてきた王子と魔道騎士達に挨拶と区画整理に関する話し合いを始める。

ボグラがしゃちほこばって「疲労回復の魔術をかけさせて下さい

！』と来たが、どんな魔術干涉があるかわからないからと断つたり。

程なくして襲い来る水。

怖がる村人を宥め俺の元に水流が合流、より一層に陣が輝き流れて来た水は巻き上がり円を描きながら聖印のアクアマリンに吸い込まれていく。

半月もかけた術式は無事成功！

これでアンデット・魔物対策は万全だに近くなった。

この術は俺の教団『エバンニド教』の売りになるだろう。

これは流石に、反則技じゃあ無いだろうか？

帰還2日目。

整地やら区画整理は王子達に任せて、俺はヒノンと神殿の構想について話し合っていた。

場所は工房の隣り、仮説住宅内。

仮説と言っても、会議にも使うので室内は広くしっかりした造りにしてある。

「うむむむむ……」

そんな中、男二人して唸る事30分あまり。

なんでか？

即ち、神殿建設に使う建材で悩んでいるのだ。

神都の象徴にしようと考えてるので派手に目立つ様にしたいよね？とか話してるんだが、結局は堅実で地味な方に話が行ってしまう。

いっそ水でも遡らせるか？とか言っても実用に耐えられる素材も無いし微妙……、御影石などを使っても良いが磨耗や劣化が早い

らしいのだ、修理に奔走するのは本意では無い。

神らしく手早く他の神域を真似るにも、そもそも人の気が多すぎて俗っぽく、神性を保てないので神域の概念を借りる事も難しい。ちなみに神域の概念とは、『何者にも荒らされない』だとか『火気禁止』など空間や物に条件付けする神の使う神技の事だ。

なら、神域に住み込めば神域を消せるのか？　なんて問いが出るけども答えは「Yes」だ。

しかし、普通は『隔絶』の概念を組み込むから意味の無い問いでもある。

一しきり唸る俺達に隅で大人しくしていたイシスから「普通に大理石や白石じゃ駄目？」と指摘され困る。

駄目では無いが、なんか……こう……負けた気がすんだらう。

発想を逆転して、ひたすらゴツイ岩盤で塔を建てるのもインパクトと言う点では良いけど、如何せん地味だ。

「水で家が作れたらカッコいいかも？」

ぽそつと、イシスがさり気無く言い放った台詞にヒノンが雷に撃たれたようにガクブルする程喰い付いた！

「イシス嬢、それだ！」

ビシッと指差し確認のポーズで言い放つ、心なしか劇画調に見えるよ、あーた。

それよりそんな事出来るんだろうか？

「私が昔に読み漁った文献にネタとしてあったのを思い出しましたぞ！」

「しかし、我が神なら出来るかもしれませんぞ！」とのヒノンの言。

方法としては水に形を与えて、それが本来の形だと勘違いさせる
と言う理論らしい……、なんて暴力的なんだジーザス。

神技としては無理だけど、術式だけなら錬金術で使う祝詞でやってやれ無くは無い、かな？

駄目元でやってみようって事で工房へ移動。

こつち来て整理もして無いからまずは片付けを始めたんだけど、
師匠の忘れ去られた作品が幾つか出てきた『解析』かけてみたいが
今は我慢。

術に使う祝詞としては『有るべき物は、在るべき場所へ』の変型
で『有るからには、在るべきか』を挟む感じでまずは発動してみる。
水が集まり箱型なり、その周りを祝詞文字が輪になり巡る。

吹き荒れる風や紫電がひるがえり、一応は形になったけど干渉力
だけでは成立出来ず、まとまった後に数秒で崩れた。

けど、全く無駄では無いらしい……、興奮してきたぞ！
もっと強い言葉『在るからには、有るのが当然』から始まる陣で
絞りこんでみたら固定時間が増えた！！

なんてやりながら繰り返す。

… 1回目。

…… 2回目。

……… 3回目。

…………… エンドレス。

延々と繰り返される失敗の2日間。

膨大な数の試行錯誤を試してみたけど、結果は必ず僅差で失敗する。

「何故だー!!」

心が折れそう、流石にやる気が萎えかけていた時、休憩がてらい
シスに構いに来ていたエミリオが「神聖魔法使うみたいに神気とや
らで錬金術とか使えないのか？」と聞いてきた。

俺もヒノンも目が点……。

むしろ盲点だったかとも思ったけど、何で魔法の苦手な君からヒントが出る！？ 八つ当たり寸前の俺達に、竜言語魔法は魔力じゃなくて気で使うからとか言ってたな。

兎に角やってみよう・そうしようと、さっきの要領でバンバン試してバンバンやり直す。

魔力を使っている時とは違って毎回、陣が失われるのは煩わしいけど確かな手応えが有る。

時間を忘れて繰り返し返す事また数日、神成らぬ身のヒノンには疲労の気配が濃く漂う。

入れ替わり立ち代り報告や見学に来る者も多かったけど、鬼気迫る俺達に直ぐに出て行ってしまう。

尋常じゃない俺達の根の詰め様に呆れた魔道騎士副団長のアハゼンさんが「こんな暗い部屋では不健康です。少し休んでは如何ですか？」と心配しながら『明かり』の魔術を灯す。

場が歪む。

「おお、馬鹿野郎！！」思わず汚い言葉が出る……、続けて次の術を発動してしまっていた俺の陣と彼女の『明かり』の術の魔術干渉が火花と紫電を散らし世界が荒れ狂う。

こんな狭い部屋で使って良い力では無い。

悲鳴を上げる彼女を庇い、黄金の左腕を盾にして余波をやり過ぎた先、小さな静電気がジリジリ言う陣の上にコロんと水の石が乗っていた……。

平謝りする彼女に曖昧な返事をして全員下がらせ、偶然出来上がった一つを手にあれこれと手を加え陣の構成を読み、可能性の欠片を拾い集めて最終的には破壊してみたりもした。

そして……「完成した！！」ヒノンを呼び出し実行して見せる。

片手に魔術と神気を集め慎重に合成、祝詞を紡ぎ陣に力を流す。

『水 はるか 神性 求むるは 在らざるを弄う なら在る 去る
ならば 有れ！』

完全な力業だけど問題無い、不敵に笑って見せる。

周囲から水が集まり、空想の鑄型により四角くなり水の塊がコロコロと落ちる。

大きさは両手で抱えられる位、中心に丸い陣が浮かんでいるが解析は出来ないだろう。

と言うか、俺や神位にしか見えない筈。

水には仄かに青色が着いているが、質感は固形物で軽く冷たい。割ってみても石の様な割れ方で液体にはならないし、流れ出さない。

強度は鋼には勝てないけど鉄に近い硬度であるらしい、この辺は『解析』済みだ。

面白いのでこれで神殿を建てよう！ と押し付ける。

鼻息荒く。

「これは国の名産になるんじゃないですかな！？」とヒノンが息巻いていた。

おもむろに、別バージョン海水を使い硬度を下げたものを作る事にも成功と、奥から深い青緑の石も差し出す。

舐めてみる様に言うと、少し躊躇ったが「しょっぱっ！」と驚いていた。

地底でありながら塩に近い物が出来たし、取り敢えず各家庭に配るべく大量生産に入るかな。

売るかどうかは後で決めよう、そうしよう♪

これは引抜じゃないですか？　いいえ、神の意思です。

最近はずっと工房に籠って、水石と蒼海石と名付けたトンデモ石の改良と量産ばかりやっていたから、時間の流れがとても早く感じた。

岩大工達が引いた設計図に必要な数の水石も揃ったし、蒼海石も各家庭に配っても余るくらいの備蓄も出来た。

「あんまり根を詰めないで下さいね！」
と毎日アハゼンさんからは小言を貰っている。

気にしていない風を装っていても、この前の魔力干渉事件がトラウマになっているんだろう事は想像に難くない。

「わかっていますよ」
笑顔と共にお茶を頂いて鷹揚に頷いておく。

実際、本当に一段落ついたので今日は久方ぶりに自分用の武器を錬成しようと暇を作っていたのだ。

今回作るのはミスリル材のグレートソードをギミックソード化した大剣だ。

繋ぎのリング部分を二枚噛ませ水石の円盤を組み込み繋ぎとし

て機能させる。

水石は神気に反応し易いので相性も良い。

そこに神気を流す事で刀身が百足のように割れ開き、刃のある長鞭になるようにイメージして錬金術を行使する。

朗々と響く詠唱の末、程なく錬成の電光を纏ったグレートソードが完成した。

肩に乗っているヘイルと笑い合う。

このくらいの錬成は既に朝飯前で作れる様になったのだから感慨深い物だね。

出来たばかりのグレートソードを片手に工房の前の空き地に移動し一通りの斬撃や切り上げ、突きなどの動作を繰り返す。

調子の悪い場所や重心などをチヨイチヨイと調整。
鞭形態にしては調整と軽い直しを根気よく続ける。

始めに付けていた鰐は真っ直ぐで幅広だったけど、鞭形態の使い勝手との兼ね合いで竖琴の様なフォルムに落ち着いた。

銘は『ウルスラグナ』

勝利を司り、「障害を打ち破る者」と言う側面を持つらしい異界の神の名。

スケジュール通り、昼には作品を完成させる事が出来たので大きく様変わりした村の様子を見守って居ると、偶然王子と会った。

「今日のお勤めはもう良いんですか？」

今は人前なので化け猫かぶりモード全開……、笑顔が怖い。

如何に俺が頑張ったかアピールは年相応で可愛らしいのにな。

苦笑しつつ「必要な分の建材は用意済みだ」と言っと、「整地と区画整理も終了しました！ 次はもう建設に着手予定です」と誇らし気に今度はヒノンの元に報告に向かって事務部屋へ走って行った。

元気なもんだ……土魔術が得意と言っただけあつて仕事が早くて丁寧で助かる。

現在の村は俺の陣術により広場を中心に十字に川が出来てしまったので、それぞれをブロック分けした状態で。

北を北西、北東ブロック。

正門側を南西、南東ブロックの4つとし中心が大聖印となっている。

今迄居た工房の位置は北西ブロックの岩山側の外れに位置していて人氣が無い。

以前の邪魔だった洞窟のある岩山を切り崩し中を更に広く、内部の拡張を行って、中の古い民家を撤去して外にある民家は残して工事の間、みんなにシェアして住んで貰い共同生活中。

背後をつかれた裏門方向は、鉄製の頑丈な扉で封鎖して水門の様になったらしい。

基本、入村は正門からのみに変更になり。

急な坂もなだらかな坂に作り替え中心の大きな道を中央路命名して左右に商店区画、大聖印周辺は前と同じく広場に、くり貫いた岩

棚の上下を階層で繋ぎ、主に住民の新しい居住区となる。

水神神殿は吹き抜けの中にピッタリはまるように作るので外観は塔のようになる予定だそうだ。

勿論の事、外壁はすべて水石を使用予定。

更に商店区画から外周は、岩を土に作り替えて畑にする予定も有るとか。

更に建国宣言の後に直ぐイストフラロウスに飛び、温泉大工になったルビーさんにこの国で温泉を作って貰う契約も結んである。

残念ながら入信の勧誘はサラツとかわされてしまったが、こうやって目にみえる成果が現れる度に沈みがちだった村人にも笑顔が浮かぶ回数も増えた。

今はまたイストフラロウスに出向き、俺の治療をしてくれた医者とアネットを村に呼ばうと画策中だったりする。

ちなみに、村人の知人の呼び寄せや噂を聞いてやって来た孤児や難民も受け入れている関係で人口が倍ほどになり町と言っても良い規模になっている。

事務部屋を覗き、ヒノン達に暫く出る事を告げ撤去段階で出た廃材を錬金術で建材に作り替え、水神魔法で洗淨だけで済む物は洗って再利用材にしてしまう。

そのまま、ふらつと移送陣でイストフラロウスへ到着。

なんてお手軽なんでしょう移送陣。

今回は療養中だったのであまり堪能出来なかったけど後で散策しようと思つた。以前お邪魔した自治軍に顔を出す。

今回は神気を纏った状態での訪問だ。

気圧される翼人に申し訳ないと思ひながらも、トップとの面会を希望する。

最初は「アポ無しでの訪問は困ります」の一点張りだったけど、為政者に伝わったみたいで特別に奥に通された。

「ようこそイストフラウスへ」

前にも触れたと思うけどこの都市は自治軍による議会制を導入していて、身分に係無く優秀な人族が治めている。

確か今は翼人の穏健派筆頭、オウル・イーグルが務めていたと思う。

目の前に居るのが、正にオウルその人だったようだ。

彼は名前からもわかる通りに「鷹」の因子持ちの翼人族で鋭くシユツとした容貌の持ち主だ。

う……羨ましくないぞww

まだ俺はハウルベルの守護神でしか無いので、取り敢えず挨拶と顔合わせに來た事を話し、お互いの交流と協力を強化する方向で話

を纏めとくか。

元々ハウルベルとイストフラロウスは友好国だしね。

予想外だったのは以前、「暗視ゴーグル」をお礼であげた翼人騎士が自治軍内でメキメキと戦価を上げてるらしく、俺が出所だとはれたらしい。

案外、鳥目の特徴持ちが多く、「あれが有れば俺だって!」と良くない注目を浴びているそうだ。

お互い悪い話じゃ無し、大量に都合出来ないかと打診されたので、国経由で正式に依頼して貰えれば適正価格で販売しても良いと答えた。ただ働きはいかんねw

話が長引き、夕食の誘いまで頂いてしまったので辞退してもう一つの目的地へ。

断ったのはイストフラロウスの作法で夕食の誘いは「私を信用してくれないか?」の暗喩だったりもするからんだけどね……考えすぎかな?

「コンコン……」

年季の入った木戸を叩く。

「エバン……さん？」

流石に驚いてるな。

「久しぶり、アネット」

何だか普通の人に会うのが久しぶり過ぎて若干照れ臭い。

すると突然、不意打ちに泣かれてオロオロしながら目線を辿ると左腕を見ていた。

「治ったんですね〜！」と走ってきたアネットが目の前で急に消失。
テンプレ乙とか思いながら転んだアネットを助け起こしてやる。
お約束を外さない人だな〜。

改めて再開を祝いながら「俺、神様になったから」って神気を薄く纏ったら……、「他の患者さんに負担がかかるから止めてあげて下さい」と間髪入れずに嗜められた。

貴重な人材だ……。

本来は医者のじいさんだけ勧誘しようかと思ってたけど気が変わ

った。

アネットも連れて帰る（断言！）。

そして、ここは勝手知ったる他人の家。

診察室に居るであろうじいさんの所に行つて、移住と入信の勧誘を切り出す。

俺の神気に冗談では無い本気を悟ってくれたみたいでとても悩んでいたが、俺の提示する可能性。

神聖水神魔法には治療術が存在する事。

軽症の者は今すぐ俺が癒し、重傷者も引き受ける用意がある事を話したら少し傾いた。

駄目押しで今後の開発で露天風呂を作る予定なのと、「亜空間バツグ」の改造もおまけしてやる事にしたらやっと折れてくれた。

本当は悩んじゃいないくせに、この天邪鬼じじいめ。

何だかほっこりしたぜw

青い空・果ての無い地平線

「おはようございます、アネットです」

私達は今、高く青い空の下、落ち葉の絨毯を二人で歩いている所です。

お相手はエバンさん。

間違ってもお爺ちゃんじゃないんですからね♪

昨日、いきなり訪れたエバンさんにも驚きましたけど、私に何の相談もなくエバンさんの国で暮らすなんて話になっていて本当に驚きました!!

そうそう！ 驚き繋がりなのはエバンさんって実は神様だったって事の方が私個人としては大きかったです！（だって、無礼な事沢山しちゃってるし）

でもでも、あの時は半神様だったって言ってたからセーフですよ
ね？

そうだったら、そうなんですよ。
恐れ多くてガクブルしまふが。

けど、仮面の無いエバンさんはとっても綺麗でドキドキしちゃいます。

私より美人さんなんて反則です。

そんなエバンさんに再開してから3日目。

昨日は「国に連れ帰る事が決まった」とか言う無茶振りのお詫びに1日デートと言う事でイストフラロウスを見て回りました。

えへ、エバンさん独り占め

詳細については恥ずかしいので割愛しますが何もありませんでしたよ？

トラブルなんて無かった！

…… 本当ですよ？

一回だけ転んじやいましたけど笑ってたし無問題ですよ？

そんな事よりお爺ちゃんの準備が出来次第、エバンさんの国・エバンニド教国の神都リヴァイアに向かう予定なんですけど、入院患

者さんで身寄りの無い方や希望者の方々も一緒に移動になったので
実は大事になってます。

生活困難者の食料や装備はエバンさん持ちらしいので、少し大きな団体になっちゃってますです。

護衛等もギルドに募集をかけたそうで、すぐ移動出来ないなら外の世界を見てみたいと言うエバンさんに私はついてきちゃいました。

そんな訳で、今は地上の大穴に一番近い町ゴインゴの近くまで来ました。

こっちの季節も下とあまり変わらない様で秋晴れです。

尤も、初めて秋晴れを目にしたエバンさんは随分楽しそう♪

道中、体力の無い私は背中の中翼でフワフワしながら、魔物の襲撃が来た時は高めに逃げてエバンさんが倒してくれるのを眺めています。それにしてもエバンさん背小さいのに、よくもあんなに大きな剣を振り回せますねー？

私には持つ事も出来なさそう。

時々、ヘイルさんも援護の雷を飛ばしたりしてあっという間に片付けちゃってますけど、お二人ともとても強い。

雷飛ばすのも何回見ても凄いです。

危な気無くゴインゴの町までやってきた私達。

防壁もさらつと行こうとしたら門番の態度が良くないのです！

仮にも神様になんたる仕打ちと抗議しかけたら、＜静かに＞のジエスチャーで首を振っていた。

2人はなんかこそこそ話した後、不自然に仲良くなったんですけどなんでしよう？

何はともあれ、無事、日暮れ前には町の中に入る事が出来て安心しました。

庶民に魔物のいる場所は酷ですよ。

けど時間は有限。

少し疲れてましたけど2人で材木屋さんに始まり、食料品店や武器防具屋、妖しい魔道具屋にパン屋など目まぐるしくお店を見て回って最後の石材屋にエバンさんの造った水石を卸したとたん本当に驚かれて、産地やら製法とか（商談っていうんでしたっけ？）に発展。

私、比較的に側で聞いてたんですけど、全く話がわかりませんでした。

エバンさんは満足気な顔をしていたので上手くいったのがわかっただけでした。

次にさつき行った食材屋がこの町最大の問屋だとかでまた出向いたんですが、さつき、食材屋と魔道具屋にだけエバンさんが小袋に青い石の欠片を入れて買い取りの話をしていたんですけど、その時は反応が薄かった2店から、今度は熱烈な欲しいコールが出てました。

なんで？って顔していたら、エバンさんは「品定めする時間をあげただけだよ」って言ってましたけど、エバンさん……なんだか、性格悪くなってないですか？

心配です、私。

ちょっとモヤモヤします。

油断大敵？

くると表情が変わる、アネットの百面相を見てるのも楽しかったけど、地上って広いね！！

頭上に屋根が無いのは少し怖いけど気持ちが良い。

ヘイルはウズウズしながら青い空を飛びたそうにしてるけど頭を撫でてやるにとどめた。

時間が残れば俺も飛びたいのだ。

俺達は一般人を連れてるにしてはさっくり、旅程を消化。

夕方頃についた町・ゴインゴは運輸の町だそうで、ここから幾つかの都市に商品を海上輸送する商会の力で発展してきた背景があるみたい。

当然、商人の地位が高いらしい。

背後に見える町並みはごちゃごちゃしていて、俺達みたいな初見さんは直ぐに迷子になれる程入り組んでいて、町中なのに危険区域では魔物が出る事もあるそう。

不思議な町だね。

着いて早々、門番の態度がアネットの逆鱗に触れるなんてイベントもあつたけど、今は目立ちたくない。

ここは賄賂を渡して門番に話をつけ黙らせたけど、渡した賄賂は少し多かつたらしく彼の持っていた地図を懷にねじ込まれた。

「サービスだお登りさん」

だとさ……、大胆ですな兄さん。

少し驚いたけど、有効に使わせてもらって今夜の宿を確保した訳だ。

今回選んだのは『勇ましき回遊魚』と言う中位の荒くれ宿。

好き勝手増築した歪な3階建ての長屋風で、内装には何らかの統一感が見られた。

話した感じマイペースだけど悪い店主でも無さそうに感じたので滞在中の宿はここに決めて、疲れのみえるアネットを休ませる事にした。

護衛にヘイルもつけるから完璧だろう。

俺はもう少し見て回リたかったので再度、町に出た。

やはり地上の町だからか普通に人間族が多い、がちらはら他種族の姿も見かけ活気に溢れている。

治安は参考に出来ないけど、このエネルギーは悪くない。

調子良く最初にまわった様に少し危険な区域の店も見えてまわったけど、こっちは奴隷とか色売屋や賭場ばかりで今の俺には意味がないと見切りをつけて帰ろうとした矢先、不穏な気配がした。

隠れてるつもりの奴等が数人確認出来る。

仮面をしてない地底人は目立つのか力もられそうな雰囲気だ。

具体的に言っていると誘拐されそう（笑）

神族誘拐とか舐めてるでしょう？　ここは脅しとくか……。

こんな所で暴れても被害が凄い事になりそうだったから逃げる用意。

振り向きざま左の手をかざし、攻性錬金術『剣舞たる黒子』ソード・グレイブを発動。

短い祝詞に左手が過剰に反応し、何時もより力を入れてないのに術がすんなりと発動……。

もはや、新しい左腕は攻性錬金術にボーナスが付いてるのかな？
予定より凶悪さを増した術により地と言わず壁と言わずあらゆる
空間からエバンの知る限りの刀剣のレプリカ、巨大化版が発生点を
起点に垂直に突き出され一定時間存在しては消えていく。

それはさながら剣の檻。

発動位置を調整してあるから追手を無残にハリネズミにはしてない、酷い有り様なのは気のせいにして身体強化のスイッチを頭の中に入れて、ふわりと跳び上がる。

一息で狭い路地を駆け抜け、壁を蹴りながら中空を行く俺は障害物を気にしない為とても早く。

後続の暫定・悪人残党は散乱するゴミやら樽やら木箱やらに拒まれぐんぐん離されていく。

やはり治安はあまり良くない様だと再確認する材料にはなったから今回は多めに見てやるう。

概ね流通の種は撒いてこれたから、今回はこれくらいにして下に戻りますか。

そんな軽い油断もあつたせいか別働隊に気付かずに弓矢の一撃が当たりかけ、咄嗟に左手をマントごと振り捌き矢を弾く。

響く硬質な音……、金の腕を見られたかもね？

気持ち切り替え亜空間バックから直接抜き身のギミックグレスを引っ張り出し、いきなり鞭化してスピードを緩めずに回転切りを叩きつけてやる。

石壁に刀身がこすれ火花を散らし、鋼が捕らえた相手は4人程。

何故かちゃんと訓練を受けた戦士の様な動きをしていて胡散臭い男女。

回り込んでくる刃に耐性が無い様で、巻き戻った刃で軽症を与えられたが微々たる物。

殺す気も薄いので、俺はまた壁を蹴り迷路の屋上へ逃れる。
すかさず、こっちにも『剣舞たる黒子』ソード・グレイフを発動。

一目散に宿へ向かう。

「おっと！ 忘れずに移送陣繋げとかなきゃな」

思い出し、ぐんつと更に高所へ蹴り上がりゴインゴで一番高い鐘楼塔の到達出来ない更に屋上に移送陣を設置しておいた。

少し不本意だけど、当面の地上への移動ルートはこの町からになりそうな予感。

護衛と移民団

物騒だね、ゴインゴ。

地下世界に戻って来た俺達は医者の方の皆さんの病院に帰りついてすぐ、護衛の応募があったと教えてくれた。

依頼料は俺持ちだけど、場所が無いのでこの病院の一室を面接場所に借り受けギルドに通達。

「さて、どんなのが来るかな？」

と内心楽しみにしていたのに、来たのは1組だけ。

職員が言うには応募自体は報酬に釣られて、掲載してすぐに5組程来たらしいけど、病人や怪我人、果てははぐれ魔族に浮浪児なども居る事に難色を示して辞退したそうだ。

所謂、差別ってやつだな。

何とも心の狭いこと……。

まあ、残ってくれたパーティーも異色と言えるから、一般的な感

覚として、そう言うものなんだろうと納得しておく。

さて、依頼を受けてくれたパーティーのメンバー構成は前衛らしい男性が2人で後衛女性が2人……、少し人数が少ないけどバランスは及第点。

まずは如何にも「俺、戦士です！」な青年ケロル。
種族は人間族で底抜けに明るい雰囲気を持つ短髪青年、ポールハ
ンマーに寄りかかっている。

もう一人は猫科の魔族、幼い感じの顔立ち、周りから一歩引いた
印象を受けた、格好は軽装の革鎧で武器は見当たらない。
多分、格闘家なんだろう、しなやかな筋肉が見て取れる。
彼はサジェと言うそうだ。

二人の後ろに隠れる様にしているのが、地底人の女魔術師 アネ
モネ。

初級〜中級の術を使えるそうだ。

得意属性は風。

野暮つたいローブと大きなレンズの仮面で印象が悪いが、のぞく
顔のパーツから可愛い容姿をしているっぽい事が窺える。

最後に、火神の加護を受ける翼人の女ハンターのアナ。
セキレイに似た顔立ちで愛嬌があるスレンダー体系。

白い翼と硬そうな革鎧、折り畳まれた弓を持っている。
4人の中で一番冒険者のな格好かもしれないな。

みんなバラバラの年齢に見えたけど、同じくらいだそうだな。
むしろ、俺と同年代くらいかな。

経験の面で少し不安だけど今は即戦力が有難い。
勿論、翼人のアンナには暗視ゴーグルを渡しておく。

成功した暁には、追加報酬としてゴーグルを譲る約束もした事で
俄然やる気が出たみたいだ。

実際集まった人間を見るに、予想はしていたけど何人かは酷い身
なりで、かえって病気になるような塩梅だったのには参った。

少し進んだ街道の外れに泉があるので立ち寄る様に指示して護衛
隊に先攻して貰う、俺は殿担当でヘイルは子供や女性を集めた真ん
中らへんに寄り添って歩いている。

半日ほど歩き件の泉へ。

まずは、簡単な結界をアネモネに教えて行使して貰う。
簡単な結界だけど、普通は他人に無料で教えたりしないが、あの
頃の俺に重なって見えてつい世話を焼いてしまう。

それはまあ、置いておいて……、まずは昼食にしようと巨大な鍋をバックから取りだし簡易かまどに設置、これ幸いとアンナに火をつけて貰う。

移民の中からも手伝いとして、料理の腕のある方々にはお任せして俺は神聖水神魔法『クリエイト・ウォーター水作成』で井戸代わりになり、雑用したりと時間を潰す。

ちなみに、この水は聖水だったりするが恐れ多いとか言って使わなそうだから皆には内緒。

完成した料理は、野菜のゴロゴロ入った水炊きの様なもので量も多く大変美味しかった。

欠食児童や女性を優先して食べさせ、今度は普通の造りの服を希望者に配布していく。

思わぬ高待遇に泣いている子らも居るが、今はそのままに取り敢えず数時間だけ持つ簡単な風呂を錬金術で作り、男女交代で入って貰った。

それから数日間、皆この雰囲気慣れてきたみたいであちこちで声の掛け合い、助け合いが見られるようになり、なんだか同じ町でやっていけそうに見えてきた。

喜ばしい事だ。

護衛の彼らも道中、危険の少ない魔物の襲撃が2、3あったけど慣れない広範囲の防御も一生懸命やってくれていた。

ケロルが「もう、俺、腹へった」。歩くのシンドイお」などと、おどければ「人の3倍食ってんだろ、働け！」なんてアンナにやられたりと漫才の様な掛け合いで疲れたムードの緩和にもなつて彼らも移民達と親しくなつていく。

旅立ちの頃の再現よろしく、見知った町や村を経由してずんずん進む。

移動中も地味に信者も増えて来た。

けれど、やっぱりと言うか、安全地帯まで後一日と言う地点の洞窟道を封鎖するように陣取る巨大な魔物に遭遇。

その巨体はしいて表すなら足の無いトカゲ、尤も肥大した腕と縦に開く脛が生理的な嫌悪感と呼び覚ます事請け合い。

事前取り決め通り移民団を素早く下がらせ、俺とヘイルでガードしながら護衛4人が前に出る。

その特徴からアルケオ・シザードンだと看破した俺は、奴は尾の肉に鉄を隠していて不利になると途端に振りかざしてくる事。

ぞろりと生えた鋭い牙の後ろにもう一列歯があり、噛まれると遅行性の神経毒を注入されるから避けるか防ぐように指示を出す。

「ありがてえ」

と言いながら、まずはケロルがハンマーで打ちかかるが空振り。

「ケロル君、遅いんだから支援を待つて！」フィジカルブースト『肉体強化！』」

アネモネからの叱責に「おいっす！」とか言いながらハンマーを持ち直し、横に振り切りながら後方に回転……、正に噛み付こうとするアギトに重い一撃を打ち据える。

体ごと吹き飛ぶ頭部が岩壁に当たりダメージを増す。

チャンスを生かすべく展開した弓を構え神聖火神魔法『炎の矢』を放つアンナ。

爆炎が花開き地を焦がすが奇跡的に僅かに避けられた。

そこを更に救い上げるようにアネモネの『風刃』が炎を巻き込みシザードンの切り傷を焼き焦がす。

炎を嫌ったのアクロバットステップから鉄攻撃を繰り出すシザードン。

標的は前衛2人……、ケロルが受け損ね、転倒。

追い討ちの噛み付きを、攻撃を受け流し間に滑り込んだサジェが合気でもってシザードンを投げ飛ばす。

宙を舞う巨体……、生命の危機に逃走に移る奴は2本しかない腕で移動してるのにやたらと早い。

正直、気持ち悪い！

逃げる後姿にアンナの十八番『ファイアボール爆裂火球』が飛び止めを刺した。
全員、大きな怪我也無く、治療と剥ぎ取りに移ろうとした彼らに
もう一体隠れていたシザードンが上階から飛び降り4人を弾き飛ば
す。

広場に踊りだすアルケオ・シザードン。
今回は警戒していた俺とヘイルが同時に動き、空からの『氷雷撃』
と下からの『ウォーターピラー』の挟み撃ちで胴体を貫通。

いち早く立ち直ったサジエが飛び込み前転踵落として首の骨を粉
砕した。

今回は油断から不意打ちを受けてしまったけど死人が出なかった
から良ししよう。

もう目の前にはうつすらと結界の川が見えるし、これ以上悪い事
は起きなさそうだ。

『ハングリー バグズリー』

- サイド・アネモネ -

「ねえ、ケロル君…… もう食費が無いよ？」

普段は元気印がトレードマークのケロルも神妙な顔をしていた。

ここはイストフラロウスの中層に位置する冒険者ギルド<シルフの宿り木>亭。

最近はお金の種となる情報が少なく、盗賊系の仲間が居ない私達は上手い情報を得るのが遅く、少しひもじい生活になってしまっている。

こうして、ただギルドに張り付いて新しい依頼が無いか探す毎日。地味に精神を削ってくるから侮れないと最近実感する事ひとしおな日々。

そう言う私はこのパーティー『ハングリー バグズリー』の女魔

術師でアネモネと言うの。

他には大食いの元氣マン、ケロル君。

引っ込み思案な猫魔族、サジエ君と負けん気の強い翼人アンナちゃん、私達四人だけのパーティー！。

私達は先日やっと一人前と認められるCランクに昇格したばかりで兎に角お金が無かった。

昇格するには試験に受かる必要があるんだけど、試験を受ける為にはそれなりの礼金が必用なのよね。

そんな事を5日も続けた明くる日。

珍しくアンナちゃんが興奮気味で依頼用紙を持ってくるもんだから私達も興味を引かれて卓に集まる。

「ここ最近にしては割りの良い仕事じゃないか!？」
アンナちゃん力み過ぎ。

苦笑とともに内容を読み進めた私も興奮するくらいの報酬がそこには書かれていたの。

曰く、

「団体の護衛だけで金、10万札」

「期間は長くて2週間」

「こちらと合同で良ければ、3食支給……夜間見張りはあり」

「Cランク以上推奨」となっていた。

依頼主はエバン・ニードとある。

これははつきり言って破格だ。

「凄いの見付けたね、アンナちゃん！」

手を取り合ってうつとりする私達に「少し怪しくないか？」と水を指すようなサジェ君の物言いに私達も少し不安になったけど、ケロル君の「こまけーこたあ良いんだよ、ヤバけりゃーけつ巻くって逃げちまえば良いさ」の言葉でやる気だけは出てきた。

サジェ君だけは、「またか」って顔してるけど、二人の方が知り合って長いのだから慣れたものじゃないのかしら？

「決まりだね！！」

この流れで来たら、即決しかウチらには無いのだとか言い聞かせながら書類を提出した。

「えーと……、丘の裾の病院だったよね？」

あまり来たことの無い上部の町並みをアンナちゃんの先導で面接場所に向かう。

中層から下がごちゃごちゃと雑多なせいか、綺麗に揃えられた家々や高層建築に目が奪われ落ち着かない。

日光の下って事で、今日は更に念入りに着込んでいるから暑くて困る。

……そう、私は地底人だからこんなに強い日差しだと肌を火傷してしまうのだ。

ちなみに私達のパーティーの名前の後半、＜バグズリー＞は私の格好から来てるみたい。

母から譲り受けた丸眼鏡のはまった仮面と重ね着ローブでストーンとした体型に見え、私自体のあだ名も＜バグズ＞なのよね。

女の子にこんな名前付けちゃう感性が嫌になっちゃう。

あ、そんな事より、初めて会う依頼主のエバンさんは私達とあまり年齢が変わらない様に見えるのに上等な術師然としたローブを纏っていて、うっすらとプレッシャーを出していて怖いくらいだった。

肌の色などから同じ地底人の特徴が見えるのに仮面も付けて無く、炎天下の日差しでも平然としているのも不思議な印象として脳裏に残った。

中に招かれた私達はギルドでするみたいで基本的な質問の後、今回の護衛がかなりの団体で差別層を含むと聞いた時は少し嫌だなんて思ってた事を、仕事を終えた今は申し訳無く思うようになった。

後で聞いた話だと、他に5組も応募があったそうだけど、皆辞退したみたい。

勿体無いよねって思うわ。

道中、結構際どい戦闘や凡ミスがいくつもあったり、お世辞にも完遂したとか言えない旅だったけど、死人を出す事も無く、誰も飢えること無くエバンさんの国に着く事が出来た。

報酬とか関係無く良かったと心底、思えた。

私の価値観はこの旅で間違いなく変わったって言うから、凄いい心の財産になったの。

術師としても、錬金術からの祝詞のアプローチとか魔術の生活への組み込み方とか、神聖語での祝詞の魔術転用とかエバンさんの発想はぶっ飛んでたけど、1番は彼が王様で神様だった事だと思うのよね、結局。

実を言うと、彼との縁が本当に大切な報酬だったって事は私達

ハングリー バグズリー』 にとっての共通認識なんだ。

帰還

結界の川を越え3時間も歩いただろうか？

地面が岩場じゃあ無くなり、完全な土に置き換わり出した。

俺が出発する前はまだ見渡す限り岩場だったので土魔法でわざわざ均してくれたんだろう。

術式はわからないけど、間違いなく王子達の仕事だと思う……ご苦労様だな。

初めて踏む柔らかい土。

地上の道の様な地面は足に馴染み歩きやすい。

最初はおっかなびっくりだったけど、慣れない長距離移動で移民さん達も疲れが隠せなくなってきたので有難がっていた。

なまじ肉体が強くなったせいかな、こう言う配慮に欠ける事が多くなっているからね。

反省材料・1。

思いつく限り負担にならない様に、且つ脅威度の高い魔物を迂回したり皆の体調によつて当初より移動速度を下げたりと、2週間の予定だったけど実際には3週間にも及ぶ旅程になってしまっていた。

今度はもう少し余裕を見て予定を組まないとな。

反省材料・2・

幸い、冒険者達の護衛期間の延長も追加報酬で受け入れてもらえたので助かった。

現金か現物支給か提示したら悩んでいた様だけど現物支給を選択……、俺はマジックアイテムを各自に渡す事で決定にした。

ケロルには『機敏の腕輪』と言う速さ補正のリング。

サジエには『サイコミュ』と言う精神力補正護符を、アネモネには『頑健の指輪』と言う肉体補正の指輪。

「これで人並みに強い肌になる筈だから厚着しなくても良いよ？」
と言ったら泣いて喜んでたな。

最後、アンナには前約束通り『暗視ゴーグル』の更に高品質版で手を打って貰った。

俺的にはランクのあまり高くない物だが普通には手に入りにくいアイテムだし、パーティーの生存力も大分上がった筈……。

何だかんだ言って気に入ってしまったので彼等には生きて活躍して貰いたいもんだしな。

順調に暫く歩くと土の道が分けられ、畑の準備がされているのに気が付いた。

この辺になるとちらほら農民の顔も見えだし、俺達に手を振ったり、「お帰りなさい！」と声をかけてくれたりが嬉しい。やっと我が家に帰ってきた気がする。

発展してきた村を見ながら、歩く前方中央に遂に総水石造りの神殿塔が見える。

中に発光物があるのか、全体的に仄かな輝きを放っている。

正に水の塔……。

その偉容に息を飲む移民団とアネットに老医師。

冒険者である『ハングリー バグズリー』の面々にもこれは驚くに値する物だったみたいだ。

各言う俺も想像よりも荘厳で立派な力作に少し驚いてるのは内緒だ。

水石の神殿塔の内部には、ひと回り小さな大理石造りの塔が建っ

ていて内部のプライバシーも守られているみたいで一安心。
この規模になるともう村とは呼べないなー、こりゃ。

「ようこそ、神都・リバイアへ」
俺は皆に旅の終わりを告げる。

「水神エバンニドが皆の移住を歓迎しよう！」
軽く神気を纏いながら神としても宣言し、受け入れを祝っていく。

これで彼らも彼女らも神都の民となった。
まだ驚きで固まっている皆を手の空いている人間が率先して誘導し、それぞれの希望を聞いて該当施設などに案内していく。

俺は先頭から離れ『ハングリー バグズリー』の面々に向かい、
先程予定していたマジックアイテムをバッグから取りだし、手渡し
てそれぞれに感謝を述べた。

「あの、私達も暫くここに滞在しても良いですか!？」
つかえつかえだがしつかりと言いきったアネモネに俺は頷き、

「リバイアの門は邪悪な者以外いつでも開放されているよ」

「ギルドも作っている予定だから見てみると良さ」と宣伝もして
おいた。

それで彼女らに失礼して別れ、どう開発したのか俺も聞きたため神
殿塔へ足を向ける。

下の居住区、元盗賊団と戦った洞窟に入ると道が二股に分かれ、中心に水の神殿塔の入り口が来る。

光石も新たに大量配置されているらしく、内部はかなり明るい。

扉は閉められておらずに中には礼拝堂よろしく長椅子が並び、奥が一際高く段になっていて、そこにギルドの受付にある様な高い机が一つ置いてあった。

背後には今の所、神像は無く変わりに聖印が建てられている。

「お帰りなさい、我が神」

左奥にある両開きの扉からヒノンが現れる。

どうやら升降機の魔法版みたいな乗り物らしい。

本来は搬入出専用なんだろうが人も乗れる。

もちろん、右奥には通常の階段がカーブに添ってつけられている様でそちらは大工達や手伝いなどが慌ただしく登り降りしている。

「まだ、内装は完全に完成していないので慌ただしいですけど、お気になさらず」

「上に参りますので乗って下され」と一緒に升降機のに乗り込んだ。

内部は10階建てになっていて俺とヒノンの執務室は9階にあるそうだが、最上階は会議室で大きな窓が開けられていて見晴らしが良

い。

今はまだ、それほど見るものはないが景色も後々生きてくるんだろつ。

執務室以外の部屋は今は空室で更に下は司祭を目指す人間用の寮になっているそうだ。

他に多目的室と調理場、地下には倉庫も有るらしく暫くの間なら塔内で生活を完結出来る防衛施設にもなっているらしい。

地上部分は俺が留守の間に粗方の場所決めを終え、地均しもほぼ終えているとの事。

大活躍してくれた王子は俺が迂闊に動けなくなったので、ここを拠点として自前の騎士と独自に動く事にしたそうだ。

エミリオは防衛の要だし、ヒノンは宰相の様な扱いになってしまったので暫くは内政に精を出した方が良くかもしれないな。

先行組のルビー姉さんも無事到着して、すでに銭湯作りに入ってるそうだし、盗賊団にいた謎の魔術師にも警戒して対策をとらないと……、依然やる事は尽きない。

ヒノンとあれこれと決めながら、俺は何か忘れているような気持ち悪さを感じていたが、この時は何だかわからなかった。

模範囚 □85

「□22、□43、は前線を構築……□85は遊撃し可能なら角を砕け、散開!!」

監査の命令に即座に反応した22と43はそれぞれの武器を構え突進。

私は少し回り込み側面から後方にかけての攻撃を狙う。

標的は事前に聞かされていた、リカウと言う牛系の魔物が三体。

30センチはある槍の様な角が額に1本生えた牛にしか見えないけれど意外と素早く、草を好んで食べるけれど雑食で肉なども好物でとにかく良く食べるそうだ。

人里にも降りてくる危険な魔物で戦闘の経験の無い人間では太刀打ち出来ない強さを持つ。

「バーイン デーグラス 夏迷う園 月日も迷い、その身を肥やす
そ・ら 蔓延る『ザプレイス!』」

後方に下がった監査が唱えた魔術によって雑草が束と育ち、リカウ達を捕らえんと繁り絡みつく。

1体のリカウを完全に絡めとり拘束。

2体目にもかなり絡み付いて動きを制限する。

正直、私達3人の肉弾では厳しかったのでやり易くなった。
もがき暴れるリカウの鈍ったやつを軽戦士系の22が担当し、戦士系の43が斬り込んだ所に合わせるようにメイスで角を砕く。
その衝撃で脳震盪を起こしたらしく、ふら付くりカウを43が2撃・3撃と首を狙い斬り付ける。

リカウは食肉としても優れ、毛皮を綺麗に剥げれば高値で取引される高級品に化ける。

しかし、角は脆くて加工が難しいらしく使い道が少ないので安く買い叩かれる……無くても構わないので重点的に狙えるのだ。

無力化された2体は22が止めを刺し巧みなナイフ捌きで素材を剥ぎ、既に血抜き作業に入っている。

元は食肉屋でもしていたんだらうか？

私はあんなに上手く出来る気がしない……。

余所見しているうちに最後のリカウも虫の息……、決着がつくのも直ぐだろう。

程無くして野外討伐奉仕が終了。

帰りも何事も無く速やかに王都に帰り、滅多に入れない風呂にありつく。

既に通い慣れた牢獄廊を監査と共に歩き、自分に与えられた独房に戻った。

「口85番、ご苦労だった。この調子で贖罪に励むように！」
カッチリした挨拶を返し一息付く。

踵を返す監査に隠れて溜め息を吐く……、サーナイアと呼ばれなくなり、あの事件から早くも2年もの月日が流れようとしていた。

入りたての頃はショックばかり大きくて気力も出ず、気持ちの切り替えも上手く行かずにふわふわと、暇を見ては面会に来てくれる姉に縋ってしまっていたけれど、一年も過ぎる頃には立ち直る事が出来てきた。

姉だってエバン君の側を離れて頑張っているのだ、私もっ！と負けん気が戻ってきたのが大きい。

昔から時間が解決するとは言うけれど、我が身をもって体感するとは思わなかったわ。

ここに入ってから気取った喋りも止めて久しい。

今の私は模範囚として個室牢に移され、訓練や野外奉仕・勉強等を行わせて貰いながら社会復帰する事を目標に励んでいる所。

このまま順調なら3年もしないで釈放されるかもしれないそうだから頑張らないとね。

と言うか、この刑務所は随分と囚人に優しいと思ってたけど、どうやらエバン君からの提案で囚人の扱いが変わったらしい。

まだ素直に「有り難う」とは言えそうに無いけれど生きてる気がしている。

ちなみに、今は神官能力は制限されているから魔法は軽い輪廻の

白しか使えないので野外活動の手前、棒術を習っている。

直接魔物と戦う危険な奉仕だけど、一番貢献度が高く素材が高く売ればボーナスも付くので効率が良い。

今まで棒術は習った事が無くて気分で振り回していたから、最初
は重さに振り回され両手に豆をこしらえては潰しと酷いものだった
けど、最近は取り回しもスムーズに脆いものなら破壊出来る様にな
ってきた。

姉さんには「うら若い乙女が豆や力瘤なんて作って、まあ」
なんて言われたけど、どっちもどっちだと思う。

今日は成功報酬として風呂にも入れたし食事にも肉が入っていた。
少し筋張っているけど臭い飯と言う程酷くない。

この点だけはエバン君を誉めても良いかもって思うのは現金かし
ら

この日は暫く勉強に勤しみ早めに就寝。
なんせ私達の朝は早いのだ。

光石も眠る頃に起き出して身支度を整え、兵士達に混じり早朝ト
レーニングと走り込み、術師系だからってあまり手加減は無い。
それぞれの模造武器での対人戦を行い、昼までは独房の掃除や清
掃と力仕事が続く。

昼飯を食べた後は少し休憩があり、この時間に面会や相談等を済ませる事になっている。

後からは希望者のみ勉強や野外奉仕に出る事になる。

これが模範囚の1日のモデルになる。

別に一般の囚人は基本、自由行動と待機の繰返しで問題を起こさなければ順当に釈放される。

早くて10年単位だけだね。

模範囚になればそれだけ釈放が早くなるし、強くなる事も出来る。

姉さんに報いるためにも、何より私の為にも、そして勿論、犠牲になった人達に本気を見せる為にも私は頑張ってみようと思っ次第なのだ！

囚われの日々

円錐型の高帽をきつちり被り、スタイリッシュなザマス眼鏡の監査が、靴音も高く私の牢の前に立つ。

「口85、いつもの面会が来ているぞ」

直ぐに返事をして彼女に続いて面会室に向かう。

ここ暫くは私も落ち着いてきたし姉の負担の軽減の為、ほぼ毎日だった面会は2週間に1回くらいに落として貰っている。

初めは「いらん気遣いは無用！」って言われてたけど、やっぱりお互いに良くないからって、何より姉にも人並みの生活があるのだ……老婆心かもしれないけどそこも気になるのだ。

や、……ほら、彼氏とかもいるかもしれないなんてね？

下らない事考えてる内に着いたらしい。

「口85、入室を許可する」

と言う監査の声で、思考に沈んでいた意識が浮上する、慌てて返事をして頑丈な扉を潜ると中は酷く殺風景で機能性しか見当たらない。

ま、当たり前か……。

直ぐ後ろに監査が控え、部屋の半分を仕切る障壁の向こうに既に姉が座っている。

「久しぶりね、サーナ。元気にしていた？」

「少し痩せたんじゃないのか、ちゃんと食べないと駄目だからね」などと早速心配癖が出ている。

「姉さん。大丈夫よ、相変わらず悪くはされてないわ」

そんな感じで、いつものようにお互いの近況報告やら姉の仕事の話し、必要な物をお願いしたりと取り留めの無い話で気持ちを近づける。

差し入れの量の多さに監査から待ったが入って姉がプリプリむくれるなど、小さなハプニングも含め穏やかな時間が過ぎる。

時に乙女のように、あるいは男勝りになったりと最近の姉の態度は忙しいけれど、それにも慣れた。

実際、姉に助けられたのは本当に嬉しかったし。

こんな事、本人には照れ臭くて絶対言えないけどね！

そんな中、気になる話題はやはり新しい都・リバイア関連の話になる。

姉からは既にエバン君の国と言うのは聞いているのだけど、まだ発展は止まらずに大きな都市に拡大しているなんて聞いても想像がつかないわ。

小さな盗賊団の運用でさえ、もう出来そうに無いよ……あれだ、敷地内に危険な魔物が現れないのが一番大きい理由なのかしらね？

他にも労働力になる各ギルドも複数の拠点を建てているし特に農業、工業と錬金術の発展はめざましいものがあるって話。

私にも関わりがあるのは、最近出回り出した写真と言うカード……、彼が提案したらしく瞬時に対象の姿を描き出す物だそうだ。

野外活動の際、魔物の資料についていたのを見ているけど画期的だった。

強い色しか乗らないのだけど大まかな体色が見てとれるから言葉で表しづらい魔物の特徴・危険そうな部位などが分かり易い。

魔術にもそれと似たような術があると聞いたけど、術者の魔力が無くても使える道具だそうでリバイアでは新しく情報士なんて職も出来たらしい。

ここを出たら一度は訪ねてみたいわね。

「その時はふたりでいきましょう?」

と姉が微笑んだ。

そんな、長いようで短い面会が済んだら直ぐにミーティング。

さっき話題に登った写真に写る魔物の姿。

詳しい話が済んだ後、ポロッと監査が「最近、魔物が増えた気がするな」とこぼしていた。

あまり気にしてなかったけどそうかもしれない……、自分達の野外奉仕の回数も多目だし、外では駆け出しやベテラン問わず討伐依頼も増える一方らしい。

ろくに調査に時間を割かない。

下準備の苦手な姉も、魔物が見付からなくて困るなんて事態になつてないものね。

不吉な気分に関われている内に話は終わっていたらしく牢の前から監査の姿が消えていた。

そんな事があつてから暫くの時が流れ、私は新たに魔物との契約について学んだり、他に広く世界について学んだりと忙しくしていた。

何でも動物に近い魔物や知能が高く敵対的じゃない魔物とは契約を介して、主従関係ではあるけれど絆を持つ事が出来るらしいのだ。触媒としてそれらを入れる器が必要だけど、比較的安価に手に入るのも魅力的。

女二人旅は危険だし頼もしい護衛にもなりそう。

主に私用だけだね。

軍の訓練に混じって鍛えてるとは言っても限界が見えて来てるの前衛系で無いので仕方無い。

そんな折り、提示された魔物の写真。

そこにはピンクの派手な蜘蛛が背中 of 荷台もそのままに写っていた。

彼、サイラーから渡されていた蜘蛛車だった。

てつきりあの後、野生に還ったかと思っていたけど元気そうに見える。

「今回の討伐対象はこの派手な蜘蛛だ」

「えっ!?!」思わず声が漏れた。

けど、冷静になるとこの場でこの写真があると言っことはそういう事かと妙に納得。

「すみません、討伐する前に私と交渉をさせてもらえませんか？」

「この子とは因縁が有るんです!!」

もし私を覚えていて、大人しくなったとしても契約が出来るかわからない。

怖いけど、見捨てたくない。

……………、暫く見つめ合いが続いた後に監査から折れてくれた。

「危険が認められ場合、直ちに排除に入るからな」

「仕方が無いからから魔石はこちらで用意するが、ツケだからな？」
人の悪い笑顔で颯爽と帰って行った監査。

くう、お堅いな。
この高級官僚め！

喋る魔物 「モモ」

今回の野外奉仕は、契約を真ん中に据えているので魔法が要る。

監査も渋々ながら封印を解いてくれるみたい。
国の命令でもあるしね。

特に特定の祝詞がある訳でなく、首輪を取るだけで神の息吹がしたから驚いた。

しかし、迂闊。

「あつ！ まって！」

あまりにも呆気なく解けたので、意識の切り替えが間に合わなかった。

生き物の生き死に関わる、輪廻の神官を舐めてはいけない……。

今まで見えてなかった死霊の怨めしい姿が、私目掛けて集まってくる。

「助けてくれ」と。

あっという間に周囲を取り囲まれた。

瞬時に発動した防御系パッシブスキルが発動して私は無事だけど、監査はかなりシンドイだろう。

「急がないと！」

『ゆらゆらとふるべ　恨みつらみも七十三夜　鎮めたまえ　あるべ
そわか！』

『ゆらゆらとふるべ　恨みつらみも七十三夜　鎮めたまえ　あるべ
そわか！』

片手で印を切りながら繰返し唱える事で死霊達の姿が薄れていく。

「大丈夫ですか、監査？」

「ああ、大事ない」

態度は変わらなかったけどやはり恐かったのだろう、握りしめた拳と小刻みに揺れる肩が雄弁に物語っていた。

なんて、軽いハプニングがあっただけどその他は滞りなく……。

北東から北に回り込んだ苔の多い谷で今は野宿三日目を過ぎ、やっと件の地域に辿り着いた。

あの蜘蛛達は高い所が好きらしく、彼我の距離は5m。

目の前に12体程たむろしている。

目当てのピンク蜘蛛、モモは割りと奥の方で大人しくしているみたいだ。

蜘蛛が動く度ざわざわと何かが擦れ合う音が響くのが不快で恐ろしい。

あれ等は巢を作らない、何故なら肉食系捕食者だから。

罾を張るより狩りを好むとサイラーは言っていた。

群れなのも痛いな！。

こちらの手勢は監査を入れて6人。

人間女性口95、以前一緒に組んだ戦士系の口43、人間男性キ305、同じくハ12。

まだ群れからは距離があるけど、戦いたく無いので早めの詠唱。

『我願うは信条の締結 群青の意思は双子にありらん 我……やつ、
うー……、やつう……。 がっ！』

痛〜！

舌噛んだわ。

うっわ、やった、恥ずかしい！

……て言つか、やば……い！？

あっ……失敗した！？

慌てて周りを見渡したら、「何してんの？」的に呆けたメンバーの顔達と目が合った。

あっ、珍しく監査も酷い呆れ顔。

そして、此方に気付いた蜘蛛さんズ。

いやん、見逃して？

テヘペロしたら許してくれないかしら……って、無いわよねー！

「何やってるんだ、貴様は。契約魔法の有効範囲は狭い、こんな所でやってどうする。」

「打ち合わせたろう！」

あー……、すみません。

それ、聞いてなかった時のだ。

「しかも、噛むとかつ！」

あう、押し殺した声が痛いです、はい。

フーっと、溜め息と深呼吸を一つ。

「仕方無い、気持ちを入れ換えて迎撃。」

「き・み・は・改めて、一言一句間違わずに丁寧に詠唱」

「その後、保持だ……、わかったな？」

「はいい！」

思わず背筋が伸びる。

「行くぞー！！」

監査の号令の元、囚人達も正気に戻り速やかに陣形を作って斬り込んでいく。

なんか私、最近この展開多くないかしら？

無駄だと知りつつも嘆息しながら長く難解な祝詞を紡いでいく。

今度は大丈夫みたい、難しい発音のエリアは過ぎた。

言われた通り発動手前で術を維持しながら皆の後を追う。

流石に敵の数が多かったから苦戦するかと思っていたら、まだ成体になり立てだったのか倒せない事は無いみたいだ。

派手に動くと集中が解けそうで援護に回れないのがもどかしい。

「そろそろ有効範囲だ、最後くらい決めてこい」

監査の後押しで祝詞を吐き出した。

そんなモモと私との間を六芒星の魔方陣が仮の繋がりを作り出す。白い光と燐光立ち上る、幻想的な光景から聞こえてきた声は妙に

カン高く

「遠くて気付かんかったけど、姐さんやないかー、元気しとった？」

なんて、気の抜ける反応だった。

正式に契約獣として絆を結びたい、と言ったら一つ返事で承諾だったのは言う迄も無いわよね。

断った場合、倒さないといけないのも理解している雰囲気がある。

モモと契約した途端に取り巻きの蜘蛛は逃げていったけど、後で聞いたら勝手に着いて来ていただけで何の関係も無いらしい。

妙に頭良いな？

因みに今まで私は、モモちゃんだと思ってたけど、雄だそうです。

ピッチピチの45歳らしいです。

もう、イヤだ……、あふん。

なんてやってたら監査に、「やけに会話が具体的だが、それは妄想ではないのか？」と不思議がられた。

そんなモモの馬車内。

曰く、「契約獣はそんなに頭が良い訳無いし、人間の言葉を理解させて尚且つ会話させるのは難しいだろう?」と言う。

「それに、でかいだけの蜘蛛だしな」

喋る魔物……。

なんか引つかかるわね、それ?

心の傷

基本、帰りはずっと蜘蛛車の上、懐かしい荷台で過ごしていた。

少し、性格にがっかりしたとは言え、かつて気を許した生物だものね。

魔物だけでもさ。

まだ空きがあるから乗りたい人は乗ったら良いのに、監査以外の人は少し離れて遠巻きに、警戒を解く事無く歩いている。

怖いかな。

慣れると可愛いのよ？ 精神はおっさんだけど。

私は現在、腹部に乗って頭を搔いてやりながら、絶賛お話し中。

肝の据わってる監査は荷台でくつろいでるので今はスルー。

「んで、監査も気にしてるみたいだけど、あんたって何時から共通話させるようになったの？」

「一番古い記憶にも姐さんとこの荷台があるから、最近やないかなー？」

「私と会う以前、何処で何してたか思い出せたりする？」

「食って、寝て、食っての記憶しかないねんなー、勿体無いわ。子育ての記憶は無いからツガイにはなつとらんね」

「そんな事聞いてないから」

少し爪を立ててみる。

毛皮と皮膚が厚いから意味ない筈なんだけど、痛がる芝居までするのね……。

「あっ！！　なんか知らん人に石かなんか飲み込まれた記憶あるな」。けど、輪郭がなんかはつきりせんやわ、この辺の記憶」

珍しく物凄い思い出そうとしてる。

「ぐつつ、気持ち悪いわ」

とか、ホントしきりに思い出そうとしてるけど無理みたい。

「わかった、わかったから、ゆっさゆっさしないで、高くて怖いから、もう！」

気を取り直して。

「モモ以外に同じくらいの頭の良さの魔物って居る？」

核心に斬り込んでみたけど、結果はス力。

そして、このやり取りを隣で聞いていた監査は微妙な顔をしておりました。

仕方無いじゃない、独り言を言ってる様に見えてもちゃんと会話してま・す！

モモに発声をする気が無いから返事は直接頭に響くのよー！

もう！

今回もこんな役回りなのかしら？

今度、エバン君に声を出させる道具作って貰おっかな。

唐突に、能天気にも牢を出てからの事を考えている自分、満たされてる自分に気が付いた途端、嘔吐感が込み上げる。

そして思い出す、あの時の記憶。

記憶が感情と情景を伴ってフラッシュバックする。

繰り返し再生される悪夢、己の口からは止め処なく「ご免なさい」としか出てこない。

自分のなのか、他人のなのかわからない爪が自分を抱き締める肩を深く浅く挟む。

モモの毛並みが血の赤に見えて目を閉じる。

目蓋の裏に映るのも殺めた人達の白い顔、青白く透ける何か？

生きるのが怖い。

「姐さん、どうしたん？　しっかりしー！」

モモの心声も壁から先に届かなかった。

- - サイド監査 - -

無事……、とはいいがたいが穩便に契約出来たらしいピンク蜘蛛の荷台に同乗し国に戻るようになった。

皆は引いているみたいだが、行軍の負担が減るのは単純に喜ばしい。

揺れも少なく乗り心地も悪くない。

可能な限り荷台に荷を積んだので、流石に手狭になってしまったがまだ数人は乗れる空間がある、無駄に広いな。

彼女は直接、蜘蛛の腹部に乗って、契約獣を質問攻めに行っている様だ。

聴こえない声の契約獣に向かって、彼女の言葉に補足を足していく私もそれなりに物好きかも知れんと頭上を扇ぐ。

気付けば時刻は夜間に近く、そろそろ夜営地候補から今日の宿泊場所を作らなくてはな。

しかし、話の弾んでるらしい彼女を見ていたら、ジワジワと様子がおかしくなっていくのに違和感をおぼえた。

嫌な予感がする。

昔から、この手の感覚を外した事は無い。

遠巻きにしていた囚人達も異常に気付いた。

火が付いた様に喚き出す、口85番。

思い当たる節は一つ。

「ちいっ！ フラッシュバックか」

何かが引き金になって過去の不快な体験が生々しく蘇る症状、精神病の一種らしい。

さして長くない爪が自身の肩に食い込む程強く身を縮めた彼女の頬を強く叩く。

「しっかりしろ！ 気を確かに持つんだ、それはもう終わった事だ

「!!」

尚も彼女の瞳は焦点を結ばない。

「そちらを見つめるんじゃない!」

うわ言を吹き散らす様に根気良く諭していく。

小一時間もそうしていただろうか?

いつの間にか彼女は気を失ってしまっていた。

傷の手当てをしてやり、張らせておいた天幕に運び込む。

心の傷か……、厄介なものだな。

契約獣は主の意識が無い時は器に戻るものだが、この蜘蛛は違うらしい……。

つくづく異例だな、私の声が理解出来るかわからなかったが事情を説明すると大人しく器に帰った。

その後、一晩していくらか回復した彼女は全員に詫びを入れて歩いたようで、ギクシャクしていた囚人達も割りと軟らかな対応を始めたからか今日は空気が柔らかい。

醜い傷が付いてしまった肩はこっそり自分で癒したらしく、もう何事も無いようにつるりとしていたが、何時もそうしているのがバレバレだ。

気を張る事で保っている気付かない、彼女自身の心だけは癒せていないのが神の皮肉に見えたのは感傷的に過ぎるだろうか？

新年は牢屋の外で……。

あれから暫く、精神が不安定だったの。

季節が巡る度、少しずつ悪夢の回数が減ってきたけど忘れた訳じゃない。

見ない訳じゃないけど、夢は夢なんだと言いつけられ様になった。

代わりに薄くけど目の下に隈が出来て取れなくなった。

可愛くないけど仕方無い。

少し回数は減らしたけど野外奉仕も辞めて無いし、勉強も再開、休んでた分も取り返したわ。

その甲斐あって、遂に反省と成果が認められた。

4年目の終わりと同時に晴れて釈放となるだってさ！

予定より一年も早い。

既に馴染んでしまった牢での暮らし、感慨深いものがある。
思えば監査とも長い付き合いになった。

最初は一杯、迷惑をかけて。

対立したり、姉と揉めたりしてこっちがハラハラしたり。

小さなイジメに初めに気付いたのも監査だった。

今では姉の次に私の情けない所を知っている……、もう一人の姉
とも言えるかもしれない。

今までは職務としての付き合いだったけど、良く頑張った……、
今度は対等だって出所祝いについてお互いの名と住所を交換した。

そんな彼女はアステリナと言うそう。

早速、姉に買って貰った携帯用通話器・マギフォンにリスト登録
した。

この道具は遠距離通話のマジックアイテムで登録した人間の生体
波長を記録、記述を利用して簡単に遠くに居ても会話出来ると爆発
的に広がったそうだ。

外で暮らすならもう必須、今では無くてはならない道具になった
そうだ……もちろんリバイア製。

細長い板に薄くて曲がる透明な金属が入ってるそうで、スクリーン
と言うそう、姉は画面って言ってた。

スクリーン端に付いてる魔石に触れながら、通話したい人物を思
い浮かべると名前と情報を組み込んだ簡易陣が浮かんで通話可能に
なる。

消費するのは使用者の魔力や生命力でどちらでも選択出来るのは
地味に嬉しいとマジックユーザー以外の層からの支持も熱い。

庶民に買えない事もない値段設定なのが、腹黒いと思うけど便利
さには勝てないわよねー。

私が学ぶ傍ら、暇な時間に必ずモモにも発音の練習をさせてた位
だからマジフォンに熱を上げるのもわかるでしょ？

娯楽が無い牢の独り暮らしは強がったって淋しいのだ。

ちなみにモモは簡単に喋れるようになりましたー。
酷い事にやってみなかつただけらしいの。

「魔物にそんな発想を求めないでくれませんか？」と鳴かれたけど、
これが私の方針なんだから頑張つてよねー。

こうして日々は矢の様に過ぎて行き、残る日にちも後僅か。

楽しい妄想で瞬く間に過ぎ、遂に出所する事になりました！

出所当日、勢い余って買い込んできたオシャレ用品の数々は少な
くして貰って身に付け、不要な分は姉に返した。

余りに多かったのも、あんなに着けたら重くて動けないし可
愛くない。

今は淡い赤のリボンで髪を結い上げて纏めて婦人風に、結い上げ
はロールパン型で細長く立てて纏めてある。

鎧は襟の浅い白いソフトレザーのクロスに、少し余裕のある造
りのボトムス、久しぶりにヒールの高い靴を履いている。

ワンポイトで側面の留め具に花の飾りが付いてて可愛い。

鎧の上には花のブローチの留め具のマントを羽織っている。

お化粧だって薄く施しているので隈も気にならない。

「うん、気持ち良い！」

けど、姉さんたらウサ耳フードの帽子なんて用意してて困ったわ、
もうそんなのが似合う年じゃないわよ。

なんて、笑い合う。

メインの武器は嵩張らないメイスにして貰って今は腰に吊ってあるので目立たない。

ともかく、外は吐くが息は白くなる程寒いけど、牢みたいなうすら寒くも無くとっても快適。

見送りに出てくれた監査官（アステリナとは別の人）からお決まりの送り出し台詞を受け取って、姉と手を繋いでえいっやつと門を潜った。

そうして見たものは……、

別世界だった。

道行く人の鎧が見た感じかなり軽めであつたり、なかなか見た目にも気を使った格好をしている人が多いみたいなものだったら私も驚かない。

4年も経っているんだから変化も有るかなって思ってたけど、予想の斜め上背面攻撃程にガツンと来たわよ。

最近まで岩が剥き出しだった通路は何か別の素材で覆われて歩きやすくなり、町並みは小綺麗に整えられているみたいだ。

何となく店も増えているみたいだし、奴隷ですらそれなりの格好をしているのが不思議に映る。

片隅では小手に埋め込まれたマギフォンで喋りながら早足で歩く冒険者や一般人を見かけたり。

なんか高級そうな食べ物が並んだ屋台や、見た事もない菓子を売る店。

見た事もないマジックアイテムを使いこなす人々。

やっぱり切っ掛けはリバイアらしい。

ここまで着たら、これ程とはって感じね。

珍しいものが多すぎて今度、二人で住む家まで質問攻めにしてしまった。

もちろん、我慢なんて出来る訳も無く、結構な数の買い食いをして帰る。

「ダイエットしないと太るぞ？」って嫌ねw

何でもリバイアで提唱された『混沌科学』と『魔道力学』が評価されて広く一般に浸透したのが始まりで、専門職の方々がそれらを取り入れた商品を開発。

皆の作った作品が増えてきた頃、何割かの売上げをリバイアに還元する契約をするなら自由に販売しても良いと言う事になって今に至るそう……。

だら姉さんでも2台もマグフォンを買えた訳か。

なんて話してる間にも、浮遊する板に乗った軽装の青年が脛くらいの高さを滑るように飛んでいくのを暢気に見ていた。

私、頭が痛くなってきたわ……、けど気持ちの昂りは誤魔化せないかな？

とっても楽しい♪

こうなったら楽しまなきや嘘よね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1340t/>

ATR

2011年12月13日11時47分発行